

實ニ海上權ノ勢力ハ恐ルベキモノデ、五萬ノ陸軍ヲ活動セシメタノハ僅ニ二千二百餘人ヨリ成立サレタ軍艦及ビ運送船デアル、之レハ敵ニ海軍力ガ少シモ無イカラ、此ノ如キ少數ノ軍艦モ大功ヲ奏シタノデ、島國ニ於テノ戰鬪ハ如何ナル場合ニ於テモ敵手ニ優ル海軍力ヲ要スル事ハ愈明白デアル、萬一外國ト九州地方デ戰端ヲ啓ヒテ我海軍ガ敗走シ、敵ノ爲メニ海上權ヲ奪バレタトスレバ、必ズ鹿兒島賊徒ノ如キ運命ニ至ルデアラウ、其時ニハ如何ニ勇猛ナ陸兵ガアツテモ活動ヲ恣ニスル事ガ出來ナイデ、終局ノ勝利ハ必ズ敵ニ歸サ子バナラヌ、故二十年ノ役ハ内亂デアルケレド、充分研究ノ價値ガアルト思ハレル、

第十四章 日清海戰

是レヨリ日清海戰ヲ申述ルノデアアルガ戰況ヲ説クト非常ニ時間ヲ要スルシ、且ツ軍令部デ編纂シツ、アル二十七八年海戰史ヲ御覽ニナレバ細大洩サズ掲載サレテアルカラ、本講演デハ本役ノ主眼タル黄海々戰ヲ除クノ他ハ凡テ略シテ專ラ海上權ノ得失ニツキ研究スル積リデアアル、而シテ先ヅ之レヲ大別スルト凡ソ五期トナル、即チ第一期ハ開戰前ヨリ豊島ノ海戰迄之レハ彼我ノ海上權ガ互角ノ時代デアアル、第二期ハ豊島海戰ヨリ黄海々戰迄之レハ我が海上權ノ漸進時代デアアル、第三期ハ黄海々戰ヨリ旅順口占領迄之レハ我海上權ノ發

二十七八年役
ト海上權ノ五
期

達時代デアアル、第四期ハ旅順口占領ヨリ威海衛陷落迄之レハ我海上權ノ全盛時代デアアル、第五期ハ威海衛陷落ヨリ澎湖島占領迄之レハ我海上權ノ南方ニ波及セル時代デアアル、尙之レヲ一々項ヲ分チテ詳論シマス、

第一期 開戰前ヨリ豊島海戰ニ至ル

之レニ先ダツテ開戰前ニ於ケル彼我海軍ノ勢力ヲ比較スル必要ガアル、併シ此勢力ヲ比較スルノハ實際至難ノ事デアツテ、唯單ニ表面ノ勢力バカリヲ比較シテ定メルト云フ譯ニハイカナイ、即チ無形ノ勢力モアルガ、今ハ先ヅ數字上ノ事ダケヲ比較シテ見マス、併シ是トテモ至當ノ比較ヲ取ルト云フコトハ難イノデアアル、何故ナレバ支那ノ海軍ハ軍令軍制共ニ一致ヲ闕テ居ル、即チ北洋海軍、南洋水師、福建水師、廣東水師ノ四ニ別レテ、之レヲ司ツテ居ルモノハ北洋大臣、南洋大臣、閩浙總督、兩廣總督デ、各頭領ヲ置テ之ヲ率非サセテアルガ、其戰法軍略等ハ各異ナツテ從ツテ此四艦隊ガ運動ヲ一ニスルコトハ出來ヌ、又氣脉トテモ通ジテ居ラナイ、即チ進ンデ敵ヲ攻メルニモ、退イテ國ヲ守ルニモ、個々別々ニ行フノデ一致シテ事ニ當ルナドト云フコトハ思ヒモ寄ラヌ、一例ヲ舉ゲテ見ルト、明治十七年ノ清佛戰爭ノ時、佛國ノ海軍中將クルールバーガ、其艦隊ヲ率非テ福建省ニ來襲シタ際、閩浙總督ハ福建水師ガ危イト察シタモノデ、北洋海軍、南洋水師ノ兩艦隊ニ向ツテ應

日清兩國ニ於
ケル海上權ノ
互格時代

援ヲ求メタ、然ルニ北洋大臣、南洋大臣ハ事ニ托シテ援助ヲ與ヘナカッタ、是ガ爲メニ福建水師ハ佛國艦隊ノ攻撃ニ遭ヒ、一敗忽チ十餘艦ヲ失フニ至ツタ、之レヲ觀テモ共同シテ敵ニ當ルノヲ嫌フ事ガ推知サレル、又此度ノ戰ヒデモ先ヅ日本艦隊ト相對スルノハ北洋艦隊デアルカラ、李鴻章ハ南洋大臣劉坤一ニ南洋水師ノ北行ヲ促シタ、ケレドモ南洋水師ノ將校等ハ日本軍ガ或ハ南部ニ上陸スルカモ知レヌト云フノヲ口實ニシ、殊ニ自分達デ其ノ風説ヲ擴ゲテ置テ謝絶シタ、斯ノ如ク一致シテ居ラナイノデアルカラ、其海軍力ヲ列ベテソレヲ直チニ我海軍力ト比較スルハ頗ル當ヲ得テ居ラナイト思フ、併シ兎ニ角此處デハ清國ノ海軍トシテノ勢力ヲ比較シテ見マスガ、先ヅ明治十年以後ノ我海軍沿革ヲ述ベルノ必要ガアル、是ヨリ先キ、我帝國ハ鹿兒島ノ内亂ニ際シテ、大ニ海軍ノ必要ヲ感シタモノデ、亂平グニ及ンデ先ヅ軍艦清輝ヲ歐洲ニ回航セシメタ、清輝ハ始メテ本邦人ノ手ヲ以テ橫須賀造船所デ製造シタモノデ、之レガ維新以後ニ於ケル遠洋航海ノ嚆矢デアル、越テ十五年朝鮮京城ノ變ニ當リ、海軍ハ八隻ヨリ成ル中艦隊ヲ仁川ニ派シテ我居留民ヲ保護シ、同十七年ノ變ニモ亦七艦ヲ派遣シタガ、此年東海鎮守府ヲ橫須賀ニ移シテ橫須賀鎮守府ト改メ、水兵屯營ヲ橫須賀屯營ト改稱シ、十八年ニハ始メテ徵兵令ニ依リテ水兵二百人ヲ募リ、十九年ニハ橫須賀ノ外尙吳及ビ佐世保ニ鎮守府ヲ置キ、且ツ屯營ヲ廢シテ海兵團ヲ各鎮守府

十年後以後ノ海軍沿革

所在地ニ設ケ、漸ヲ以テ水雷隊ヲモ軍港要港ニ設置スルコト、ナツタ、又中艦隊司令官ノ職ヲ解キ、常備小艦隊ヲ編制シタガ、後チ有力ナ軍艦ガ増加シタノデ二十二年五月六艦ヲ以テ常備艦隊ヲ編制シ、同年旭日ノ徽章ニ更ニ光線ヲ添畫シテ帝國軍艦旗ト爲シ、二十六年ニハ全海岸及ビ海面ヲ五海軍區ニ分ツタノデ、更ニ維新以後ノ海軍勢力伸張ノ程度ヲ示ス爲メ、明治二年、五年、十年、十五年、二十年、二十五年ニ於ケル軍艦ノ隻數及ビ噸數ヲ左ニ列記シマス、

年次	艦名	船質	噸數	長	幅	馬力	乘組定員	總艦船數	總噸數
二	東	木製甲鐵	一、三五八	一五三	三一	一、二〇〇	十五年十二月改定	七	三、五六一
	富士山	木	一、〇〇〇	二二四	三三	一八〇	三二二		
年	千代田形	同	一三八	九七	一六	六〇	十一年一月改定	七	三、五六一
	大坂	鐵	四四〇	一八七	二八	一一〇	四四		
	飛隼		二〇〇	一一〇	二四	七〇			
	飛龍	木	二七〇	一六〇	二七	九〇			
	快風	同	一五五	一〇一	二二	一			
五	東							七	三、五六一
	富士山								
	千代田形								

五															十					雷電
雷電	石川	清輝	淺間	蒼龍	第一利根	肇敏	孟春	鳳翔	筑波	攝津	龍驤	春日	第二丁卯	日進	千代田形	富士山	東	雷電		
																		木		
																		三七〇		
																		一三五尺		
																		二二尺		
																		一二八		
																		十四年		
																		八五五六		
																		三六二八		
																		二六二		
																		二七、五四三		
																		四〇、〇〇〇		
																		水雷艇 一		
																		艦船 二五		

二六二

二															年				
清輝	淺間	孟春 (廢十月)	鳳翔	筑波	龍驤	春日	日進	千代田形	富士山	東	一號 水雷艇	第一回 漕 (館山、改、九月)	磐城	比叡	金剛	扶桑	天城	迅鯨	
											鋼	同	木	同	鐵骨木皮	鐵製鐵帶	同	木	
											四〇、〇〇〇	五四四	六五六	二、二四八	二、二四八	三、七一一	一、〇三〇	一、四五〇	
											三一、〇九〇	一三四	一五四	二三一	二三一	二二〇	二〇五	二四九	
											三、八〇〇	二六	二五	四〇	四〇	四八	三〇	三一	
											四三〇		五九〇	二、二二七	二、〇三四	三、五〇〇	七二〇	一、四〇〇	
													同、十三、九二	二五五	二五五	同、十二、月、改、二、九、五	一三〇	員外 一七〇	
													同、十三、九二					二	

第十四章

三六三

開戰前日清兩國軍艦勢力比較一覽略圖

備考	軍艦隻數		合計排水量		平均實馬力		平均速度		平均艦齡	
	重砲合計數	輕砲合計數	速射砲合計數	機砲合計數	水雷發射管合計數					
本圖ハ開戰以前ニ於ケル日清兩國軍艦ノ勢力如何ヲ一目瞭然タラシムル爲ニ畫ケルモノニシテ赤色ハ帝國青色ハ清國トス而シテ其範圍ノ大ナルハ比較的強勢ヲ示スモノナリ假令ハ帝國軍艦ノ隻數ハ清國軍艦ノ約五分ノ二ニ過キササルモ其速射砲ニ於テハ殆ント十倍ノ多數ヲ占ムルカ如キ等ナリ										

日清兩國ノ海軍人及運送船隻所及造船廠

更ニ海軍々人ノ數ヲ比較シテ見ルト帝國ハ將校及ビ相當官ノ現役ニ居ル者ガ一千四百一十一人、准士官ガ二百七十人、下士ガ一千七百二人、卒ガ八千〇五十五人、豫備役ニ居ル者ガ將校同相當官ガ百五十一人、准士官ガ十三人、下士ガ百二十三人、卒ガ一千三百七十九人、後備役ニ居ル者ガ將校及ビ相當官ガ九十二人、准士官ガ二十二二人、下士ハ無シテ、卒ガ八百二人、總計ガ一萬二千三百六十七名デアアル、然ルニ清國ハ人員ガ明瞭ニ知レテ居ラナイ、略分ツテ居ルノハ、北洋海軍諸艦ノ乘組員ガ合計約三千人デ、南洋水師ハ約二千三百人其他ハ判然セヌカラ對照シテ優劣ヲ定メルノハ難事デアアル、併シ略伯仲ノ間ニアルト思ハレル、次ニ造船所ノ數ヲ比較シテ見マスト其當時帝國ノ造船所ハ官有ガ橫須賀ニ吳、ソレカラ私有ガ東京ノ石川島、大阪ノ平野鐵工所、長崎ノ三菱造船所、神戸ノ川崎造船所デ、船

備考	艦				艇	
	數	計	器	兵	數	員
本表ハ朝鮮事件發生以前ニ於ケル兩國軍艦水雷艇勢力ノ一班比較ヲ示スモノニシテ軍艦ハ其項目中我レハ六項清國ハ四項ノ優點ヲ占メ水雷艇ハ彼我ノ隻數殆ント同等ナレドモ他項ハ我國全ク優點ヲ占ム但シ清國水雷艇合計排水量ハ其中十二隻未詳ナルヲ以テ假リニ一隻五十噸宛ノ割合ヲ以テ算出セルモノナリ	水雷發射管	機砲	速射砲	輕砲(四七密)	艇	速射砲及機關砲
	四二〇	一〇六	二二七	三一〇	三九	二六
	三九	二二二	二二〇	一三六		二二
		二二二	二二〇	一三六		
		二二二	二二〇	一三六		

渠ト船臺トハ合シテ十箇アル、即チ横須賀造船所ニ船渠ガ三箇、吳ニ一箇、石川島造船所ニ一箇、平野鐵工所ニ一箇、三菱造船所ニ一箇デ、引揚船臺ハ三菱造船所ニ一箇、神戸ノ川崎造船所ニ二箇アル、又清國ノ造船所ハ旅順口、大沽、上海、福州、廣州デ、船渠ト船臺トハ合シテ八箇アル、即チ船渠ハ旅順口ニ二箇、大沽ニ一箇、上海ノ江南機器局ニ一箇、福州ノ馬尾船政局ニ一箇、廣州ノ黄埔ニ一箇、引揚船臺ハ福州ノ馬尾船政局ニ一箇デ尙ホ表ニスレバ左ノ如クデアル、

帝國官私有船渠船臺表

所在地	官有		私有	
	名	稱	名	稱
横須賀	造船部第一號	一三〇、五〇 ^米	造船部第二號	一四八、五〇
	造船部第二號	二八、〇	造船部第三號	八九、三五
吳	造船部	二四、二	造船部	一二五、〇〇
東	石川島造船所	二七〇、〇〇 ^米	京	二七〇、〇〇 ^米
	長(上)部	二六、〇〇 ^米	幅(上)部	三〇、〇〇 ^米
	深	九、〇 ^米	潮	一四、〇〇 ^米

所在地	名	稱	長 (船架上)	幅 (船架上)	深 (大潮時ニ於ケル入口ニ於)	搭載重量
大阪	平野鐵工所		二二五〇 <small>呎</small>	四〇 <small>呎</small>	一〇 <small>呎</small>	一二、六六 <small>噸</small>
長崎	三菱造船所		四四三八 <small>呎</small>	一〇 <small>呎</small>	四六、三	二七、六六 <small>噸</small>
長崎	三菱造船所	私有引揚船臺	七五〇 <small>呎</small>	三〇 <small>呎</small>	一一〇〇 <small>噸</small>	
神戶	川崎造船所		九〇〇 <small>呎</small>	二四	二〇〇〇 <small>噸</small>	
神戶	川崎造船所		五〇三 <small>呎</small>	一九	五〇〇 <small>噸</small>	

清國船渠船臺表

所在地	名	稱	長 (船架上)	幅 (船架上)	深 (大潮時ニ於ケル入口ニ於)	搭載重量
旅順口	旅順船塢	第一號	五〇〇 <small>呎</small>	八〇 <small>呎</small>	三二 <small>呎</small>	
旅順口	旅順船塢	第二號	一一〇 <small>呎</small>	二五	未詳	
大沽	大沽船塢		三三五 <small>呎</small>	四〇	一一三	
上海	江南機器局船塢		三二五 <small>呎</small>	六〇	一九	
福州	馬尾船政局船塢		三九〇 <small>呎</small>	九〇	一一三、五	
廣州	黃埔船塢	第一號	五〇〇 <small>呎</small>	八五	一四	
廣州	黃埔船塢	第二號	三五〇 <small>呎</small>	五九	一八	

所在地	名	稱	長	幅	搭載重量
福州	馬尾船政局船架		三三〇 <small>呎</small>	未詳	未詳

之レハ帝國ノ方ガ優ツテ居ル、次ニ運送船ヲ比較シテ見マスト其當時帝國ノ船籍ニ載セテアルモノデ百噸以上ノ漁船ノ數ハ三四艘デス、其噸數ハ合計十六萬六千四百十八噸デ清國ノ有スル漁船ノ數ハ三十五艘、尤モ是ハ小形ノ分ハ除イテアル、即チ招商局ニ屬シテ居ルモノガ二十九艘、開平礦務局ニ屬シテ居ルモノガ四艘、臺灣商務局ニ屬シテ居ルモノガ二艘トナル、併シ其噸數ハ明瞭デナイカラ比較シテ見ルノハ難事デハアルガ、勿論帝國ノ方ガ遙カニ優ツテ居ル、以上ガ先ヅ形ノ上ニ現ハレテ居ル比較デ、是ガ開戰前ニ於ケル兩國海軍ノ勢力ト見テ宜カラウト思フ、サテ兩帝國ハ平時相對峙シテ暗ニ東洋ノ霸權ヲ争ツテ居タガ、此ニ至テ愈々武力ヲ以テ雌雄ヲ決スルノ場合ト爲リ、我海軍ハ漸ク活動ヲ始ムルノ時機ニ至ツタノデアアル、併シ此當時、我ハ專ラ對馬海峽ヲ勢力範圍内ニ置キ、清國ハ渤海黃海ヲ勢力範圍内ニ置イテ居ルカラ、朝鮮西海岸ニハ未ダ孰レノ勢力モ及ンデ居ラヌ、故ニ彼我共ニ艦隊ノ運動ヲ以テ先ヅ此方面ヲ制シヤウト努メタガ、我レ遂ニ清國ヲ凌駕スル勢ヒトナツタノデ、即チ二十七年六月二日ノ内閣會議テ愈々出兵ト極マツタ、所ガ陸軍ノ出兵ハ多少ノ時日ヲ要スルノデ、少シデモ機ニ後レルト仁川京城間ノ要路ヲ清國軍隊ニ占領

サレル虞レガアルカラ、取敢ヘズ海軍ヲ以テ要地ヲ占メヤウト云フコトニナツテ、直チニ八重山ヲ仁川ニ派シ(勿論大島公使モ乗ツテ居タ)一方デハ清國福州ニ居ツタ所ノ艦隊ヲ釜山ニ呼返シ、尋デ仁川ニ廻航セシメ、勢力ヲ此處ニ集メ、陸戦隊ヲ上陸セシメテ京城仁川間ノ要害ヲ占メ、清兵ヲシテ此地方ニ據ルコトヲ得ザラシメタ、是レ實ニ機敏ナ處置デ清國ノ軍隊ガ牙山ニ上陸シテヨリ僅々十四時間ノ後デアツタカラ、清國政府モ流石ニ其神速ナルニ驚クノ外ナカツタ、其他六月初旬ニ於ケル海軍ノ主ナル動作ヲ舉ゲテ見マスト左ノ如クデアアル、

我海軍ノ機敏ナル動作

- 一 各鎮守府ニ何時出帥準備ノ命令下ルヤモ圖リ難キヲ以テ各般ノ注意怠ルベカラズトノ内訓ヲ發シタ、
- 一 横須賀碇泊ノ軍艦吉野、八重山ノ二隻ニ至急出帆ノ準備ヲ命ジタ、
- 一 清國派兵ノ狀ヲ偵察セシムル爲メ芝罘港ニ在ル軍艦赤城ニ電命シテ威海衛ヲ經テ仁川ニ回航セシメタ、
- 一 福建省馬祖島ニアル常備艦隊ヲ釜山港ニ回航セシメ、尋デ釜山港ヨリ仁川ニ移動セシメタ、
- 一 各非役艦ノ修理工事ヲ急ガシメ豫備艦ヲ就役セシメタ、

當時清國政府ハ我國ガ斯クマデ敏活デアラウト豫想シナカツタ、只一圖ニ陸兵輸送ト云フ事バカリ考ヘテ居ツテ海上權ニ重キヲ置カズ、仁川港ニハ僅ニ濟遠、平遠、揚威、操江ト海軍附屬ノ運送船飛虎ノ五艘ダケヲ派遣シテ、艦隊ノ主力ハ威海衛ニ集マツテ居ツタ、尋デ我が陸軍ガ京城ニ到着シタカラ、我海軍ノ運動ハ忽チ一變シテ、仁川ニハ通報及ビ我居留民保護ノ爲メ八重山、武藏、大島ノ三艦ヲ留メテ、其他ノ諸艦ハ六月二十一日ニ朝鮮ノ南岸ニ退イテ佐世保ヲ策源地ト爲シ、對州、五島、釜山、巨文島、濟州島ノ近海ヲ扼シテ本國ト釜山トノ航路ヲ確守シ、七月下旬ニ至ツテ、橋立、嚴島、高千穂、扶桑等ノ準備ガ出來タナラ更ニ退守ヨリ一步ヲ進メテ敵ノ海軍根據地ヲ突イテ其艦隊ヲ破壊スルノ決心デアツタ、讎ツテ清國艦隊ノ動作ヲ見ルト、六月中旬頃カラ漸ク活動シ始メ、二十二日即チ我艦隊ガ佐世保ニ向ツテ出港シタ翌日ニナツテ、北洋海軍總兵林泰曹ガ、鎮遠ニ乗ツテ超勇、廣丙ヲ率井テ仁川ヘ入港シ、濟遠、平遠、揚威、操江ト合シテ頗ル壯シナ勢ヒヲ示シタ、此時ハ我ハ一旦退守ノ方針ヲ取ツテ、彼ハ反ツテ進取ノ位置ニ立テルヤウニナツテ來タ、斯ノ如ク敵ノ艦隊ガ活動ヲ開始シ且ツ侮ルベカラザル勢力ヲ有ツテ居ルノデアアルカラ、其餘波ハ遠ク我沿岸ニ及ビ、其警備ヲ促スコトニナツタモノデ、六月三十日ニハ全國海岸ノ警戒ヲ嚴ニシ、海上ト陸上ト通信ヲ便ニスルガ爲ニ海岸望樓條例ヲ制定發布シ、同時ニ最モ樞要

ナル海角十一箇處ニ臨時望樓ノ建設ヲ爲シタ、尋デ開戦トナラバ南部諸島ハ勿論九州沿岸ハ敵ノ來襲ヲ受ケルト云フ虞レガアツタモノデ、要所ニ軍隊ノ豫定配附ヲナシタ、是レ皆清國海軍勢力ノ影響ガ我が沿岸ニ及ボシタノデアアルガ、之レト同時ニ、我艦隊ガ把持シタル勢力ノ餘波モ亦彼レノ沿岸ニ及ボシタモノデ、彼レモ亦沿岸ノ防備ヲ嚴ニスルヤウニナツタ、然ルニ是ヨリ先キ仁川ト牙山ノ間ヲ往來シテ居タ林泰曹ハ、初メ專ラ仁川ニ軍艦ヲ碇泊セシメテ居タノデアアルガ、後チ牙山ニ移ツテ戦時ノ計ヲ畫シ、屢電報ヲ發シテ水雷艇等ノ増派ヲ請求シタ、然ルニ李鴻章ハ之ヲ許可シナイデ、唯海陸諸將ニ命令ヲ下シテ自國沿岸ノ防禦ヲ嚴ニサセタガ、六月ノ末ニナツテ日清兩國間ノ關係益切迫シタノヲ見テ、七月一日ニ至リ仁川ニハ揚威一隻ノミヲ留メテ、他ノ諸艦ヲ悉ク威海衛ニ引揚ゲタ、是レ蓋シ充分戦闘準備ヲ整へ、一大艦隊ヲ組織シテ、更ニ仁川附近ニ至リ海上ヲ制壓センガ爲メデアラウ、此ニ於テ兩國海軍ハ遙ニ佐世保ト威海衛トニ相對峙シテ互ニ機ノ乘ズベキヲ待チ、先ヅ夫レ迄ハ單ニ陸兵輸送ノミヲ施行スル狀況ヲ呈シタノデアアル、其中ニ我艦隊ハ七月ノ中旬ニナツテ漸々整理シテ來タモノデ、釜山ト本地トノ海峽ニ專ラ力ヲ致シタル勢力ハ一進シテ朝鮮西海岸ヲ制シヤウトスル計畫トナツテ、且ツ艦隊及ビ運送船ノ便宜ノ爲ニ燈臺ヲ對馬及ビ五島ニ設ケテ朝鮮海峽ノ安全ヲ圖リ、益此方面ノ海上權ヲ鞏固ナラシメンコ

トヲ努メタノニ、之レニ反シテ清國ハ南北部及ビ臺灣ニ於ケル燈臺ノ點火ヲ中止シ、立標ノ破壊ニ努メタ、此事ニ徴スルモ、我ハ積極デ彼ハ消極デアツタコトガ知レル、尋デ我艦隊ハ愈進取的方針ヲ取ツテ勢力ヲ一團トシ、朝鮮西海ニ進ンデ便宜ノ地ヲ假根據地ニ撰定スルコトニナツタ、

第二期 豊島海戦ヨリ黃海々戦ニ至ル

七月二十五日ニ起ツタ豊島ノ海戦ハ、日清兩國ヲシテ戦時ニ於ケル海上權力ノ爭奪ヲ事實ノ上ニ現ハシタモノデ、彼我共ニ武力ニ依テ公然之レヲ爭フコトニナツタ、此豊島ノ海戦ハ、素ヨリ兩艦隊首力ノ戦ヒデナクテ、一部ノ衝突デハアルガ、兎ニ角劈頭第一デアアルカラ、軍ノ機先ヲ制スルニハ非常ニ關係ヲ有ツテ居ル、所ガ此戦デハ勿論勢力モ日本ノ方ガ遙カニ優ツテ居ツタガ、敵ノ一艦ヲ捕獲シ二艦ヲ走ラセ、運送船一隻ヲ擊沈シ、全勝ヲ得タノハ、譬ヘバ火藥庫ノ中ニ一點火ヲ投ジタヤウナモノデ、遂ニ黃海ノ激戦、威海衛ノ陷落等ノ大爆發ヲ成功セシムル原因トナツタ、

抑モ海ヲ隔テ、敵ト戦フニハ言フ迄モナク海上權ノ得失ニ依テ勝敗ガ分ル、ノデ、清國ノ作战方針モ矢張り重キヲ海軍ニ置イタヤウニ思ハレル、其當時若シ日本ト開戦ヲシタナラバ北洋艦隊ノ作战方針ハ七艘ノ軍艦ヲ朝鮮海峽ニ派遣シテ、朝鮮ニ向ツテ日本カラ出ス兵

士ノ輸送、糧食ノ運搬ヲ杜絶スルト云フ風説モアツタシ、又七月十二日某地ヨリノ報告ニモ支那ハ先ヅ海軍ヲ以テ我ヲ制スル計畫ナルガ如ク見ユト云フ電報ガ來テ居ル、是等ハ或ハ想像カモ知レヌガ、少クトモ清國海軍ハ仁川以北ノ海上權ヲ握ツテ、陸兵ト氣脉ヲ通シ、我ニ當ラウト思ツテ居ツタコトハ疑ヒナイ事實デアル、其證據ニハ、七月十六日ニ李鴻章カラ威海衛、旅順等ノ諸將ニ向ツテ命令シタ書中ニ「丁汝昌ハ海軍ヲ帥井朝鮮ニ赴キ海上ヲ巡遊シ葉志超ニ應援セシム云々」ト云フコトガアル、之レハ清國カラ見レバ至當ノ戰略デ若シモ朝鮮海峽ヲ遮斷シ得タナラバ、朝鮮ニ於ケル日本ノ軍隊ハ文祿ノ役ニ等シク懸軍萬里孤立ノ有様ニナツテ、或ハ自滅ノ運命ヲ招クカモ知レヌ、之レト同時ニ彼ハ海路ヲ利用シテ、自在ニ朝鮮ニ派兵シ得ルノミナラズ、進ンデ帝國ノ沿岸ヲ攻撃スル事モ、便宜ノ島嶼ヲ占領スルコトモ意ノ如クデアルカラ、此計畫ヲ取ルノハ先ヅ至當ナ處置ト云ハ子バナラヌ、殊ニ彼ニハ北洋艦隊ノ外ニ南洋、廣東、福建ノ諸艦隊ガアルカラ、我艦隊ト北洋艦隊ト相對峙シテ勝敗ノ決セヌ場合デモ、他ノ艦隊ヲ我近海諸島若クハ内地沿岸ニ出沒セシムルコトモ爲シ得ルノデアアル、斯ノ如クスレバ帝國ハ非常ニ困難スルニ相違ナイ、當時我海軍ニハ澤山ノ艦艇モ無イノデ、其勢力ヲ割イテ内國沿岸ヲ防禦スルト云フ事ハ到底出來ナイカラ、勢力ヲ一ニ集メテ先ヅ北洋艦隊ニ當ルコト、爲ツタ、若シ清國ノ南洋艦隊等

豐島海戦ノ効
果

ガ出テ來テ我沿岸ヲ砲撃デモスルナラ、一旦ハ彼等ノ爲ス儘ニ任セ、專ラカヲ一ニシテ北洋艦隊ヲ破リ、而シテ徐ロニ其處置ヲ講ズルヨリ他ニ致シ方ハナカツタノデアアル、之ヲ以テ見テモ如何ニ海上權ヲ握ラヌウチハ萬事ニ困難デアルカ、判然スル、然ルニ豐島ノ一戦ハ我軍ノ勝利ニ歸シタノデ、我海上ノ勢力範圍ガ稍擴マツテ朝鮮西海岸ノ方ニ及ボシ、同時ニ國民ノ海軍ニ對スル信頼心ヲ厚カラシメテ敵愾ノ心ヲ振ヒ興サセ、一面ニハ高陞號ヲ擊沈シタ結果、中立國ノ船舶ニ非常ノ畏怖心ヲ生ゼシメ、從ツテ彼等ノ輕侮心モ薄ライダカラ大ニ戰略上ノ妨碍ヲ遮リ得タ、又敵ハ操江ヲ捕獲セラレタル爲メ、軍機ノ漏洩ヲ怖レ、信號或ハ規約ヲ改メル必要ヲ感シ、急ニ之レヲ改正シタカノ如ク思ハレル、ケレドモ之レニ熟練スル時日ガナイカラ、從ツテ萬事不如意デ、後日黃海ノ戦ヒニ李鴻章ニ宛テタ獨人ハンネツケンノ戰鬥報告中ニモ、信號等ヲ改メ熟練ノ暇ガナカツタカラ、寧ロ成ルベク信號ハ行ハヌヤウニシタト云フ意味ノ語ガアル、斯ノ如ク豐島ノ海戦ハ實際一部分ノ衝突ニ過ギナカツタケレドモ、其効果ハ頗ル多カツタノミナラズ、此ノ一戦ノ爲ニ清國ヲシテ作戰ノ方針ヲ一變セシメタノデアアル、前述ノ通り清國最初ノ方針ハ海軍力ヲ以テ海上ノ權ヲ爭フト云フノデアツタガ、豐島ノ海戦ニ敗レタ爲ニ其英氣ヲ挫カレタ、尤モ丁汝昌ハ七月二十六日戰場ヨリ逃ゲ歸ツタ濟遠ノ報告ヲ得、即日艦隊ノ首力ヲ擧ゲテ敵ト雌雄ヲ決スル旨ヲ揚言シテ威海

衛ヲ出タケレドモ、風波ガ荒イト云フノデ、七月二十九日ニ再ビ威海衛ニ歸ツテ來テ、其後久シク動カズ、又李鴻章ヨリハ七月二十八日ニ威海衛及ビ旅順口等ノ守將ニ向ツテ目下ノ對日策ハ唯慎重防備ヲ嚴ニスルニ在リト訓令シタ、是迄ハ積極的方針ニ出デ、兎ニ角進ンデ争フト云フノデアツタガ、俄ニ一變シテ消極的ト爲リ、唯僅ニ渤海ノ内部ヲ守ルコトニ決シ、最早朝鮮ノ海上權ヲ放抛セザルヲ得ヌ事ニナツテ、李鴻章ヨリ更ニ丁汝昌ニ訓令ヲ出シテ、運送船ノ上海ニ行カウトスルモノハ急ニ軍艦ヲ出シテ呼返サセ、又招商局デハ其所有ノ漁船ガ日艦ノ爲ニ捕拿サレルコトヲ恐レテ、七月二十八日ニ電報ヲ諸處ニ發シテ、漁船ハ皆港ノ奥ヘ深ク這入ツテ外海ヘ出ルナト云フ命令ヲ出シ、尙ホ黃浦ノ内ニアル運送船ハ一艘モ外ニ出サヌト云フコトニシ、港口通ヒノ小船迄モ、吳淞近傍デ捕ハレル事ヲ患ヒテ其出帆ヲ見合ハセル始末ダカラ、早ク既ニ經濟界ニモ影響ヲ及ボシテ來タ、斯ノ如ク清國ハ其方針ヲ變ジタナレドモ併シ艦隊ノ主力ハ依然トシテ存在シ、之レガ戰爭ノ原動力ニナツテ居ルカラ、我モ未ダ安心シテ朝鮮海ヲ自己掌中ノモノトスル譯ニハ行カヌ、殊ニ此當時彼ガ我ノ動靜ヲ知ルコトガ出來ナイト同時ニ、我モ亦彼ノ動靜ヲ知ルコトガ出來ナイカラシテ、七月三十一日ノ伊東司令長官ノ電報ニモ、仁川ニ至ル航路ハ敵ノ艦隊ヲ破ルマデハ決シテ安全ト斷言スベカラズ、大兵ヲ搭載セル大運送船モ一小巡洋艦ノ爲ニ擊沈セ

ラル、モノトセバ寒心ニ耐ヘズ、萬全ノ策ハ釜山ニ上陸セシムルニアルベシトノ語ガアル、尤モ之レハ萬全ヲ圖ツタ迄デ當時仁川附近デハ既得海上權ノ應用ニ少シモ怠ラズシテ、牙山ノ方ニ進ンデ行ク陸軍ノ應援及ビ糧食ノ運搬モ仁川、牙山間ノ海路ヨリ送ツタ程デア、然ルニ清國ハ豐島ノ一戦ニ敗レタ復讎トシテ、其艦隊ヲ舉ゲ、來ツテ牙山ノ航路ヲ回復スル虞レガアツタカラ、司令長官ハ艦隊ヲベーカー島ノ東五海里ノ處ヘ出シテ、敵艦隊ヲ迎ヘルト云フ策ヲ講ジタ、所ガ敵ノ艦隊ハ少シモ來ラズ、今ハ牙山ニ居ル陸兵ヲ遺棄シタ事ガ判然シタモノデ、我艦隊ハ進ンデ大同江ヲ偵察シタ、之レハ大同江ニ居ル清國ノ陸兵ト艦隊ト交通聯絡ヲ有シテ居ルカモ知レヌカラデ、若シ此處ニモ清國艦隊ガ居ラヌ時ニハ、大同江ニ假根據地ヲ置テ我艦隊ノ勢力ヲ集メ、進ンデ威海衛ニ至リ敵ノ艦隊ヲ港外ニ誘出シテ雌雄ヲ決スル計畫ヲ建テタ、此當時注意スベキコトハ、屢偵察艦ヲ出シテ敵ノ動靜ヲ探ラシメタ事デ、即チ豐島海戦ノアツタ七月二十五日カラ八月七日ニ至ル迄ノ偵察ノ度數ヲ舉ゲテ見マスト、七月二十六日ニハ高千穂、赤城、摩耶ノ三艦ガ牙山附近ヲ偵察シ、同シク二十八日ニハ高雄、赤城、愛宕ノ三艦ガ牙山附近ヲ偵察シタ、尙二十八日ニハ高千穂ガ一ノ漁船ヲ追駈ケタ、二十九日ニハ千代田ガベーカー島附近ヲ偵察シ、三十日ニハ高千穂ガ同シクベーカー島附近ヲ、摩耶ハ隔音島附近ノ島蔭ヲ、浪速、秋津洲ハ更ニベーカー

島附近ヲ偵察シタ、八月一日ニハ浪速、高千穂ガ同ジクベーカー島近傍ノ偵察ヲ爲シ、八月二日ヨリ六日迄ハ吉野、高千穂ガベーカー島、シヨバイオール邊ヲ巡回シタ、斯ノ如ク敏活ナ運動ヲ爲シ得タノモ我海上權ガ漸々彼ヲ凌駕シタ結果デアアル、既ニシテ清國艦隊ハ、朝鮮海ニ進航シテ我艦隊ニ打撃ヲ加ヘルト云フ勇氣モナク、衝突ヲ避ケテ概テ港灣内ニ蟄伏スル様子ガ日ヲ追フテ明カニナツテ來タカラ、伊東司令長官ハ大同江カラ威海衛ニ航シテ敵ノ艦隊ニ向ヒ挑戰スルコトニ決シタ、此時迄ノ艦隊ノ首力ノ所在ヲ略述スルト、豐島海戰ノ當日ハ群山鎮沖ニ居テ、翌二十六日ハ隔音島沖、同二十八日ハベーカー島附近ニ、三十一日ニハ再ビ隔音島ニ移リ、八月七日愈北進ノ途ニ就テ先ヅ大青島附近ヲ經テ八日ニ大東河口ニ行キ、偵察艦ヲ遣ハシテ大同江ヲ偵察シ、愈敵艦ガ居ナイト認メタモノデ、豫定ノ如ク總艦隊ヲ舉ゲテ威海衛ヲ砲撃シタガ、敵艦隊ノ首力ガ港内ニ居ラナカツタ爲ニ、十分我が目的ヲ達スルコトガ出來ズ、其結果單ニ示威運動ニ止ツタヤウデアアルケレドモ、之レガ爲メ精神的恐怖ヲ清國政府ニ與ヘタコトハ夥シカツタ、一體清軍ハ豐島海戰ニ一敗シテ以來、海路朝鮮ノ南部ニ至ル事ヲ中止シタトハ云フモノ、絶對的ニ海上權ヲ放棄シタ譯デハ無カツタノデ、既ニ我艦隊ガ威海衛ヲ攻撃シタ八月十日ニモ、敵ノ艦隊ノ首力ハ大同江附近ニ居タラシク思ハレル、即チ八月九日附ヲ以テ李鴻章ヨリ威海衛ノ守將ニ命令

威海衛ノ攻撃
ト朝鮮海軍ノ
制權

シタ書中ニ「各砲臺及ビ海軍ハ晝夜嚴戒シテ、敵近カバ全力ヲ以テ攻撃スベシ、既ニ平壤ニ電報シ、丁汝昌ニ至急回航スベキ旨申置キタリ云々」トアル、是レ平壤ニ居ル陸將ニ向ツテ命令ヲ艦隊ニ傳達サセタノデ、彼ガ大同江附近ニ航シテ居ツタコトガ推知サレル、加之清國政府ハ我が總攻撃ヲ以テ挑戰的ニ出タモノト認メナイデ、北洋艦隊ノ首力不在ヲ機トシテ虚ニ乘シテ來タモノト思ツテ居ル、八月中旬ニ李鴻章ガ出シタ上書中ニモ「我艦隊大同江ヲ巡視スルヤ、彼直ニ虚ニ乘シテ來リテ威海衛、旅順ヲ窺フ、我が海軍歸ルニ及ンデ倭艦即日退キ去ル云々」ト記シテアル程デ、八月十日前迄ハ彼ハ進取ノ方針ヲ一變シタニモ拘ラズ、自己ノ海軍力ハ日本ト同等ニ位シテ居ルト信ジテ居ツタノデアアル、然ルニ威海衛ノ示威運動ハ彼等ノ膽ヲ奪ツテ、八月十日後ハ全ク艦隊ニ朝鮮海近傍ノ航行ヲ禁ジタ、當時清國艦隊ノ乗組員デアツタ米國海軍少佐マクギフイント云フ者ノ記事ニ下ノ如ク記シテアル「八月十日所謂威海衛ノ襲撃アリシ後、總理衙門ヨリ一ノ嚴令ハ提督ノ許ニ達セリ、曰ク何等ノ事情アルモ山東燈臺ヨリ鴨綠江口ニ劃スル一線以外ニ出ヅベカラズト(總理衙門ヨリノ令トアルハ疑ハシイ何故ナレバ北京政府ハ毎ニ北洋艦隊ノ出戰ヲ促シタ程ダカラ恐ラクハ李鴻章ヨリノ誤リデアラウ)忠勇ノ老提督ハ深ク之ヲ憤レリ、麾下ノ將校モ亦不滿ヲ鳴ラサマルニ非ズ、然レドモ提督ハ竟ニ命令ニ背クヲ得ザリキ云々」之レモ威海衛ニ挑戰ヲ試ミタ結果デアアル、又之ヨリモ尙甚シイノハ、威海衛守將等ノ狼狽デ、

統領戴宗騫ハ李鴻章ニ向ツテ、再三威海衛ノ危険ナルヲ訴ヘ、終ニ「目下事急ナリ請フテニ營ヲ増スモ仍ホ不足ノ恐レアリ、倭若シ今後再ビ犯ス事アラバ、必ズ大ニ陸兵ヲ添ヘ來ルベシ、今日倭ノ他處ヲ顧ミズ一意威海衛ヲ窺フモノハ、豈海軍ノ根本ヲ傾ケ、北洋ニ縱横セント欲スルニアラザランヤ云々」ト告ゲ、李鴻章ヨリ其怯懦ナルヲ叱責サレタルニモ拘ハラズ、尙ホ自ラ安ンズルコトが出来ナイデ、湖南巡撫吳大澂ヤ、烟台道劉含芳ニ援兵ヲ請フテ、見苦イ程ノ周章ヲ爲シタノデ、其他所々ノ守將等モ皆戰々兢々トシテ居ル有様ダカラ、進ンデ朝鮮海上ノ權ヲ争フナゾトハ思ヒモ寄ラヌ事デ、此ノ挑戰ノ一舉ガ如何ニ清國政府ニ無形ノ痛撃ヲ與ヘタカ、推知サレル、從ツテ朝鮮海ノ主權ガ漸ク鞏固ナルニ至ツタノダ、

我艦隊ハ威海衛ニ挑戰ヲ試ミテ後一旦隔音島ニ引上ゲタ、此時ニ當ツテ朝鮮西海ノ權ハ略我手ニ歸シテ居ツタコトハ聯合艦隊司令長官モ認識セル所デアツタガ、併シ敵艦隊ノ主力ガ尙存在シテ居ル結果トシテ、形勢不充分ナル所ニ根據ヲ定ムルコトハ不安全デアツタカラ、終ニ防禦ニモ警戒ニモ極メテ容易ナル長直路ニ八月十四日ヲ以テ回航シ、此處ヲ艦隊ノ遠征根據地ト定メタ、抑モ艦隊根據地ハ海上權ノ發動點デアツテ、其處カラ四方ニ勢力ノ波及スルモノデ、若シ之レガ無イカ或ハ有ルニシテモ甚シク隔絶シタ所ニ在ツタナラバ、

遠征根據地ト
我海上權範圍ノ擴張

艦隊ハ決シテ永ク完全ニ其勢力ヲ維持スルコトハ出来ナイノデアル、然ルニ今ヤ我艦隊ハ長直路ニ其根據地ヲ得テ軍隊輸送ノ中途集中點トシ、又軍需品供給所トシタカラ、恰モ佐世保軍港ヲ朝鮮ノ南岸ニ移シタヤウナモノデ、之ガ爲我海上權ノ範圍ハ確カニ支那方面ニ向ツテ著シク擴張サレタノデアル、此長直路ノ要害デアルコトハ清國政府モ夙ニ眼ヲ着ケテ居ツタ所デ、數年前カラ屢ニ其調査ヲ爲シ、提督丁汝昌モ親カラ兩三回視察シタ程デアル、故ニ若シ一度彼ガ帝國艦隊ヲ破ツタナラバ、必ズ之ヲ占領シテ朝鮮海峽ヲ遮斷スルコトヲ企テタニ相違ナイ、要スルニ豊島ノ一戰ハ、我レ勝タバ戰場ハ渤海ニ移リ、彼レ勝タバ日本海ニ移ルノデ、畢竟進ンデ取ルカ退イテ守ルカ兩方針ノ分レ目デアツタ、此時ニ當ツテ我陸軍ハ豊島海戰ノ爲ニ海上トノ連絡ヲ斷タレテ孤立ニナツテ居ル牙山ノ清兵ヲ擊破シテ、正ニ平壤ニ向ツテ進軍シツ、アル時デアリマシタガ、仁川以南ノ海上權ハ略我手ニ歸シタコトガ明瞭ニナツタモノデ、第五師團ノ殘部ハ海路仁川ニ送ルコトニ決定シ、從テ聯合艦隊ハ既ニ取得シタ勢力ヲ實際ニ試ミルノ時ガ來ツタ、併シ敵ノ艦隊ノ主力ハ依然トシテ存在シテ居ル爲メ、我海上權ノ保證ハ未ダ甚ダ薄弱デ、萬一敵ガ我陸兵護送ノ事ヲ探知シ、全艦隊ヲ擧ゲテ途中ノ海上ニ邀撃シタナラバ、其困難ナコトハ勿論、時機ニ依テハ平壤攻撃ヲ無効ニ歸セシムル恐レガナイトモ言ヘヌ、而シテ此大責任ハ全ク艦隊ガ負

フテ居ル、ソコデ艦隊司令長官ハ最モ敏活ニ艦隊ヲ操縦シテ海上權ノ弱點ヲ補ハウトシタ、即チ八月十五日長直路ニ移ツテカラ同二十四日陸兵ヲ仁川ニ上陸シ了ツタ迄ノ艦隊ノ動作ニ付テ概要ヲ述ベルト、先ツ長直路ニ入港後第一ニ定メタ配備ハ、艦隊ノ主力ヲ長直路ニ置キ、別ニ二三隻ノ小艦ト水雷艇ヲ仁川ニ近キ淺水灣ニ分派シ、他ノ二隻ヲ兩所間ニ往來サセテ相互ノ連絡ヲ保チ、以テ仁川以南ノ航路ヲ安全ニスルト同時ニ、速力ノ大ナル一二ノ軍艦ヲシテ旅順港及威海衛ヲ巡邏サセテ、一ハ敵艦ノ動靜ヲ偵察セシメ、一ハ敵ノ巡洋艦ヲシテ一步モ港外ニ出ルコトノ出來ナイヤウニサセ、別ニ第二游擊隊ヲ釜山ニ遣シ、本邦カラ來ル所ノ陸軍ノ運送船ヲ迎ヘサセルコトニシテ、更ニ長直路カラ仁川迄ハ本隊及第一游擊隊ヲ以テ護送シ、又淺水灣ニ在ル水雷艇隊ハ牙山及飛魚水道ヲ警戒シ、第三游擊隊ノ四艦ハ上陸點ニ在ツテ之ニ助力スルコトニ定メタ、斯ノ如ク用意嚴密ニ計畫ヲシタガ、ソレデモ尙ホ敵ノ艦隊が存在シテ居ル爲メ、我陸兵護送ハ安全ト斷言スルコトガ出來ヌ、陸軍護送次第書中ニモ、「途中若シ敵ニ出會セシトキハ旗艦ヨリノ合圖ニ依リ運送船ハ一齊ニ針路ヲ變シ務メテ速力ヲ増シ捷路ヲ經テ長直路ニ歸ルコト云々」ト云フ文字ガ用非ラレテ居ル、然ルニ幸ニモ敵ノ艦隊ハ只威海衛、旅順口ノ間ノミヲ往來シテ居ツタモノダカラ、我目的ハ充分遂ゲラレテ陸兵ヲ無難ニ仁川ニ上陸シ了ツタ、ソコデ更ニ艦隊ヲ長直路ト牙山トノ兩所

陸軍ノ前進ト
海軍

ニ二分スルコトニナツタガ、此時清國艦隊ハ專ラ威海衛ノ防禦ニ任ジテ居テ丁汝昌ハ新タニ防禦施設ノ命令ヲ發シタ、夫レハ八月二十六日デ恰モ我が本隊ガ長直路ニ歸ツテ來タ當日デ、彼我對照シテ見タナラハ海上權ノ消長ハ自ラ明カナルコトデアル、斯ノ如ク陸兵護送ハ無難ニ爲シ遂ゲタガ、其後ニ於テ注意スベキ艦隊ノ動作ハ、平壤進擊ノ陸軍ニ應援シヤウトマル計畫ヲ一度中止シタ一事デ、是モ尙我海上權ノ薄弱ナリシ爲メデアル、是ヨリ以前陸軍ハ漸次京城ヲ發シテ平壤ニ向ヒ進軍シ、艦隊ハ其援助トシテ勢力ノ一部分ヲ割イテ之ヲ大同江ニ發遣シヤウトシテ計畫一タビ定マツタ所ガ、會敵艦隊ガ大舉シテ來襲スルト云フ風説ガアリ、殊ニハ更ニ陸軍ノ運送船三十隻ヲ再ビ長直路カラ仁川迄護送スベキ命ヲ受ケタモノデ、當時ノ狀況ハ艦隊勢力ノ分在ヲ許サマルコト故、司令長官ハ牙山ニアル艦隊ヲ長直路ニ呼ビ集メルコトヲ望ンダ、然ルニ海軍ノ應援ガナクテハ半島ニ於ケル陸軍ノ進擊計畫ヲ完全ニ行フコトハ困難デアル所カラ「若シ艦隊ノ援助ナケレバ既ニ平壤ニ向ヘル陸軍ハ或ハ苦戰ニ陥ルノミナラズ糧食ニ大困難ヲ來スヤモ難計云云」トノ議論ガ出タ、斯ノ如ク海軍ノ援助ヲ必要トシテ居タガ、前ニモ述ベル通り敵艦隊存在ノ結果トシテ、我艦隊ハ再度仁川ニ陸兵ヲ護送シ了ル迄ノ平壤進軍ニ充分應援スルコトガ出來ナカツタ、

併シ再度ノ陸兵護送モ亦一ノ故障ナクシテ、九月十二日ニ仁川ニ到着スルコトガ出来タカラ、茲ニ海軍ノ一任務ヲ了ツタ、長直路ヨリ仁川迄ハ大凡二百七十海里ノ長距離デ、然カモ二回ノ運送船大護送ヲ行ツタノニ、少シノ障害モ與フルコトガ出来ナカツタノハ、清國海軍ノ軍略敏活ヲ缺イタニモ因ルガ、我艦隊ノ運動宜シキヲ得テ既ニ得タル海上權ノ利ヲ應用スルコトニ於テ少シモ遺算ノナカツタ爲メト言ハ子バナラヌ、而シテ其原因ハ皆豊島ノ海戰デ彼ノ機先ヲ制シタ結果デアツタ、尋デ我艦隊ハ其勢力ヲ三ツニ分ケテ、其一ヲ以テ仁川ノ陸兵上陸ヲ掩護シ、他ノ一ヲ以テ平壤攻撃ニ應援ヲ爲シ、又其ノ主力タル本隊及第一遊撃隊ハ速ニ敵艦隊ヲ殲滅シ、全ク敵海ヲ制壓シテ戰爭ノ大局ヲ結バツト欲シテ、大膽ナル渤海灣内ノ強行偵察ガ計畫サレタ、殊ニ其當時敵艦隊大孤山沖ニ出沒スルヤノ情報ニ接シタモノデ、即チ先ヅ小乳蠶岬ヨリ海洋島ニ至リ、夫レヨリ大孤山沖、威海衛、大連灣、旅順口、大沽、山海關、牛莊等ノ各要所ヲ偵察シ、何レノ處カデ敵ノ艦隊ノ主力ニ出會シタラ、直チニ之ヲ撃破スルト云フ企テマアツタ、是レ既得海上權ノ大活動デアツテ戰爭ノ大局ヲ定メタ所ノ黄海々戰ノ起ツタ所以デアル、今七月下旬ヨリ九月中旬ニ至ル間ノ彼我兩國海軍主力ノ所在地ヲ表ニシテ左ニ掲ゲマスガ、之ヲ一讀シマシタナラバ如何ニ彼我ノ海上權ニ相違ガアツタカハ直チニ明瞭ニナルデアラウ、

大膽ナル我海軍ノ強行偵察

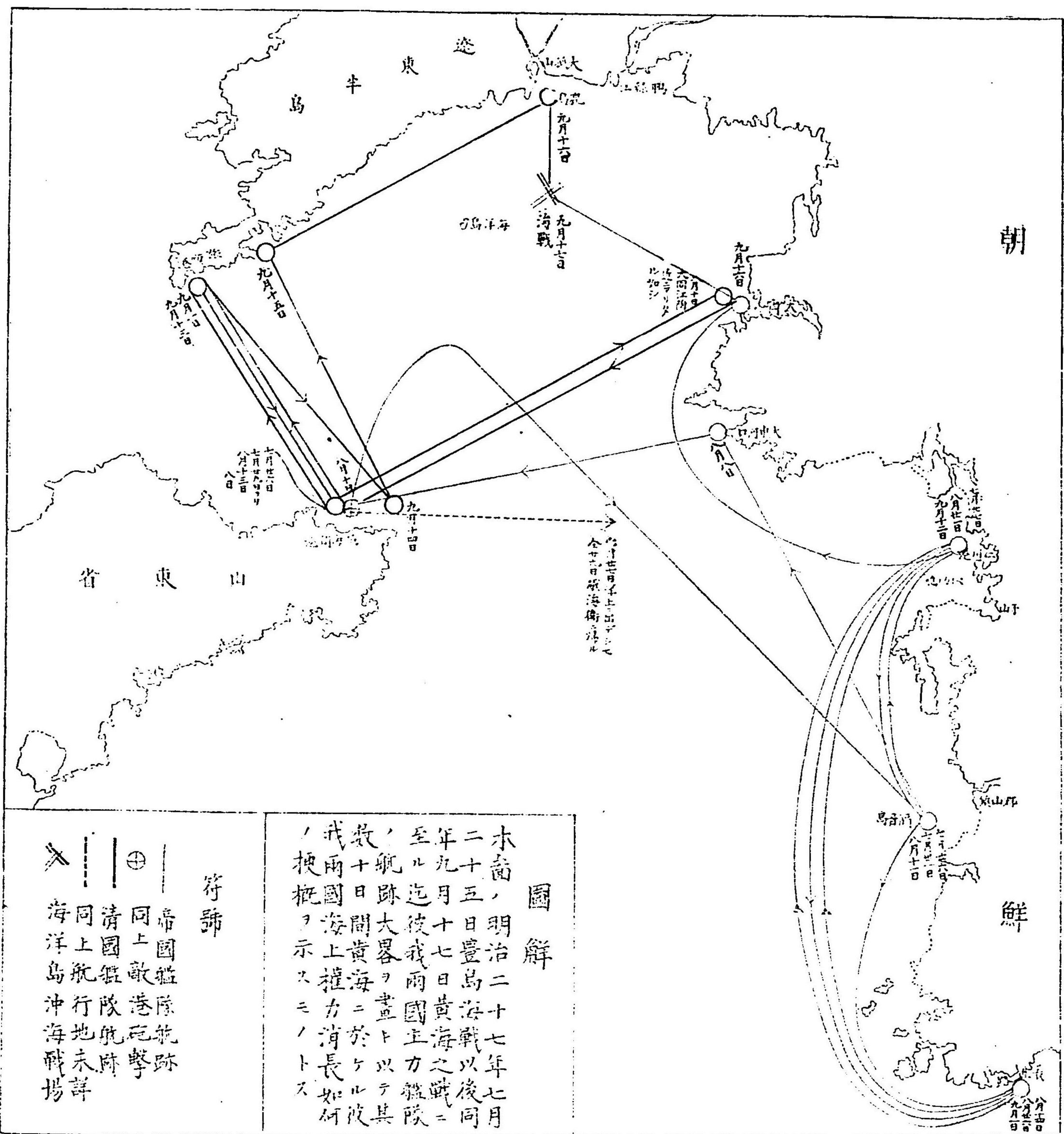
月	日	帝國軍艦主力所在地	清國軍艦主力所在地
七月	二十五日	郡山鎮沖	威海衛
同	二十六日	隔音島	右同
同	二十七日	隔音島	右同
同	二十八日	隔音島	右同
同	二十九日	隔音島	右同
同	三十日	隔音島	右同
同	三十一日	隔音島	右同
八月	七日	大東河口ニアリ	威海衛ニ歸リ八月九日マデ動かカズ
同	八日	威海衛ニ向テ出港	右同
同	九日	威海衛ヲ砲撃	右同
同	十日	迂廻シテ隔音島ニ歸ル	威海衛ニ歸着
同	十一日	長直路ニ向フ	右同
同	十二日	長直路ニ投錨	右同
同	十三日	長直路ニ向フ	右同
同	十四日	運送船ヲ護シテ仁川ニ向フ	右同
同	十五日	仁川港口ニ着ス	右同
同	十六日	再ヒ運送船ヲ護シテ仁川ニ向フ	旅順ニ廻航
同	十七日	仁川港口ニ着ス	威海衛ニ廻航
同	十八日	右同	威海衛ニアリ
同	十九日	右同	右同
同	二十日	右同	旅順ニ廻航
同	二十一日	右同	旅順ニアリ
同	二十二日	右同	山東角附近ニアリ
同	二十三日	右同	鹿島ニ向ヒ大連ヲ發ス
同	二十四日	右同	鹿島附近ニ着ス
同	二十五日	右同	鹿島附近ニ着ス
同	二十六日	右同	鹿島附近ニ着ス
同	二十七日	右同	鹿島附近ニ着ス
同	二十八日	右同	鹿島附近ニ着ス
同	二十九日	右同	鹿島附近ニ着ス
同	三十日	右同	鹿島附近ニ着ス
同	三十一日	右同	鹿島附近ニ着ス

第三期 黃海々戰ヨリ旅順口占領ニ至ル

明治二十七年九月十七日ニ起リマシタ黃海ノ海戰ハ、言フマデモナク日清兩國勝敗ノ大局ヲ決シタモノデアリマシテ、天皇陛下ノ艦隊ニ下シ給ヘル詔勅ニモ『其威力既ニ敵海ヲ制壓スルヲ覺ユ』ト嘉稱セラレマシタ、今其結果ヲ論ズル前ニ、先ヅ威海衛挑戰後ニ於ケル清國ノ作戰方針ヨリ述ブルコトニ致シマス、

清國政府ノ代表者タル李鴻章ハ、前述ノ如ク最初ハ進取的方針ヲ取り、海軍ヲ以テ朝鮮西岸ノ海上權ヲ爭ハウト考ヘタノガ、豐島ニ於テ一たび敗レ、更ニ威海衛ニ示威運動ヲ受ケタ爲ニ、其方針ヲ一變シテ退守ノ政略ヲ取り、飽マデ艦隊ヲ保全シ、消極的ニ海上權ヲ持續シヤウト勉メタ、八月二十一日威海衛ノ守將戴宗瀾ノ怯懦ナルヲ叱責シタ文中ニ「汝又曰ク、倭若シ再ビ犯サバ必ズ大ニ陸兵ヲ添ヘ、專ラ意ヲ威海衛ニ注ガント、此言倭人ノ先ヅ相告語スルモノ、如シ、知ラズヤ其時我海軍ハ必ズ全力出撃スベシ、彼何ノ暇アリテ專ラ汝ノ防禦ヲ破リ從容上陸スルヲ得ンヤ」ト論ジテ居ル、之ニ徵シテモ艦隊ヲ保全シテ居レバ日本軍ガ清國沿岸ニ上陸スルコトガ出來ナイト云フコトヲ考ヘテ居ツタコトガ明カデアル、然ルニ北京朝廷ハ李鴻章ト其意見ヲ異ニシテ、丁汝昌ヲ看ルニ臆病無能狡猾敵ヲ避ケ、提督

兩國艦隊航跡畧圖



我海軍ノ威海
衛攻撃後ニ於
ケル清國海軍
ノ作戦方針

ノ重任ニ堪ヘナイ者ト做シテ、八月二十七日ニ李鴻章ニ嚴諭ヲ下シ、即日之ヲ免黜シヤウトシタモノデ、李鴻章ハ大ニ彼我海軍ノ形勢ヲ論ジ、丁汝昌ヲ庇護シタ、而シテ其上書ハ遂ニ北京朝廷ノ採納スル所トナリマシタカラ、之ヲ以テ威海衛挑戰後ニ於ケル清國作戰ノ方針ト認メナケレバナラヌ、殊ニ其上書ノ議論ハ頗ル聽クニ足ルモノガアルカラ其大要ヲ左ニ掲ゲマス、

〔前略〕目下彼我ノ情勢海軍戰守ノ得失ヲ密計スルニ、船隻ヲ保全シテ敵ヲ制スルノ分ヲ求メザルベカラズ、敢テ我皇上ノ爲ニ明カニ之ヲ陳ベン、北洋海軍用ユヘキモノヲ査スルニ、只ダ鎮遠、定遠ノ二艦アルノミ、然レドモ船體重ク、速力遅ク、喫水深キニ過ギ、海汊内海ニ入ルコト能ハズ、次ハ濟遠、經遠、來遠ノ三隻ナリ、水線甲穹甲アリ、而シテ速力速ナラズ、致遠、靖遠二隻ノ如キ、製造當時一時間十八海里ト稱シタルモ、使用日久シク近時僅ニ十五六海里ニ過ギズ、此外諸船愈舊ク、愈遲シ、海上ノ交戦趨避ノ能否ハ、船行ノ遲速ニ在リ、速力早キモノ勝テバ則チ追撃ニ易ク、敗ル、モ亦退却ニ便ナリ、遲速懸殊スレバ利鈍立ロニ判ル、(中略)日本新舊ノ快走船用ユベキモノ計二十一隻、内九隻ハ光緒十五年(明治二十二年)以後年々購造セシモノニシテ、其最モ快速ナルモノハ每一時二十三海里、次ハ二十海里内外ト記セリ(中略)臣前キニハ戰備豫策ノ上奏中ニ於テ、

海上交戦恐クハ勝算ナカラント言ヘリ、即チ快走艦匹敵セザルニ依テナリ(中略)故ニ必シモ與ニ戦闘セシメズ、只ダ渤海内外ニ遊撃セシメ、猛虎山ニ在ルノ勢ヲ爲サバ、倭兵尙ホ我鐵艦ヲ畏レ、敢テ輕々シク與ニ鋒ヲ争ハザルベシ、(中略)蓋シ今日海軍ノ力、以テ人ヲ攻ムレバ則チ足ラズ、以テ自ラ守レバ則チ尙ホ餘リアリ、用兵ノ道ハ、己ヲ知リ彼ヲ知ルヲ貴ブ、短ヲ捨テ長ヲ用ユ、是レ臣ガ兢々スル所ニシテ、今日ノ計、戰艦ヲ保全シテ敵ヲ制スルヲ以テ要トナス、敢テ一擲ノ下以テ觀ヲ局外者ニ求メザルナリ(中略)力ヲ量ラズシテ而シテ妄リニ進撃セザルヲ苛責スベカラズ(下略)」

此方針ハ決シテ當ヲ失ツタモノトハ言ハレヌ、若シ進ンデ海上權ヲ争フコトガ出來ナイトスレバ、寧ロ一意艦隊ノ保存ニ勉メ、而シテ勢力尙完全シテ居ルコトヲ示シ、敵ヲシテ後顧ノ憂ヲ抱カセ直チニ海ヲ渡ツテ上陸スルコトヲ斷念サセルヨリ他策ハナイ、然ルニ平壤危急ノ報ハ北洋艦隊ヲシテ終ニ海上權ナキ海面ニ於テ陸兵ヲ護送スルノ危険ヲ犯スコト、ナツタ、是ヨリ前ニ清國政府ハ海上ニ於テ我ト覇權ヲ争フコトガ出來ナイト認メルト同時ニ、專ラ重キヲ朝鮮國境ニ置キ、戰況ノ如何ニヨツテハ陸路長驅シテ朝鮮内地ニ進ミ、日本軍ヲ掃蕩スルト云フコトニ決シタ、所ガ我陸軍ハ既得ノ海上權ヲ利用シテ、或ハ元山或ハ仁川ヨリ思フガ儘ニ上陸シ、數隊ニ別レテ平壤ニ向ツテ進軍スルコト、ナリ、其勢頗ル盛デ

訓戒ヲ忘レタ
ル清國海軍ノ
失敗

アツタカラ、平壤ニアル守將等ハ急ヲ李鴻章ニ告ゲテ頻ニ援兵ヲ促シ、李鴻章モ捨テ置ケナイカラ増兵スルコトニ決シタガ、陸路ヲ行クト旅順ヨリ鴨綠江口マデ凡ソ我百十餘里アツテ一日平均十里ヲ行クトシテモ尙十餘日ヲ費シ、到底急ニ應ズルコトノ出來ナイノヲ恐レ、古來幾多ノ海戰史ニ戒メラレテアル戰略ノ原則ヲ犯シ、海上權ヲ争フ目的デナクシテ單ニ陸兵ヲ護送センガ爲ニ一時ノ權能ヲ僥倖シヤウトシテ、毅軍ノ總統宋慶ニ向テ海路出發ノ命令ヲ下シタ、其大略ハ「毅字軍ハ元來少數ナル爲メ遠征ヲ煩ハスヲ欲セザリシカ、今ヤ日兵三四萬ハ各路ヨリ進ミ平壤ヲ圍攻セントス、又安州聶士成ノ報告ニ、肅州ニ在ル日兵ハ我糧道ヲ斷チ電線ヲ切斷セリト云フ、因テ貴官ハ速ニ現在ノ四營ヲ引率シ、海路大東溝ニ抵リ前軍ヲ聲援シ後路ヲ守備セラレタシ、姜桂題ノ六營ハ已ニ其地ニ到着シ居ル筈、蔣尙鈞、程允和ノ步騎各二千モ不日到着スベシ、共ニ貴官ノ指揮下ニ入ル筈ナリ云々」又丁汝昌ニ向テハ艦隊ヲ以テ陸兵ヲ護送セヨト命ジタ、然シナガラ歴史ヲ一貫セル訓戒ハ特ニ清軍ニノミ私シナイデ、陸兵上陸ノ掩護中ニ起ツタ黃海ノ一戰ハ全ク北洋艦隊ノ失敗ニ歸シテ、ソレガ爲メニ戰爭ノ大局ヲ決シタノデアル、實ニ此ノ一戰ハ日清戰爭ノ主眼デアレバ特ニ其戰況大略ヲ申シマス、

〔我艦隊ノ戰況〕 九月十七日午前、本隊ハ三艦群陣ノ一ヲ編制シ、戰鬪操練ヲ行ヒナガラ、

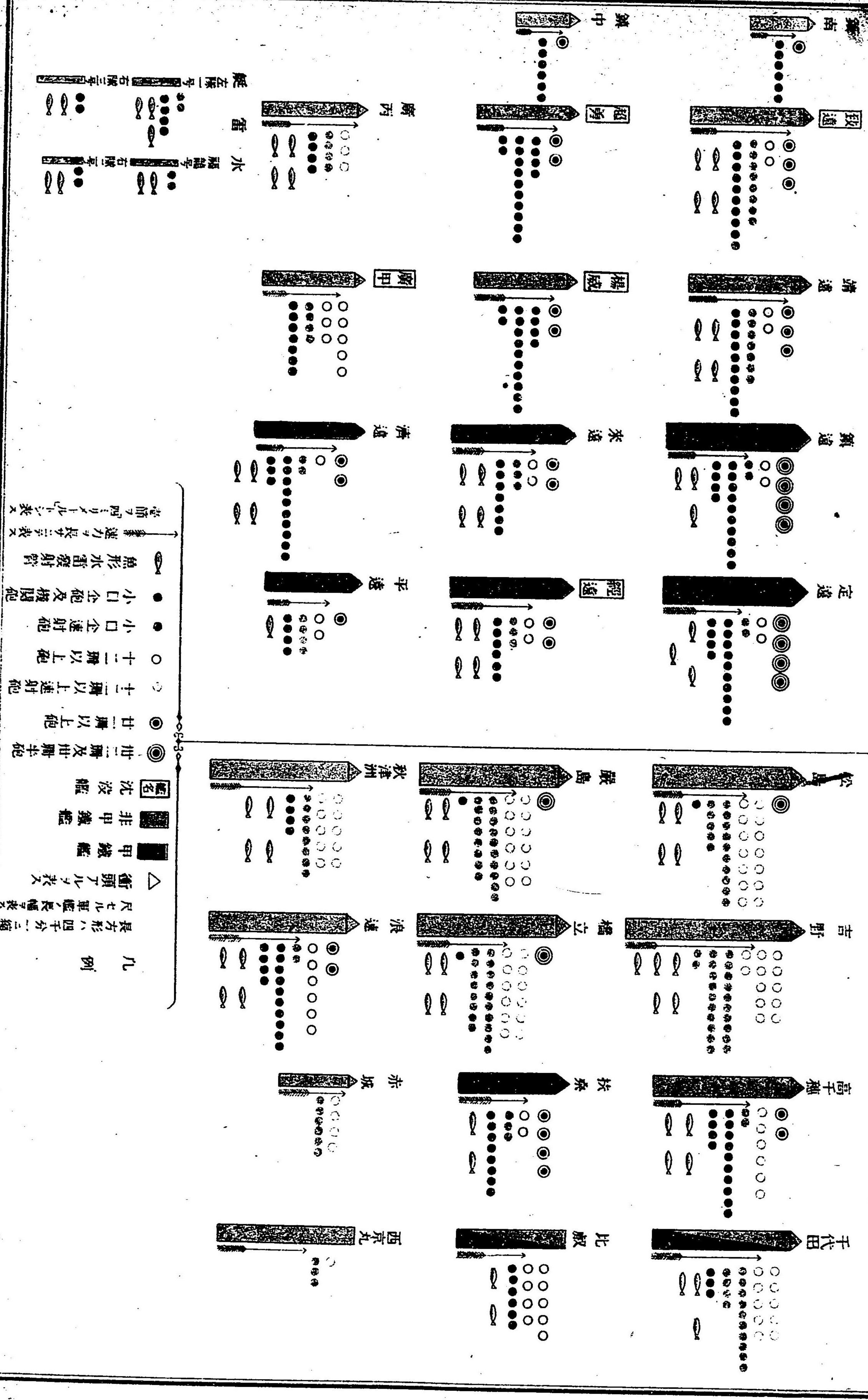
黃海ノ大海戰

大洋河口ニ向ツテ航進シマシタガ、先頭ニ進ミマシタ第一游撃隊ノ旗艦吉野カラ、午前十一時三十分ニ信號ヲ以テ、敵艦隊が見エタト云フコトヲ報シタモノデ、同三十五分ニ伊東司令長官ハ各艦ニ向ツテ「單縱陣ヲ制レ」ト命ジテ、豫テ定メタ戰鬥陣形ト爲シ、同四十五分ニ「十海里ノ速力ニ汽力ヲ保テ」ト命ジ、遙カニ敵艦ニ向テ進行シ、午後零時五分ニナルト、伊東聯合艦隊司令長官ハ又各艦ニ令シテ、大軍艦旗ヲ橋頭ニ掲ゲ兵員ヲ戰鬥配置ニ就カシメ、赤城ト西京丸ヲ本隊ノ右側カラ左側(非戰鬥側)ニ移シマシタ、斯ノ如クシテ我艦隊ガ漸々進ムニ從ツテ、敵八十隻ヨリ成ル優勢ノ艦隊デ、我軍ノ前面右方ニ當ツテ黒煙ヲ吐キツ、進ミ來リ、又別ニ前面左方ニモ二三隻ノ敵艦ガアツテ其煤煙ハ次第ニ左方ニ移ツテ來ルノヲ認メタ、伊東司令長官ハ左右兩方ノウチ首力ト認メラレル右方ノ敵ヲ先ヅ撃破シヤウト思フタモノデ、「第一游撃隊ハ右方ノ敵ヲ攻撃セヨ」ト命ジ、同二十分ニ西京丸ニハ「避ケヨ」ト命ジ、又本隊ニ向ツテハ同三十分ニ「速力十海里」、同三十二分ニ「距離ニ注意セヨ」ト命ジ、尙四十分ニハ赤城ニ「近寄レ」ト命ジ、同五十五分各艦ニ、「適當ノ時機ニ達セバ發砲セヨ」ト命ジタ、是ヨリ前第一游撃隊ハ、本隊トノ距離ガ遠過ギタカラ、之ヲ待合ハセル爲ニ速力ヲ六海里ニ減シタガ、零時五分ニナツテ本隊ニ準ヒテ大軍艦旗ヲ橋頭ニ掲ゲ、尋テ坪井司令官

日七十月九年七二治明 艦軍國清 艦軍國帝 臨ニ戰海海黃

艦軍國清

艦軍國帝



ハ部下ノ四艦ニ向ツテ「適當ノ距離ニ至ラバ發砲スベシ」ト命ジテ針路ヲ東北東ニ取り、右方ノ敵艦隊ニ向ハツトシタ際ニ、旗艦松島ヨリ前ニ述べタ如ク右方ノ敵ヲ攻撃スベキ命ニ接シタモノデ、此ノ信號ヲ敵艦隊ノ右翼ヲ攻撃スベキ命令ト解シテ、之ヲ斷行シヤウト決心シタ、此時本隊トノ距離モ適當ニナツタカラ、速力ヲ八海里トシテ零時三十分ヨリハ旗艦ノ令ニ依ツテ更ニ十海里ト爲シテ、坪井司令官ハ四艦ニ向ツテ「距離ニ注意セヨ」「速力ニ注意セヨ」ト命ジタ、抑モ司令官ハ出征ノ初カラ、敵艦隊ガ如何ナル陣形デアルトモ、我ハ戦闘陣形ト定メラレタ單縱陣ヲ最モ嚴正ニ制ツテ之ニ當ル考デアツテ、其練習ノ爲メ偵察巡航等ノ場合ニモ毎ニ單縱陣ヲ制ツテ練習ヲシタ程デアルカラ、今正ニ平素ノ希望ヲ實行スルノ時機トナツタ故、各艦ノ位置ハ充分整フテハ居ルガ、尙ホ一層嚴正犯スベカラザル陣形トシテ少シモ遺憾ノナイヤウト思ツタカラデアアル、此時敵ノ艦隊ハ殆ド横陣トモ見ラレルヤウナ最モ展開シタ後翼單梯陣ヲ布キ、旗艦定遠ハ鎮遠ト共ニ其中堅ニ位置ヲ取り、其左翼ニハ來遠、致遠、廣甲、濟遠、右翼ニハ經遠、靖遠、超勇、揚威ガ在ツテ、清國精銳ノ堅艦ヲ列子、我第一游擊隊ニ向ツテ航進シテ來タ、此時我游擊隊ノ取ツテ居ツタ東北東ノ針路ハ彼ノ中堅ヲ指シ、恰モ之ヲ突クガ如キ形勢デアツタカラ、坪井司令官ハ尙其方向ヲ持續シ、彼我相距ルコト殆ド一萬二千米突

位ノ所デ少シ針路ヲ左方ニ轉ジ、而シテ敵軍ノ右翼ヲ攻撃スベキ命令ヲ實行シヤウト考ヘタ、其譯ハ敵ハ戰鬥力ノ主要ナル速力ヲ活用シナイデ、遲速相違ノ諸艦ヲ混同スルヤウナ形勢デアアル故、之ニ乗ジテ先ヅ其右翼ヲ擊破シ、延ヒテ全軍ノ兵氣ヲ挫カウト思ツタカラデアアル、

午後零時五十分ノ頃ニナルト、兩艦隊ハ愈相近イテ、約ソ六千米突ノ距離ニナツタ、此ノ時敵ノ旗艦定遠ヨリ先ヅ我ニ向ツテ砲撃ヲ始メ、續イテ諸艦モ一齊ニ發砲シタガ、其距離ガ遠カツタモノデ、彈丸ハ大概我第一游擊隊ニ達シナイデ、近傍ノ海面ニ落下シタ、ケレドモ我第一游擊隊ハ自重シテ未ダ之ニ應ジナイ、所ガ會微風ガ東方カラ吹イテ、敵ノ硝煙ガ其艦隊ノ前ニ横ハツタ爲ニ、左翼ノ方ニ列シテ居ツタ數艦ハ認メルコトガ出來ナイ場合トナツタ、此時坪井司令官ガ第一游擊隊ノ諸艦ニ命令シテ、速力ヲ十四海里トシ、急進シテ(第一圖參看)旗艦吉野ハ午後零時五十五分距離三千米突ヲ確測シタ後ニ右舷砲臺カラ砲撃ヲ始メマシテ、主トシテ右翼ノ敵艦揚威、超勇ヲ激射シテ五十八分ニ至ツタ、時ニ其附近ニ居ツタ經遠形ノ一艦ガ進ンデ來ヤウトスル狀が見エタモノダカラ、轉ジテ之ヲ猛撃シ、同一時五分ノ頃ニナツテ揚威、超勇ト距離コト僅ニ千六百米突ニ迫ツタ爲ニ殆ド我彈丸ハ虚發ガ無カツタガ、同八分ニ敵ノ一彈我右舷舷門ノ直後ヲ破ツテ後

我第一游擊隊
ノ大奮戰

甲板ニ於テ爆發シ、藥筐引上器ニ在ツタ十二拇藥筐及彈丸架ニ在ツタ二榴彈モ之ガ爲ニ破裂シテ、分隊士淺尾少尉及水兵一名ヲ殪シ九名ヲ傷ケ、且火災ヲ起サウトシタ、ケレドモ直チニ之ヲ消止メタ、其中ニ彼我兩艦隊ガ相過ギ漸ク離レタカラ、同一時十四分ニ砲撃ヲ中止シタ、二番艦高千穂ハ敵艦ト距離コト四千五百米突ノ距離ニ至ツテ、先ツ敵ノ旗艦定遠ニ向ツテ砲撃ヲ始メ、漸次右翼ノ艦列ヲ猛撃シタガ、同九分敵彈我舷外ニ爆裂シテ右舷後部水準線上三呎ノ所ニ二三孔ヲ穿ツテ、兵員二名之ガ爲ニ死傷シタ、三番艦秋津洲ハ四千米突ノ距離ニ於テ旗艦定遠及比鎮遠ヲ第一ノ目的トシテ右舷カラ發砲シナガラ次第ニ進ミ、同一時五分ニハ敵ノ右翼ト二千米突以内ニ近イタモノデ、乃チ右舷全砲ヲ以テ猛撃シ、ソレヨリ右ニ旋回シテ敵ノ右翼面ニ出デタガ、同九分敵彈(二十一冊)五番砲楯ニ命中シ、二番分隊長永田大尉以下五名ヲ殪シ九名ヲ傷ケ、ソレヨリ同十五分敵隊ト千八百米突以内ニ近イテ愈猛撃シタ、(時ニ敵ノ水雷艇一隻其艦隊ノ背後ニ尾行シテ居ルノヲ認メタ)四番艦浪速ハ、同零時五十八分ニ打方ヲ命ジテ先ヅ敵艦來遠ニ向テ發砲シ、進ンデ致遠、揚威、超勇ヲ砲撃シタガ、同一時八分敵ノ巨彈右舷側外一米突ノ所ニ落チテ反跳シ、一番砲臺ノ直下水線部ヲ穿ツタ爲メ海水翻騰シテ甲板ヲ浸シタ、次デ敵ノ右翼ニアル三艦ヲ猛撃シタガ、其最近距離ハ二千五百米突デアツタ、

我第一游擊隊ハ斯ノ如ク勇戦シテ右翼ヲ通過シ、其航路ハ半月形ヲ畫イテ右方ニ變ジ、敵艦隊モ亦之ニ應ジテ方向ヲ少シク右方ニ變ジタケレドモ、速力ガ遲緩デアル所ノ揚威、超勇ハ、マダ其位置ヲ占ムルノ暇ガナクシテ我艦隊ノ猛撃ヲ受ケ、二艦俱ニ火災ニ罹ツテ終ニ運動スルコトガ出來ナイヤウニナツタ、此時我本隊モ既ニ戦ヲ開イタガ、第一游擊隊ハ尙ホ右方ニ旋回スレバ本隊ノ砲撃ト相對シテ危險デアルカラ、故ラニ速力ヲ十二海里ニ減ジテ、同一時二十分ニ大圈ヲ畫イテ左方十六點ノ方向變換ヲ行ヒ、我本隊ヲ圈ノ内方ニ置イテ反對ノ方向ニ通過シ、復タ敵ニ向ハウトシタ、

又本隊ハ第一游擊隊ト殆ド同一ノ航路ヲ取り、漸次敵艦隊ニ近接シタガ、敵ハ我第一游擊隊ト一戦ヲ交ヘテ後、其中堅ハ各艦首ヲ我本隊ニ向ケテ、斷ヘズ發砲シツ、衝突ヲ試ミヤウトスル様子デ猛進シテ來タ、併シ其兩翼ノ數艦ハ運動ガ亂レテ、陣形ガ整フテ居ラヌ、我本隊ノ六艦ハ專ラ單縱陣ヲ保ツテ直進シ、猛烈ナ發射ヲ始メタ、(第一圖參看)即チ旗艦松島ハ午後零時五十二分三千五百米突ノ距離ニ於テ、右舷砲臺ニ獨立打方ヲ命ジ、先ヅ敵ノ旗艦定遠ニ向ツテ發砲シタ、所ガ同五十五分ニ敵彈(十五珊)松島ノ三十二珊砲臺圍壁ノ上端ニ命中シテ砲員二名負傷シ、且ツ水壓管ガ破損シタモノダカラ、直ニ應急ノ修理ヲ加ヘ、同五十八分三千五百米突ノ距離ヲ測ツテ定遠ニ向ヒ初メテ三十二珊

我本隊ノ奮闘

比叡艦ノ苦闘

砲ヲ放チ、同一時二十分ニハ七番輕保砲敵彈ノ爲ニ破壊サレ、其全砲員及近傍ニ居タ信號兵二名死傷シタ、二番艦千代田ハ、同一時ニ五千米突ノ距離ヲ測ツテ定遠ニ向ツテ砲撃ヲ始メ、同六分進ンデ千七百米突ニ接近シテ猛撃シタ、三番艦嚴島ハ同零時五十五分ニ定遠ニ向ツテ砲撃ヲ始メ、漸次敵艦隊ノ右翼ヲ通過スルニ及ンデ諸艦ヲ猛撃シタガ、其後暫クニシテ定遠、鎮遠ノ兩艦ハ更ニ照準角内ニ這入ツタモノダカラ、再ビ之ヲ砲撃シタ、此間敵ト距ルコト五千米突カラ千八百米突迄デアツタ、而シテ同一時ノ頃敵彈(二十一珊)右舷發射管室ヲ撃ツテ、下士卒十一名ヲ殺傷シテ大損害ヲ與ヘタカラ、釣床五個ヲ用井一時ノ應急防水ヲシタガ、同五分ニ又他ノ敵彈(十五拇)ガ右舷側ヲ穿ツテ、後部汽罐室内ニ於テ爆裂シ、松澤少機關士及ビ卒五名ヲ殺傷シタ、四番艦橋立ハ、零時五十八分三千米突ノ距離ヲ測リ定遠及來遠ニ向ツテ砲撃ヲ始メタガ、同一時十五分ニ敵ノ一彈三十二珊砲臺ニ命中シテ、砲術長瀨之口大尉、分隊長高橋大尉及下士一名ヲ殲シ七名ヲ負傷サセタ、而シテ五番艦比叡ハ一時八分ニ四千米突ノ距離ヲ測リ來遠ニ向ツテ追撃砲ヲ放チ、同十分ニ二千五百米突ノ處ニ至リテ敵ノ左翼諸艦ニ向ツテ右舷側砲ヲ發射シナガラ、敵陣ニ漸ク接近シタガ、同十四分ノ頃ニハ其前續艦橋立ニ後レルコト千三百米突ニ及ンダ、此時敵ノ中堅ニ在ル定遠及ビ其左翼ニ居ル來遠ノ二隻ハ猛然トシテ我

右舷ニ薄ツテ衝突ヲ試ミヤウトスルモノ、如ク認メラレタノデ、比叡艦長ハ陣形ヲ保ツテ橋立ニ續行スルノハ危険デアルト考ヘタカラ、忽チ列ヲ離レテ最大ノ回轉力ヲ以テ定遠ト來遠トノ中間ニ突入シテ左右ニ敵ヲ受ケ、兩舷ノ砲員ハ死ヲ決シテ戰ツタ、此時定遠ハ左舷約ソ千米突ノ處ヲ通過シ、來遠ハ右舷正横四百米突ノ近距離ニ迫ツタ、比叡ハ此來遠ニ向ツテ機關砲ヲ以テ急射撃ヲ其甲板上ニ加ヘタ、而シテ敵ハ我ニ向ツテ魚形水雷ヲ發射シタケレドモ空シク艦尾ノ後方七米突許リノ處ヲ通過シタ、兎角スルウチ更ニ三四隻ノ敵艦ハ復々千米突乃至四百米突ニ迫ツテ交射撃ヲ加ヘタカラ、比叡ハ益奮テ之ニ應戰シタケレドモ敵ノ合圍ノ中ニ陥ツテ、四方カラ猛撃ヲ受ケタモノデ、艦體帆檣索具ニ至ルマデ概子破壊サレテ死傷者十名ヲ出シ、大檣頭ニ掲ゲタ軍艦旗モ破レ落チタモノデ直ニ新シイ旗ヲ掲ゲ、突貫シテ合圍ノ中ヲ脱シヤウトスル際、本隊ハ已ニ敵軍ノ外方ヲ旋ツテ左カラ右ニ通過スル際デアツタカラ、之ニ合スル考デ扶桑ノ後方ニ進ンダ、此時敵艦定遠鎮遠及來遠ノ三隻ガ追撃シテ來テ、ソレヨリ發射シタ三十珊半ノ榴彈ハ我右舷々側ヲ貫イテ、治療所ニ充テ、置イタ士官室ニ入り、後檣ニ中ツテ破裂シ、下甲板ノ後部全般ヲ破壊シ且ツ火災ヲ起シタ、火災ハ直ニ消止メタガ、此一戰デ軍醫長三宅大軍醫、主計長石塚大主計、村越少軍醫、及ビ下士卒十七名ハ戰死シ、分隊長高島大尉、

航海士田中少尉、分隊士小川少尉、及ビ下士卒三十二人ハ負傷シタ、六番艦扶桑ハ一時三分敵ト三千米突ノ距離ニ於テ定遠、鎮遠ニ向ツテ砲撃ヲ開始シタガ、同二十分定遠、來遠ノ二隻ハ發砲ヲ止メ、全速力デ疾駛シテ來タノヲ見タモノデ、急ニ之ヲ亂射シタケレドモ敵ハ少シモ屈シナイ、此時前續艦比叡ハ兩敵艦ノ中間ニ突入シ、尋デ定遠ハ猛然扶桑ノ右舷七百米突ノ距離ニ迫ツタカラ、扶桑ハ全速力ヲ以テ暫ク艦首ヲ左方ニ轉ジテ之ヲ避ケ、敵艦ニ向テ痛撃ヲ加ヘタ、此危急ノ際ニ右舷後甲板鈎床格納所敵彈ノ爲ニ發火シタガ、直ニ之ヲ消止ムルコトガ出來タ、此時航海士丸橋少尉、分隊士内崎少尉ノ二人ガ負傷シタ、以上述ベマシタ所ガ本隊各艦初戰ノ狀況デアル、又本隊ニ隨從シテ居ツタ赤城ハ其左側ニ居リマシタガ、一時九分ニ砲撃ヲ始メテ、右舷ナル定遠、鎮遠ノ二艦ト戰ヲ開イタ、併シ艦ノ速力本隊ニ續行スルコトガ出來ナイ爲メ、知ラズ識ラズノ間ニ孤立ノ地位ニ立ツタ、其中ニ兩軍相接シテ比叡ハ敵陣ニ突入シテ他方ニ出タガ、敵ノ來遠以下左翼ノ諸艦ハ同二十分比叡ヲ擊損ジタカラ、其銳鋒ヲ轉ジテ今度ハ赤城ニ向ツテ突進シ來リ、其距離僅ニ八百米突ニ近ヅイタカラ、赤城ハ之ニ對シテ猛烈ナ射撃ヲ行ヒ、來遠ヲシテ艦橋上人無キニ至ラシメタ、是時我艦内モ兩方ヨリ打出ス砲烟ノ爲ニ濛漠トシテ咫尺ヲ辨ジナイ程デ、甲板デハ殆ド敵艦ヲ視ルコトガ出來ナ

カッタ爲ニ、後砲臺ヲ指揮シテ居タ一番分隊長佐々木大尉ハ敵情ヲ視察シヤウト思ツテ艦橋ニ來タ所ガ、忽チ彈片ノ爲ニ負傷シ、距離測定ノ爲メ前檣樓ニアツタ橋口少尉候補生ハ敵彈ニ中ツテ斃レタカラ、航海士兼分隊士兼子少尉ガ、佐々木大尉ニ代ツテ後砲臺ヲ指揮シタ、所ガ同一二十五分艦尾ヲ通過シタ敵艦ヨリ放ツタ彈丸ガ、艦橋ニ中ツテ艦長坂元少佐及一番速射砲員二名ガ戰死シ二名ガ負傷シタモノダカラ、航海長佐藤大尉ガ艦長ニ代ツテ戰ヲ監督スルコト、ナツタ、次テ前部下甲板ニ中ツタ敵彈ハ前部彈庫及防火隊員四名ヲ殪シ一名ヲ負傷サセ、蒸氣管ヲ破壊シ、前部上甲板ニ於テ破裂シタ、他ノ一彈ハ唧筒ヲ破壊シ、砲員二名、捕索手一名ヲ殪シタ、其中敵艦來遠、致遠及廣甲ノ諸艦ガ追撃シテ來タノニ、我蒸氣管破壊ノ爲メ速力ガ減少シ、進退谷マルノ苦境ニ陥ツタカラ突然艦首ヲ右方ニ轉ジ、敵艦ト段々遠カッタノヲ機會トシテ應急修理ヲ施シタカラ、甚シク速力ヲ減ジナイヤウニナツタケレドモ、我艦ノ後方ヲ通過シテ後一旦比叡ニ向ツテ突進シヤウトシタ敵ノ諸艦ハ、此時更ニ其艦首ヲ我ノ方ニ向ケ、愈速力ヲ高メテ追躡シテ來タモノダカラ、已ムヲ得ズ針路ヲ南ノ方ニ轉ジ、急ニ艦尾ノ諸砲ヲ連發シテ防戦スル際、大檣ハ既ニ數發ノ敵彈ヲ受ケテ倒レタモノデ、直ニ軍艦旗ヲ前檣ニ掲ゲ、捕索手員ヲシテ壞倒シタ大檣ノ頂ニ旗竿ヲ立テサセタ、

巡洋艦代用西京丸ハ、軍艦赤城ト共ニ本隊ノ左側ニ在ツテ、二番艦千代田ノ左側後方約ソ四百米突ノ位置ニ居ツタガ、一時九分敵ト相距ルコト二千米突内外ノ距離ニナツテ打方ヲ始メタ、所ガ同十四分ニ敵彈(定遠カ又ハ鎮遠カラ發砲シタモノ)ガ上甲板士官室ヲ貫イテ、其附近ノ上甲板及ビ諸室ヲ破壊シテ左舷々側ニ落下シタ、

此ノ如ク我本隊及ビ赤城、西京丸等ハ奮戰シテ敵艦隊ノ前面ヲ通過シテ、漸次右方ニ轉ジ其背後ニ出ヤウトスル運動ヲシタ、(第三圖參看)ソコデ清國艦隊ハ屢針路及ビ方向ノ變換ヲ行ヒ、專ラ艦首砲ヲ以テ我ヲ制サウト勉メタヤウデアツタケレドモ、其隊列ハ益亂レテ、各艦個々ノ運動ヲシテ終ニ陣形ヲ存スルコトガ出來ナイヤウニナリ、殊ニ揚威、超勇ノ二隻ハ我猛烈ナ砲撃ヲ受ケテ、午後一時五分頃孰レモ火災ヲ起シ、就中超勇ハ艦體右舷ニ傾キ、尙前部ノ發砲ハ止メナカッタガ火勢益熾ニナツテ、同三十分前後終ニ沈没シタ、併シ是ト殆ト同時ニ、鹿島方面カラ平遠、廣丙及ビ一二ノ水雷艇ガ來テ敵隊ニ加ツタ、是ヨリ先キ我第一游擊隊ハ既ニ述ベタ如ク敵艦隊ノ右翼ヲ旋ツテ左方ニ十六點ノ方向變換ヲ行ヒ、本隊ヲ敵ト我トノ中間ニ見テ反對ノ方向ニ通過シヤウトスル際、偶西京丸ガ航進シテ來ルノヲ望ンデ、之ヲ其儘通過サセル爲ニ大圈ヲ畫イテ旋回シタ、此時伊東司令長官ハ第一游擊隊ヲシテ本隊ニ續行セシメヤウト思ツテ、一時三十分頃「第

一游撃隊來レト云フ信號ヲ掲ゲタ、所ガ坪井司令官ハ此信號ヲ本隊ノ旗艦松島ニ近ヅケト云フ命令ト解シテ、再ビ左十六點ニ方向ヲ變シ速力ヲ十五海里ニ増シタガ（恰モ此時西京丸ハ本隊ト第一游撃隊トノ中間ニ挾ツテ衝突ノ恐れガアツタカラ、全速力デ後退ヲ爲シテ游撃隊ノ後方ニ位置ヲ取ツテ行進シタ）本隊ハ此間徐々トシテ右方ニ方向ヲ轉シツ、アツタモノダカラ、大速力ヲ有スル第一游撃隊モ時ヲ費サナケレバ之ニ近ヅクコトガ出來ズ、已ムヲ得ズ此ノ運動ヲ斷念シテ速力ヲ十海里ニ減シ、更ニ本隊ノ殿艦タル扶桑ニ續航スルノ方針ニ變シ、而シテ吉野ハ二時九分敵艦ヲ右舷三千米突ニ望ンデ第二回ノ砲撃ヲ行ツタ、秋津洲ハ一時四十二分ニ先ヅ一彈ヲ放チ、次デ二時ニ五千米突ノ距離ニ於テ兩回獨立打方ヲ爲シ、猶ホ二千八百米突内外ニ進ンデ大ニ發砲ヲシタ、而シテ吉野ガ漸ク本隊ノ六番艦扶桑ニ近ヅカウトスル際、左舷後方ニ在ツタ西京丸ヨリ「比叡、赤城危險」ト云フ信號ヲ揚ゲタガ、其時ハ午後二時十五分デアツタ、如何ニシテ比叡赤城ハ是ノ如ク危險ノ位置ニ陥ツタカト云フニ、是ヨリ先キ比叡ハ敵隊ヲ突貫シ己ニ本隊ノ殿艦デアアル扶桑ニ接近セントシタ時、前ニ砲撃サレタ餘燼カラ再ビ火災ヲ起シテ、其位置ハ機關及ビ小銃彈藥庫ニ近イカラ、乗員ノ半數ヲ以テ消防ニ從事サセタ爲メ、大ニ戰鬥力ヲ減シ、且ツ艦内彈藥供給ノ途ガ杜絶シタモノデ、暫ク彈着距離外ニ出テ應急ノ修

理ヲシヤウトシテ、二時ニ「本艦火災ノ爲メ列外ニ出ヅ」ト信號シ、隊外ニ出テ南西ニ向ツテ航進シタ、其時ニ敵艦來遠外二艦ハ之ヲ追撃シテ來タケレドモ、直チニ其進路ヲ轉シテ更ニ赤城ニ向ツテ航進シ、同十五分ノ頃ニハ其後方三百米突内外ニ薄ツテ其發射シタ彈丸ハ赤城ノ艦橋ニ中リ、艦長ニ代ツテ戰ヲ督シテ居タ佐藤大尉ヲ傷ケタカラ、二番分隊長松岡大尉ガ其治療ヲスル間之ニ代リ、掌砲長進藤上等兵曹ガ松岡大尉ニ代ツテ前砲臺ヲ指揮シタ、然ルニ同二十分其艦尾四番砲カラ發シタ所ノ彈丸ガ來遠ノ後部甲板ニ中ツテ猛烈ナ火災ヲ起サセ、ソレガ爲メ他ノ敵艦ハ之ヲ救フ爲メ速力ヲ減ジテ其周圍ニ集ツタモノダカラ、赤城ハ僅カニ虎口ヲ脱シテ、敵艦ヲ距ルコト七八百米突ノ處ニ達スルコトガ出來タ、丁度此時ガ前述ノ西京丸ヨリ「比叡、赤城危險」ト云フ信號ヲ掲ゲタ時デアアル、又西京丸ガ此信號ヲ掲ゲタ時ハ前ニ述ベタ如ク游撃隊ノ背後ニ在ツタ際デ、恰モ敵ノ衝點ニ當ツテ居ツタ爲メニ、右ノ信號ヲ掲ゲタ後間モナク定遠、鎮遠其他二隻ノ爲メニ追躡サレテ、三十拇半ノ巨彈一發二百米突内外ノ近距離ヨリ來リ、最上甲板士官室「スカイライト」及「ハッチ」鐵欄ヲ打貫イテ爆發シ、續イテ三十拇半ノ彈丸其附近ノ諸所ヲ貫キ、而シテ其爆發シタ彈丸ノ破片ハ舵機ニ通ズル汽管ヲ破壊シ、汽動舵機等ハ其用ヲ爲サヌヤウニナツタ、ソコデ直チニ「我舵故障アリ」ト云フ信號ヲ掲ゲナガラ、豫

備舵索ビシクテシクヲ舵機ニ取付ケル際、十五拇彈及ビ小口徑速射砲彈數個後甲板ニテ破裂シタ爲メ、舵及ビ信號機ヲ破壊シ、他ノ十五拇彈ハ艦尾カラ舵機室ヲ貫キ下甲板ニ於テ炸發シ、寢室五箇所及ビ倉庫ヲ破損シ、又火災ヲ起シタカラ本隊ノ左側後尾ニ出テ豫備索ヲ用非タガ、操縦ガ思フヤウニナラヌモノダカラ、速力ヲ減シテ轉舵輪コンパイルヲ用意シ、更ニ全速力デ前進スルコトニシタ、其時又一個ノ敵彈ガ右舷後部ノ水線部ヲ貫イタモノダカラ、木栓ヲ填メテ一時ノ漏水ヲ防ギ、更ニ側板ノ裡面ニ假ニ鐵板ヲ張り「セメント」ヲ充填シテ猶進航シタ、此時定遠、鎮遠等ハ遂ニ速力ガ及バヌコトヲ覺ツタモノカ、舵ヲ轉ジテ引還シタガ、同四十分更ニ敵艦平遠、廣丙及水雷艇二隻ガ前方カラ航進シテ來タノヲ發見シタモノデ、西京丸ハ先ヅ最近ニ進ンデ來タ水雷艇ニ向ツテ劇シク砲撃ヲ加ヘ、彼ヲシテ狼狽急ニ艇首ヲ轉ジテ他方ニ逃レシメタ、次デ平遠、廣丙ト五百米突内外ノ距離デ交戦シ、將ニ行過ギヤウトスル際ニ敵ノ一彈來ツテ上甲板ニ火災ヲ起シタガ、之レモ直チニ消止メタ、此時更ニ敵ノ水雷艇福龍ガ進ンデ來タノヲ見テ、艦首ニ備ヘテアル十二拇砲ヲ放ツタガ、電氣機ニ故障ガアツテ電流ガ通ジナイモノデ五回迄發射シナカツタ、ソコデ今ハ是非ナク最後ノ手段トシテ艦首ヲ之ニ向ケテ乘沈メヤウトシタガ、コレモ轉舵ガ思フヤウニナラナカツタ爲メ目的ヲ達スルコトガ出來ナカツタ、福龍ハ其機ニ乗ジテ、凡ソ

西京丸萬死ノ
中ニ一生ヲ得

五百米突ヲ距テ、先ヅ其艇首ノ發射管カラ水雷ヲ發射シタ、併シ西京丸ノ乘員ハ水雷ノ進行スル方向ヲ見テ必ラズ我左舷ヲ外ルベキヲ信シタモノデ、尙進ンデ行クト果シテ十數米突ヲ離レテ通過シタ、彼ハ最初ノ一發ガ中ラナカツタ爲ニ益肉薄シテ來タガ、西京丸デハ唯一ノ生命ト頼ンデ居ル十二拇砲ニ故障ガアツテ思フヤウニナラヌノミカ、又左舷ノ四十七密砲モ發條ガ鈍ツテ發火力ヲ失ヒ、其上兵員ノ多數ハ豫備舵索ニ付キ、又ハ後部倉庫火災ノ消防ニ盡力シテ居ル爲メ、上甲板ニハ一人ノ銃手モ居ラズ、全ク少シノ抵抗モ試ミルコトガ出來ナイ場合トナリ、爲メニ唯敵ノ爲ス儘ニ任セルノ危急ニ陥ツタ、其内敵ハ已ニ我左舷正横四十米突ノ近距離ニ迫リ、必中ヲ期シテ更ニ旋回發射管カラ水雷ヲ發射シタ、所ガ幸ニモ其水雷ハ空シク船底ヲ潜ツテ反對側ニ往ツタモノデ萬死ノ中ニ一生ヲ得ルコトガ出來タ、尋デ午後三時ニナツテ再ビ敵ノ水雷艇ガ四千米突ノ距離カラ我ニ向ツテ追撃ヲ試ミタケレドモ、我艦ノ速力ニ及バナイデ午後四時頃ニナツテ中止シタ、ケレドモ西京丸モ舵機大砲等ニ大破ヲ生シ戰鬪力ヲ失ツタモノダカラ針路ヲ南方ニ取ツテ航進シ、三時十五分ニハ赤城ノ本隊ニ向テ航行スルニ出會シ、四時二十分ニハ火災ノ爲メ列外ニ出タ比叡ニモ會ツタ、因テ「損所如何」ト云フ信號ヲシタノニ、「火災消滅」ト云フ答ガアツタ、同時ニ西京丸カラモ「舵機故障アリ假根據地ニ歸ル」ト云フ

信號ヲ掲ゲテ、獨リ戰場ヲ去ツテ假根據地ニ向ツタ、(即チ是ガ西京丸ノ最初ヨリ終リマデノ戰況デアリマス)

前ニ立チ戻ツテ中シマスガ、西京丸カラ「比叡、赤城危険」ト云フ信號ヲ掲ゲタ時ハ、第一游撃隊ガ本隊ニ續行シヤウトスル運動ヲ取ツタ時デ、坪井司令官ハ今游撃隊ノ任務ハ斷然左轉シテ比叡、赤城ヲ救フニアルト決心シ、直チニ本隊ニ續行スルノ希望ヲ中止シテ更ニ左十六點ノ方向變換ヲ行ヒ、(第四圖參看)大速力ヲ出シテ赤城ト左舷ニ在ル敵艦隊トノ中間ニ向ヒ、反對側ニ在ツテ敵ヲ望ム本隊ト六千米突ヲ隔テ、夾撃ノ姿勢トナツタ、(第五圖參看)而シテ旗艦吉野ハ二時三十五分三千米突ノ距離デ第三回ノ砲撃ヲ始メ、敵ノ隊列ト反航シテ猛烈ナ射撃ヲ加ヘ、尙敵ノ水雷艇ヲ左舷艦首二千八百米突ノ所ニ認メ大ニ之ガ防備ヲシタガ、彼ハ終ニ左舷約千五百米突ノ所ヲ通過シテ他方ニ去リ、是ヨリ一層猛烈ナ砲撃ヲ行フタ、高千穂ハ同三十分三千米突ノ距離ニ於テ敵艦ニ向ツテ猛撃ヲ加ヘ、又水雷艇一隻ヲ認メタカラ機砲ヲ以テ亂射シタ、秋津洲ハ同三十六分ニ四千五百米突ノ距離デ砲撃ヲシ、進ンデ一千五百米突ニ接近シタガ、是時敵彈「ブーブデッキ」ヲ掠メテ砲臺下士一名ヲ傷ケ、更ニ進ンデ左轉シヤウトスル時、西京丸ガ左側ニアツテ、「我レ舵機ヲ損ス」ト云フ信號ヲ掲ゲテ艦首ヲ通過シヤウトシタカラ、暫ク停止シ

比叡赤城ノ危
険ト第一游撃
隊ノ援助

其横過スルノヲ待ツタ爲メニ前續艦ト遠ク離レ、殆ド孤立ノ姿トナツタ、ソコデ全速力ヲ出シテ之ニ追及シヤウトスルニ方ツテ、敵艦定遠、鎮遠、靖遠漸々接近シテ二千米突ニ迫ツタモノダカラ、大ニ是ト戰ヒ又敵ノ水雷艇ガ突進シテ來タノヲ認メテ、機砲ヲ以テ亂射シタ、

第一游撃隊ノ攻撃ニ對シテ敵ノ前半隊ハ、右先鋒梯陣ノヤウナ陣形ヲ作ツテ我ニ迫リ、其後半隊ハ赤城、比叡ヲ見捨テ、引返シタ數艦ト合シテ單縱陣ヲ成シ、我ヲ砲撃シナガラ通過シタ、又比叡ハ戰場ヲ距ル十二三海里ニ及ンダ頃、殆ド戰鬥力ヲ恢復シタモノダカラ、再ビ本隊ニ加ハラウト思ツテ針路ヲ變ジテ戰場ニ向ツタガ、此時既ニ薄暮ニ際シテ彼我ヲ辨別スルコトガ出來ズ、且ツ五十餘名ノ死傷者ヲ出シ軍醫官二名共斃レ、看護手看病夫モ或ハ死シ或ハ傷キ、負傷者ニ治療ヲ施スモノガナイノデ、已ムヲ得ズ針路ヲ變ジテ假根據地ニ還リ、又赤城ハ二時三十分敵艦ヲ距ル三千米突以上ニ達シタノデ、速力ヲ緩メテ蒸氣管ノ修繕ヲ加ヘナガラ、針路ヲ北方ニ定メテ本隊ニ合シヤウト思ヒ、修繕ヲ了ツテカラ後全速力ヲ以テ五時五十五分漸ク此目的ヲ達シタガ、此間ニ敵艦廣丙、平遠及ビ砲艦鎮中、鎮南ヲ右舷前部ニ見テ是ト對シ、又揚威ガ火災ヲ起シタノヲ來遠デアアルト認メテ之ニ近ヅカウトシタ爲ニ、再ビ重圍ノ中ニ陷ラウトシタガ、幸ニ之ヲ免レテ本

隊ニ合スルコトが出来タ、以上ガ比叡、赤城ノ戦闘始末デアル、是ヨリ更ニ本隊ノ状況ヲ述ベル、本隊ハ敵ノ右翼ヲ旋回シテ次第ニ右方ニ轉ジマシタガ、(此時ハ第一游撃隊ガ軍艦比叡、赤城ヲ救ハフト思ツテ左轉シタ時デアル)右舷ノ方ニ居ツタ敵艦隊トノ距離ガ遠クナツタモノダカラ、一時打方ヲ中止シ、稍接近スルニ及ンデ旗艦松島ハ二時二十六分ニ第二回ノ戦ヲ開キ、其三十二珊砲ヲ以テ鎮遠ヲ目掛ケテ轟發シタ、又其際新タニ敵軍ニ加ツタ平遠ガ右方カラ來テ我艦ノ前面ヲ通過シヤウト思ツテ、左舷砲ヲ以テ我ニ向ツテ來タカラ、松島ハ他ノ本隊諸艦ト共ニ之ヲ射撃シタガ、同三十四分ニ平遠カラ放ツタ一發ノ二十六珊砲彈ガ左舷士官次室(下甲板治療室)ニ命中シ、掌水雷長要具室ヲ貫イテ、左舷前部發射管員四名ヲ殪シ、發射管ノ電纜ヲ切斷シ、尙其近傍ニアル準備水雷ノ機室ヲ破ツテ外面處々ニ打撃ヲ與ヘ、實用ニ適セヌヤウニシ、終ニ三十二珊砲臺ニ中ツテ爆發シタ、ケレドモ幸ニ裝填シタ水雷ハ損害ヲ受ケナカツタモノダカラ、直チニ電纜ヲ接續シ使用ニ差支ナイヤウニシタ、尋デ三時十分ニハ又平遠カラ發シタト思ハル、一發ノ四十二密砲彈ガ、左舷中央水雷室ノ上部ヲ貫イテ大橋下部ニ中ツテ爆發シ、其左舷發射管員ヲ二名殪シタ、二番艦千代田ハ一時四十七分三千五百米突ノ距離ヲ測ツテ再ビ打方ヲ始メ、四千三百米突ニ至ルマデ間斷ナク發砲シ、一旦中止シテ

又二時三十五分ニナツテ、更ニ平遠ニ向ツテ二千五百米突或ハ二千三百米突ノ距離ヲ測ツテ砲撃ヲシタ、ソレカラ三番艦嚴島モ他艦ト相前後シテ發砲シタガ、一時二十分十五分ノ敵彈ガ來ツテ大橋ヲ貫キ、傳話管、距離通報電線及ヒ揚彈器ノ鐵鎖ヲ切斷シ、又他ノ一彈ハ士官室厨房内デ炸發シ、其他一二彈ヲ蒙ツタ、四番艦橋立ハ、二時十五分、平遠ニ向ツテ發砲シ、五番艦扶桑モ亦發砲シタガ、其際二時三十一分ニ敵彈來ツテ煙突ノ下カラ左舷十七姆砲臺ヲ貫キ、砲員一名信號兵一名ヲ殪シタ、即チ是ガ本隊第二回ノ戦闘デアル、

此ノ如ク本隊ハ先ヅ平遠ヲ撃退シ、轉ジテ其時錯雜シテ殆ド一團トナツテ居ル敵艦隊ヲ右舷ノ方カラ砲撃シタガ、其際尙游撃隊ハ敵ヲ本隊ノ中間ニ置キ反對側ニ在ツテ、同ジク砲撃ヲ加ヘタモノダカラ、愈々包圍攻撃ノ姿トナツテ敵ヲシテ大ニ苦境ニ陥ラシメ、平遠、來遠ハ火災ヲ起シ、廣丙ハ陸地ノ方ニ逃走シ、揚威ハ大孤山沖ヲ望ンデ全速力ヲ以テ逃レタガ、其後終ニ淺瀬ニ乗揚ゲテシマツタ、次ニ亦復第一游撃隊ニ就テ述べルト、比叡、赤城ガ敵ト遠ザカツタノヲ悟リ、且ツ之ヲ追ツタ敵艦モ已ニ引還ヘシ、我ヲ砲撃シナガラ通過シタノデ、午後二時五十四分左方ニ十六點ノ旋回ヲ行ヒ、速力ヲ十四海里ニ減シ、隊列ヲ整ヘテ敵ヲ追ヒ、次デ右八點ニ方向ヲ

變換シ、更ニ速力ヲ十二海里ニ減シ、本隊ノ進路ト直角ニ進ミ、是ト十字砲火ヲ爲シテ敵ノ右翼ヲ撃タウト企テタ、ケレドモ本隊ハ此前ニ右方ニ十六點ノ方向變換ヲ行ツテ居ツタモノダカラ、丁度游撃隊が進ンデ來テ其距離ガ彈丸ノ達シ得ベキ距離ニ近ヅイタ時分ニハ、本隊ハ既ニ敵ヲ左方ニ見テ通過シタ後デアツタカラ、少シク機ニ晚レタ感ハアツタガ、尙游撃隊ハ本隊ト共ニ第四回ノ痛撃ヲ加ヘタ、ソレガ爲メニ敵ノ陣形ハ益亂レテ、其旗艦定遠ハ三時十分頃前部ニ大火災ヲ發シ、前檣頭モ折レテ其旗ハ檣ノ中間ニ翻騰トシテ居ツタ、又致遠ハ要部ニ打撃ヲ被リ、三時三十分右舷ニ傾イテ沈没シタ、其他ノ敵艦モ或ハ火災ニ苦ミ、或ハ進退ニ窮シ、濟遠先ヅ戰場ヲ去リ、之ニ次デ廣甲、經遠、來遠、靖遠モ皆大連灣ノ方ニ向ツテ戰場ヲ遠ザカリ、而シテ廣甲以下ノ四隻ハ沿岸ノ淺イ處ヲ望ンデ遁走シタ、是ニ於テ第一游撃隊ハ之ヲ追撃シ、本隊ハ猶殘留スル所ノ定遠、鎮遠ノ二隻ニ向ツテ砲撃ヲシタ、ソコデ旗艦松島ハ午後三時二十六分ニ、其三十二珊砲ノ發射ヲ行ツタガ、同三十分ニナツテ、鎮遠カラ放ツタ二十珊半砲ノ巨彈ニ發ガ、我十二珊四番砲門カラ入ツテ、其一彈ハ砲身ニ命中シ、更ニ上甲板ヲ通ツテ爆發シナイデ右舷側カラ海中ニ落ち、之ガ爲メ海水高ク飛騰シテ前甲板ニ瀧ノ如ク注下シタ、他ノ一彈ハ四番砲楯ニ命中シテ破裂シ、其附近ニ堆積シタ所ノ裝藥ヲ爆發サセタモノダカラ、ソレ

第四回ノ痛撃
ト敵艦隊ノ大
損傷

我旗艦松島

ガ爲メ艦體約ソ五度バカリ傾キ、白煙暴騰シテ四面朦朧少シモ見エヌヤウニナリ、又艦内ニ火災ヲ起シタ、ソコデ松島ノ砲術長井上大尉ハ、前部彈藥庫ノ火災ニ遇フヲ虞レテ、火藥庫ヲ救ハウト思ツテ急ギ下甲板ニ降り右舷側ニ出タ所ガ、煙ガ艦内ニ充塞シテ寸尺モ見分ケラレヌ、ソレノミナラズ、其邊ニ木片或ハ死骸ガ横ツテ居テ、自由ニ進ムコトガ出來ナカツタモノデ、終ニ煙ノ少イ所ヲ進マウト思ツテ、左舷側ヲ進ンデ往ツテ見ルト、稍前後ヲ見透スコトガ出來タカラ、直チニ走ツテ前部火藥庫ニ至ルト、庫ノ入口ハ開イタ儘デ其附近ニハ死體ガ横ハリ、本片トカ又ハ帆布類ガ散亂シツ、燃エテ、殊ニ二番砲ノ後部ノ方デ甚シク燃立ツタ、是ガ爲メ近傍ノ火氣ノ庫内ニ入ルコトヲ防ガントシ、海水ヲ灌ガセヤウト欲シタケレドモ、充分ニ水ヲ得ルコトガ出來ナカツタ、ソノ上ニ「ホース」ハ短クテ庫内ニ達シナカツタカラ、止ムヲ得ズ近傍ニ居タ二三ノ兵員ヲシテ桶ニテ先ヅ庫内ニ近イ所ノ火災ヲ消滅スルコトニ盡力シタ、(此邊ノコトハ深ク將來ニ注意ヲ要スルコト、思ヒマス)而シテ稍其鎮マルノヲ待ツテ、庫口カラ庫内ヲ覗イテ見ルト、最早火氣ガ無イト云フコトヲ慥メタモノデスカラ、尋デ下甲板砲臺ノ砲ヲ檢查シタ所ガ、十二門ノ備砲ノ中一門ハ飛去ツテ、他ノ三門ハ甲板破損ノ爲メ使用スルコトガ出來ズ、殊ニ其砲具、附屬具及ビ發射電池、電纜等ガ破壊シテ飛ンデシマツタモノデ、復タ收拾

スルコトが出来ナクナツタ、加之分隊長志摩大尉、分隊士伊東少尉以下二十八人ハ戦死シ、艦隊軍醫長河村軍醫大監、分隊士笹岡少尉、大石少尉候補生、以下六十八人ヲ負傷セシメ、殆ド一人モ健全ナル砲員ヲ見出スコトが出来ナカッタ、然ルニ此時我針路ハ漸次左轉スルノデ、砲術長ハ先ヅ右舷砲ヲ使用シヤウト思ツタ所ガ、使用ノ出来ル各砲モ木片或ハ死屍ガ砲側ニ散亂シテ居ツテ、砲ノ旋回ガ自由ニナラヌモノデ、偶來會シタ一人ノ軍樂員ニ命ジテ之レヲ砲員トシ、七番砲ヲ使用スル目的デ砲側ノ木片ヲ取片付ケテ居ル際、更ニ二人ノ兵士ガ來ツタカラ、乃チ是ト前ノ軍樂員ヲ合セテ三名ヲ砲員トシテ七番砲ヲ使用シ、電纜ガ無カッタカラ撃發打方ヲ行ヒ、尋デ兵員ヲ呼集メテ尙二門ヲ整へ、漸ク發射スルコトが出来タ、又敵彈爆發ノ當時三十二珊砲ヲ裝填シヤウト思ツテ尾栓ヲ開放シテ居ツタガ、艦ノ震動ガ激烈デアツタ爲メ尾栓ノ腕ヲ少シ垂下サセラレ、之ガ爲メ閉鎖スルコトが出来ナイノデ、應急修理ヲ加へ、通常榴彈ヲ裝填シタケレドモ、戰鬥終結ニ至ルマデ遂ニ發射スルコトヲ得ナカッタ、既ニシテ伊東司令長官ハ漸次ニ本隊ヲ左旋サセ、八點ノ方向變換ヲ行ツテ、定遠、鎮遠ト逃走シタ敵艦トノ間ニ入込ム運動ヲ取ラウト思ツタガ、斯ノ如クスルト舷側ニ大破孔ヲ生シタ松島ノ左舷ハ風上ニナリ、火災ノ勢力ヲ強ムルノ虞ガアルノミナラズ、煙ヲ艦内ニ吹込シテ砲臺内ノ働作ヲ妨グヤウニナ

ルノデ、已ムヲ得ズ左舷ヲ風下ニシテ火災ヲ鎮ムルガ爲メ左十六點ノ方向變換ヲ行ヒ、右舷ヲ敵ニ向クル運動ヲ取り、午後四時ニナツテ火災ハ消滅シタケレドモ、艦體及兵器ノ損害ト兵員ノ死傷トハ意外ニ多カッタカラ、伊東司令長官ハ到底先頭ニ立ツテ艦隊ヲ指揮スルニ適サナイコトヲ察シ、寧ろ各艦ヲシテ獨立運動ヲ爲シテ敵ニ當ラシムルガ宜イト思ヒ、四時七分遂ニ松島艦長ニ命ジテ不管旗ヲ掲ゲサセ、各艦長ヲシテ自由運動ヲ取ラシメヤウトシ、尙手旗信號ヲ以テ「旗艦大砲大概故障アリ各自進撃セヨ」ト各艦ニ命ジタ、其理由ハ豫テヨリノ戰鬥規約ニハ自由運動ヲナス場合デアツテモ甚シク本隊ヲ離レテ孤立ノ位置ニ陥ルベカラザルコト、及ビ隣艦ハ成ルベク結合ヲ保ツテ互ニ協力スベキコト、決定シテアツタカラ、今旗艦ハ此ノ規約ニ據リ手旗ヲ以テ理由ヲ説明シタノデアル、併シ此ノ如クシテ信號ヲ與ヘテ居ル間ニ大ニ時間ヲ費シテ單獨ニ進撃サセル時機ノ過ギタコトヲ認メタカラ、同五十五分ニナツテ、右ノ命令ヲ取消ス爲メ「旗艦ノ通跡ヲ進メ」ト云フ信號ヲ掲ゲタ、

我他艦ノ動靜

此前後ニ於ケル他艦ノ動靜ヲ簡單ニ述ベルト、軍艦千代田ハ三時二十分三千二百米突ノ距離ニ於テ左舷打方ヲ始メ、同二十三分二千八百米突ニ達シタ時分ニ敵彈ガ左舷中央部水線上四尺餘リノ處ニ命中シテ、機關室「アーマード、ドーア」ノ上ヲ通過シ、右舷中央

部水線上二尺餘ノ處ヲ貫イタ、已ニシテ一旦砲撃ヲ止メ、四時再ビ砲撃ヲ開始スル際ニ、旗艦カラ「各自進撃セヨ」ト云フ信號ヲ掲ゲタモノダカラ、定遠、鎮遠ニ當ラウト欲シテ艦首ヲ右舷ニ向ケ本隊ヲ出タガ、又「旗艦ノ通路ヲ進メ」ト云フ信號ニ接シ速力ヲ増シテ本隊ニ復歸シタ、

軍艦嚴島ハ三時十五分砲撃ヲ始メ、四千五百米突ヨリ三千米突マデ接近シテ、一意定遠、鎮遠ヲ狙撃シタガ、適平遠ガ逃走シテ左舷千二百米突ノ處ヲ通過シタモノダカラ、亦之ニ向ツテ發射シタ、此交戦中平遠ノ五十密彈丸二個命中シテ、其一ハ前甲板下左舷窓戸ノ上部ヲ破ツテ中甲板「メスデツキ」衣裳棚ニ至ツテ發火シタガ、直チニ之ヲ消止メタ、又他ノ一彈ハ左舷側鈎床格納所ヲ貫イテ破裂シ、三十二珊砲塔ニ中ツテ亂飛シ、主帳、水兵、火夫、厨夫十名ヲ殪シ、其破裂ノ際鈎床格納所カラ發火シタガ、之モ亦直チニ消止メタ、次デ旗艦ニ不管旗ヲ掲ゲタノヲ見タケレドモ艦首砲裝填中デアツタカラ、依然旗艦ノ通跡ヲ進ンダ所ガ、再ビ「各自進撃セヨ」ト云フ信號ガアツタモノデ、針路ヲ變ジテ定遠、鎮遠ニ向ツタ、所ガ又「旗艦ノ通跡ヲ進メ」ト云フ信號ニ接シタカラ本隊ニ復歸シタ、橋立ハ三時十五分ニ砲撃ヲ始メタケレドモ、旗艦松島ノ不管旗ヲ掲ゲタノヲ見テ本隊ヲ離レ、定遠、鎮遠ニ向テ突進シヤウトシタガ、味方ノ軍艦ト重ツテ其砲撃ヲ妨グル虞レ

ガアル爲メ再ビ本隊ニ歸ツタ、扶桑ハ三時二十四分ニ砲撃ヲ始メタガ、同五十分敵ノ砲彈(三十珊半デアリマシタラウ)ガ左舷ヨリ右舷ニ貫通シ、次デ四時十五分ニ我艦隊ノ後方ニ當テ敵ノ水雷艇ヲ認メタケレドモ、彼レハ敢テ近ヅカナカッタ、此時定遠ハ焔煙ニ包マレテ主力ノ砲煩殆ド其用ヲ爲サナイヤウニナリ、鎮遠ガ其側ニ在ツテ大ニ之ヲ掩護シテ居タ、此ノ如ク我本隊ノ砲撃中定遠、鎮遠ハ其他ノ諸艦ト漸ク合シテ、而シテ我本隊ト第一游撃隊トハ大ニ離隔シ、且ツ時已ニ日没ニ近ヅイタモノダカラ、伊東司令長官ハ五時四十分遙カニ第一游撃隊ニ向ヒ「本隊ニ復歸セヨ」ト云フ信號ヲ掲ゲタ、是ヨリ先キ第一游撃隊ハ、水ノ深淺ニ注意シテ速力ヲ増減シ、大連灣ノ方へ遁走シテ往ク敵艦數隻ヲ追撃シタガ、當時濟遠、廣丙ハ遠ク西北西ニ逃レ、靖遠、經遠之ニ次ギ、來遠ハ後部ニ火災ガ起ツテ右ニ傾斜シ、又平遠、廣甲ハ午後四時十六分水雷艇ト共ニ北方ニ走ルニ際シテ、靖遠カラ信號ヲ掲グルト同時ニ、來遠ハ小鹿島ノ方ニ針路ヲ轉ジ、靖遠モ亦同一方向ヲ取ツタ、此時敵艦中其外部ニ現ハル、損傷ノナイモノハ、經遠ト靖遠トダケデアツタカラ、坪井司令官ハ先ヅ撃破シナケレバナラヌノハ經遠デアルト斷定シ、專ラ之ヲ追躡シテ同二十分ニ速力ヲ十四海里ニ進メ、同四十八分軍艦吉野ハ二千

三百乃至二千五百ノ距離ニ於テ砲撃ヲ始メ、千八百米突ニナツテ彈丸ガ最モ能ク命中シ、經遠ハ左舷ニ傾斜シ黑煙艦内ニ漲ツテ針路定ラズ、舵ヲ操ルコトガ出來ナイヤウニナツタ、然ルニ五時五分ニナツテ、經遠ハ轉ジテ東方ニ向ツテ引返ヘシタモノダカラ、吉野モ亦之ニ件ツテ速力ヲ十海里トシテ、左十六點ニ變針シタ、所ガ適、軍艦高千穂、秋津洲、浪速モ亦來會シテ猛撃ヲ加ヘタ爲メニ、經遠ノ火勢ハ益、加ツテ中部後部ノ煙煙天ヲ焦ス有様トナツタ、已ニシテ其艦體ハ漸次左舷ニ傾斜シタケレドモ機關ノ前進ガ尙未ダ止マラナイカシテ縱横ニ旋轉シ、五時二十五分ニ至リ傾斜益甚シク、其右舷推進器ハ水面上ニ出デ、更ニ前部ニ火災起リ、同二十九分ニ左舷艦首カラ漸ク水中ニ沈ンデ遂ニ艦首ヲ東ノ方ニ向ケ、左舷ニ轉倒シテ沈没シテシマツタ(第八圖參照)

尋テ第一游撃隊ハ直チニ針路ヲ大孤山鎮沖ノ方ニ取り、更ニ靖遠、來遠ヲ追躡スルトキ、即チ五時四十五分ニ本隊ヨリ復歸セヨト云フ信號ニ接シタモノダカラ、針路ヲ轉ジテ薄暮ニ至テ之ニ合シタ、此時敵ハ南方ニ針路ヲ取テ威海衛ニ向テ逃走シヤウトスル如ク見ヘタガ、伊東司令長官ノ考フル處デハ夜間ニ於テ礮火ヲ交ユルノハ隊列ヲ混亂サスル虞ガアリ、且ツ敵ハ水雷艇隊ヲ率非テ居ルカラ之ヲ追究スルノハ策ノ得タルモノデナイト信シテ、明早朝ヲ待ツテ威海衛ニ至リ彼レノ逃路ヲ遮ルノ策ヲ執ルコトニ決シタ、而シ

テ旗艦松島ハ敵彈ノ爲メニ甚シキ損害ヲ被ツテ、到底旗艦ニ適シナイヤウニナツタカラ、此夜八時頃伊東司令長官ハ幕僚ヲ率ヒテ端艇ニ乘リ急速橋立ニ移ツテ之ヲ旗艦トシ、松島ニハ吳軍港ニ廻航ヲ命ジ、爾餘ノ諸艦(比叡、西京丸ハ居ラヌ)ヲ率非テ大約ソ敵ノ艦隊ト竝行スルト想ハル、航路ヲ取ツテ進ンダ所ガ、夜ガ明ケテ見レバ既ニ敵艦隊ハ何レカニ遁走シテ其隻影ヲモ認メナカッタ、以上ガ我艦隊ノ戰況デ、如何ニモ込ミ入ツテ居ル、是ヨリ更ニ清軍ノ戰況ヲ述ベルカラ、兩々御參照ニナツタラ稍、事實ガ明瞭ニナラツト思フ、

(清國艦隊ノ戰況)清國北洋艦隊ハ八月中旬カラ、概子威海衛港内ニアツテ專ラ勢力ノ保全ニ勉メテ居ツタ、ソレハ彼ノ主眼トスル所ハ艦隊ニシテ損害ヲ受ケザル限リハ、日本ノ陸兵ハ清國ノ海岸ニ上陸スルコトハ出來ナイト信シテ居ツタカラデアアル、然ルニ九月下旬ニナツテ、日本ノ第一軍ハ平壤ニ向ツテ進撃シ其勢力ガ頗ル盛ンデアツテ、平壤ニ在ツタ清國守將等ハ急ヲ李鴻章ニ告ゲテ、援兵ヲ乞フコトガ頻繁デアツタカラ、李鴻章モ亦恐愕シテ援兵ヲ送ラウト決心シ、旅順ニ在ツタ毅字軍總統宋慶ニ送兵ノ命ヲ下シタケレドモ、陸路ヲ取レバ行軍遲々トシテ急ニ應援スルコトガ出來ナイカラ、終ニ海路カラ大東溝ニ輸送シヤウト思ツテ、之ヲ護衛スル爲メ九月十二日ニ威海衛ニアツタ北洋海

軍提督丁汝昌ニ向ツテ「在韓ノ清軍ヲ應援スル爲メ若干ノ運送船ヲ大連灣カラ大東溝マデ護送セヨ」ト云フ命令ヲ下シタ、サウシテ其大東溝地方ヲ上陸地ニ撰定シタ譯ハ、盛字軍四營ガ嘗テ同所カラ無事上陸ヲ遂ゲタモノデ、八月二日旅順塙總辦兼營務處記名道龔照璣ハ「大東溝ハ我軍運輸ノ要港ニ係ハル、若シ海軍鐵艦常ニ彼地及ビ海洋一帯ノ洋面ニ在リテ徘徊セバ、倭船ヲシテ敢テ運路ヲ截斷スル能ハザラシムベシ、將來ノ運輸營口ニ比スレバ更ニ便捷トナス」ト云フ報告ヲ李鴻章ニ送り、尋デ四日ニナツテ更ニ大東溝ノ西方近距離ニアル大洋河口ノ最モ揚陸ニ適シテ居ルコトヲ報シタモノダカラ、乃チ丁汝昌ニ前ノ如ク命令シタノデアル、ソコデ丁汝昌ハ運送船護送ノ命ヲ受クルト即日艦隊ヲ率井テ威海衛港ヲ發シテ、翌十三日ノ曉天旅順口ニ達シ、港外ニ碇泊シタ、然ルニ同日正午ノ頃ニナツテ、威海衛ヨリ「今朝日本ノ巡洋艦二隻ヲ港ノ沖ニ認メタリ」ト云フ報知ヲ得タガ、是ハ吉野、高千穂ノ二艦ガ偵察ノ爲ニ往ツタ時デアル、因テ丁汝昌ハ之ヲ擊破シヤウト思ツテ直ニ全艦隊ヲ以テ再ビ威海衛ニ引還シテ、十四日ノ拂曉港口ナル鷄鳴島附近ニ達シ更ニ山東角ニ進ンダ、然ルニ清兵ハ往々彼我ノ別ヲ誤ツテ自國ノ軍艦ヲ追跡シテ無益ノ勞ヲ爲シタコトガ屢アツタモノダカラ、丁汝昌ハ前記ノ報告ニ接シタケレドモ容易ニ信ヲ置クコトが出来ズ、鎮遠ヲ特ニ威海衛ニ遣シテ信僞ヲ確メ、愈日

本軍艦ハ吉野、浪速（高千穂ヲ浪速ト誤解シタノデアル）ノ二隻デアルト云フコトヲ知リ、致遠、靖遠ノ二隻ヲ遣ハシテ南東岬角附近ノ偵察ヲ行ハセタ、何ゼカナレバ此時ハ清國ノ彈藥ヲ搭載シタ獨逸汽船「イレネー」號ガ威海衛ニ入港スベキ豫定デアツタカラ、日本軍艦ニ拿捕セラレハセヌカト云フコトヲ心配シタカラデアル、所ガ薄暮ニ至ツテモ「イレネー」號ハ遂ニ來ラナイデ、致遠、靖遠モ空シク歸隊シタモノダカラ、丁汝昌ハ十四日ノ午後十一時ニナツテ艦隊ヲ率ヒテ山東角ヲ去ツテ翌十五日午前大連灣ニ投錨シタ、初メ丁汝昌ハ運送船護送ノ途中ニ於テ敵ノ艦隊ニ出會シハセヌカト云フコトヲ慮ツテ、之ヲ避ケンガ爲ニ先ヅ艦隊ヲ率ヒテ大同江附近ニ至リ、敵艦隊ヲ搜索スルノ策ヲ取ツタ、ソレハ如何ナル理由ニ基イタノカト云フト、日本艦隊ハ其陸軍ト動作ヲ共ニスベキヲ以テ、必ズ大同江附近ニ居ルニ相違ナイカラ、吾先ヅ進ンデ彼ヲ擊破スルコトガ出來タナラバ、其後ハ運送船ノ護送ナドハ極メテ容易ノコトデアルト信シタノデアル、（此考タルヤ實ニ其當ヲ得タモノデ、敵艦隊ヲ擊破セザル間ハ、運送船護送ノ危険ナコトハ元ヨリ言フ迄モナイ、且ツ日本艦隊ハ大同江附近ニアラントノ推測モ、能ク適中シテ居ル、果シテ我艦隊ハ其當時大同江附近ニ居ツタノデアル）然ルニ山東角附近ニ往ツテ日本ノ二艦ヲ偵察シタ爲ニ、十四日ヲ消費シ、翌十五日ハ豫テヨリ大連灣ニテ運送船ニ會

敵艦隊ノ陸兵
運送

合スベキ約束ガアツタモノダカラ、遂ニ大同江附近ノ搜索ヲ遂ゲルコトガ出来ナイデ、大連灣ニ回航シタノラシイ、夫レデモ尙丁汝昌ハ、護送ニ先ツテ鴨綠江邊迄ハ、是非トモ進ンデ日本艦隊ト一度交戦シヤウト希望シタケレドモ、平壤ノ方カラ危急ノ報ガ頻々トシテ來ルモノデ、一刻モ猶豫スルコトガ出来ナイヤウニナツテ、終ニ意ヲ決シテ運送船ノ護送ニ着手シタ、其中ニ大沽カラ陸兵ヲ積ム爲メ回航シテ來タ五隻ノ運送船ハ、最モ迅速ニ四千ノ陸兵ヲ搭載シ了ツタモノデ、定遠、鎮遠、經遠、來遠、致遠、靖遠、濟遠、平遠、廣甲、廣丙、超勇、揚威ノ十二隻及小砲艦鎮中、鎮南、水雷艇福龍號、左隊一號、右隊二號、右隊三號ハ十六日午前一時大連灣ヲ拔錨シ、五隻ノ運送船モ一時間後レテ之ニ隨行シ、艦隊ハ運送船ノ南方ニ位置シテ鴨綠江附近ニ向ヒ拔錨シ、同日午後ニ江外ニ到着シ、大東溝及ヒ大洋河口ノ兩所ヨリ揚陸ヲ行フ爲ニ、運送船ハ成ルベク灣ノ内側ニ砲艦、水雷艇ト共ニ進ミ、平遠、廣丙ノ二隻ハ大洋河口入口ノ淺灘ノ正南附近ニ、他ノ十艦ハ入口ヲ距ルコト殆ド十海里ノ沖ニ一列ニ投錨シ、運送船ハ夜通シ揚陸ニ從事シタ、

翌十七日、艦隊ハ平常ノ日課ノ通り午前九時十五分ヨリ戰闘操練ヲ施行シ、一時間程ニシテ之ヲ了ツタガ、間モナク旗艦定遠ノ檣頭ニアル番兵ハ、南西ニ方ル水平線上ニ數條

清國艦隊ノ戰
準備

ノ煙烟ヲ認メテ之ヲ報ジタモノダカラ、丁汝昌ハ或ハ敵艦デハナイカト疑ツテ急ニ諸艦ニ向ツテ拔錨ヲ命ジ、尋デ「戰闘」ノ令ヲ下シタ、已ニシテ五海里程航進シタトキ明カニ十餘隻ヨリ成ル日本艦隊ヲ認メタ、當時清國各艦ハ充分戰闘準備ヲ整ヘ既ニ威海衛港ニアツタトキ、甲板上ノ備品デ必要ナルモノ、外ハ概子除去ツテ、端舟ノ如キモ一隻ノ「ギク」ヲ留メタノミデ、他ノモノハ盡ク揚陸シ又海圖室モ撤シ、速射砲ハ沙囊ヲ以テ保護シ其他一切ノ準備整頓シテ少シモ遺憾ノナイ有様デアツタカラ、各艦ノ將士ハ皆必勝ヲ歸シテ愈々敵艦ニ接近シタ、ソレデ拔錨後丁汝昌ハ全體ニ信號シテ、陣形ハ小隊縱陣ニシテ、各艦ノ距離ハ四百碼トシ、定遠、鎮遠ヲ第一小隊トシ、致遠、靖遠ヲ第二小隊トシ、經遠、來遠ヲ第三小隊トシ、濟遠、廣甲ヲ第四小隊トシ、超勇、揚威ヲ第五小隊トシタ、又平遠、廣丙及ヒ水雷艇ニハ艦隊ニ歸入スベシト命ジタ、併シ二艦ハ直チニ來ナカツタガ、尋デ前進シテ單縱陣ニ變ジ、更ニ最モ展開セル後翼單梯陣ト爲シテ定遠、鎮遠ヲ其中央ニ置キ、經遠、靖遠、超勇、揚威ヲ右翼ニシ、來遠、致遠、廣甲、濟遠ヲ左翼ニ順次配列シタ、即チ最モ有力ナル二大軍艦ヲ中央ニ置キ、最微弱ナル軍艦ヲ兩翼ノ端ニ配置シ、艦首ヲ敵ニ向ケテ攻撃ヲ試ミヤウト思ツタノデアアル、而シテ七海里ノ速力ヲ以テ漸進シタガ、日本艦隊ハ二隊ニ分レテ單縱陣ヲ作ツテ側面ヲ以テ戦ハウトシ、

其先鋒隊ノ吉野以下ノ四艦ハ六海里ニ迫ツタガ清國艦隊ニ殆ド倍スルダケノ速力ヲ以テ左カラ右ニ斜ニ前面ヲ通過シヤウトシタ、丁汝昌ハ之ヲ見テ右舷ニ點ノ方向變換ヲ行ツテ、敵ノ目的トスル右翼ヲ攻撃ノ焦點カラ避ケサセヤウト努メタガ、此運動ハ巧ニ行ハレテ、其結了ノ後午後零時三十分ノ頃ニナツテ、兩軍ノ距離ハ殆ド五千二百米突ト認メラレタモノダカラ、旗艦定遠ハ先ヅ敵ノ先鋒吉野ニ向ツテ發砲シ、各艦モ之ニ尋デ一齊ニ打出シタケレドモ日本艦隊ハ之ニ應ジナイデ、尙前航路ヲ進ミ五分間程經テ始メテ應砲ヲ放チ、清國艦隊ノ右翼ヲ旋リナガラ其端ニアル二三艦ニ砲火ヲ注ギ、清國艦隊ハ漸漸敵ニ連レテ右方ニ變シタケレドモ、速力ノ遲緩ナル超勇、揚威ノ二艦ハ、其位置ヲ占ムル暇ガナクシテ猛烈ナル射撃ヲ被リ、二艦共ニ火災ニ罹ツテ間モナク全ク戰鬥力ヲ失フニ至ツタ、

超勇及揚威ノ戰鬥力喪失ノ

既ニシテ日本ノ本隊モ亦游擊隊ノ通路ヲ追ツテ進ミ、清艦ハ更ニ之ト交戦ヲシタガ、丁汝昌ハ主トシテ艦首砲ヲ以テ敵ニ當ツテ、機會ガアツタラ撞頭ヲ利用シテ敵艦ヲ沈没サセヤウト思ツタカラ、成ルベク各艦ヲシテ最初ノ陣形ノ儘敵ニ連レテ漸次其方向ヲ轉シ、出來得ル限り敵ニ接近シヤウトシタ、之ガ爲メ兩軍ノ距離ガ漸ク接近シ、日本ノ比叡ハ殆ド定遠ノ面前ニ來テ、其左側ニ居ツタ來遠カラ猛撃サレタモノダカラ、比叡艦長ハ速

清國艦隊ノ運動一致ヲ缺ク

清國艦隊運動ノ三則

力ノ遲イ老艦ヲ以テ尙進路ヲ維持スルヲ危險ト認メ、斷然列外ニ出デ單艦デ定遠ト來遠トノ中間ニ突入シタ、ソレガ爲メ定遠、鎮遠ハ必ズ之ヲ擊沈シヤウト期シタ所ガ、終ニ其目的ヲ達スルコトガ出來ナイデ、比叡ハ敵陣ヲ切抜ケタ故、反テ此時カラ清國艦隊ハ錯亂シ始メタ、是ヨリ先キ右翼ノ揚威ハ火災ノ爲メ到底免ル、コトガ出來ナイモノト覺悟シ、終ニ大鹿島ノ南ニ方ツテ居ル淺灘ニ乘揚ゲ、又超勇ハ猛烈ナル射撃ヲ受ケテ進退ノ自由ヲ失ヒ、且ツ大火災ニ罹ツテ凡ソ一時間ヲ經テ沈没シ、左翼ノ濟遠ハ敵ノ射撃ヲ開イタ後間モナク戰場ヲ遁レ、其他ノ諸艦モ一致運動ヲスルコトガ出來ナイヤウニナツタ、

抑清國艦隊ノ最大弱點ハ秘密信號ヲ改正シテ未ダソレニ熟練スル暇ガ無ツタ點ニアツタ、ソレノミナラズ諸艦ノ速力及吃水積ノ相異ガ甚シイ爲メ、運動ニ臨ンデ精確ニ陣形ヲ變シ細密ニ位置ヲ取ルノハ至難ノコトデアルカラ、丁汝昌ハ豫テヨリ戰鬥ニ際シテハ成ル可ク信號ヲ用非ナイデ、各艦ヲシテ左ノ三則ヲ守ラセ、サウシテ敵ニ當ラセヤウト決心シタノデアアル、

第一 型式同一ノ諸艦ハ協同動作シテ互ニ相援助スルコトヲ努ムベシ

第二 終始敵ニ艦首ヲ向ケ位置スルヲ以テ基本戰術ト爲スベシ

第三 諸艦ハ及ブ限り旗艦ノ運動ニ從フベシ

此ノ如キ約則ヲ守ツテ居ツタカラ、戰鬪開始ノ後ハ旗艦定遠ハ復タ一信號ヲ行ハズ、殊ニ最初開戦ノ時ニ敵彈ガ一個來ツテ旗艦定遠ニ命中シテ舵機室ヲ破壊シ、舵手二名ヲ殺シ、信號旗モ大抵燒失シタモノダカラ、愈信號ヲスルコトガ出來ナクナツタ、ソコデ各艦ハ前ニ述ベタ三則ヲ守ツテ敵ニ當ツタ所ガ、日本ノ游撃隊本隊共ニ清國艦隊ノ右翼ヲ旋ツタカラ清艦隊モ之ニ連レテ間斷ナク方向ヲ變換シタケレドモ、敵ハ回轉運動ヲ繼續シタモノダカラ、其結果清艦隊ハ旗艦ノ運動ニ從フベシト云フ第三則ヲ守ルコトガ出來ナイヤウニナツテ、陣列ガ大ニ亂レタ、其上日本艦隊ハ最初敵ノ前ヲ通過シタ後ハ、巧ニ其正面ニ立ツコトヲ避ケタモノデ、清國艦隊左翼ノ諸艦ハ、右翼ノ諸艦ヲ中間ニ置イテ敵ト相對スル姿トナツタ爲ニ、一時ハ發砲ヲ中止スルヤウニナツタノデ、左翼ニ居ツタ來遠、致遠、廣甲ハ孤立シテ遙ニ離レテ居ル日本軍艦赤城ヲ追撃シタガ、日本ノ游撃隊ハ左十六點ニ方向ヲ轉ジテ引返ヘシ、本隊ハ尙旋回運動ヲ持續シタモノダカラ、兩隊ハ互ニ方向ヲ反對ニシテ清國艦隊ハ夾撃サレヤウトシタ、此時廣甲ハ既ニ戰場ヲ遁レ、大洋河口ニアツタ平遠、廣丙ハ未ダ來會シナカツタカラ、清國艦隊ハ最早六隻トナツテシマツタ、殊ニ來遠ハ艦尾ニ火災ガ起ツテ舷側砲ノ如キハ猛火ノ内ニ包マレテ用非ルコ

夾撃サレタル
清國艦隊

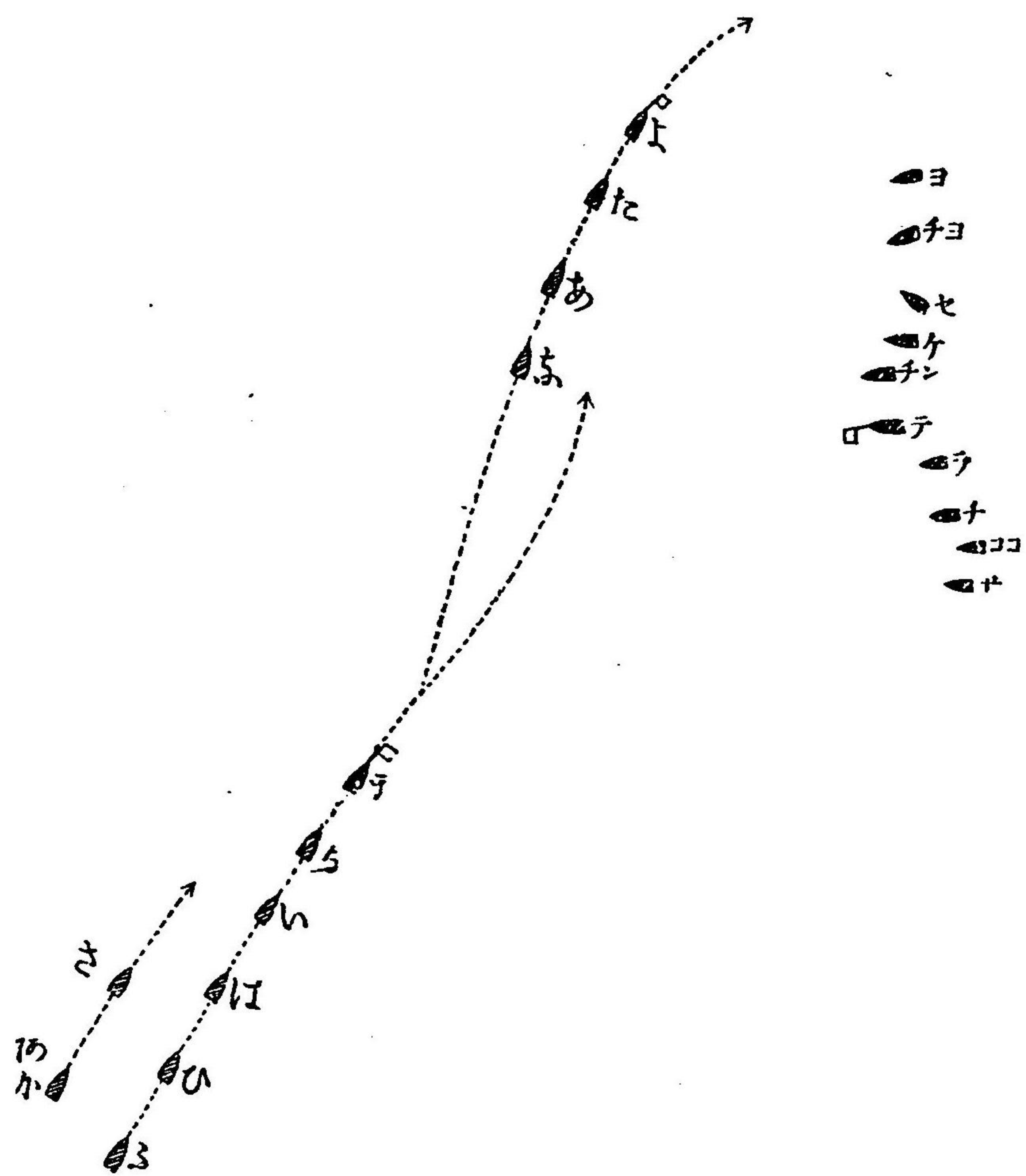
トガ出來ズ僅ニ艦首砲ヲ操作シナガラ兵員ノ多ハ後甲板ニ走セテ死力ヲ盡シ消防ニ盡力シタ、所デ機關室員ハ頭上ニ猛火ノ燃立テ居ル爲メ已ムヲ得ズ通風管ヲ密閉シテ二百度ノ高温ニ包マレルヲモ厭ハズ、職務ヲ盡シテ居タガ部員ノ多クハ盲目トナリ、燒爛シテ傷ヲ受ケナイ者ハ一人モナイヤウニナリ、辛ウシテ遁走ヲ企ツルコト、ナツタ、其他定遠、鎮遠等モ亦傷ヲ被ツテ、到底勝算ガナイト云フコトヲ覺ツタカラ、致遠管帶鄧世昌ハ斷然陣列ヲ離レテ日本ノ游撃隊ニ向ツテ突進シタガ、水線下ニ巨彈數發ヲ受ケテ強ク一方ニ傾キ初メタケレドモ、尙奮進シテ少クモ敵ノ一艦ニ衝突ヲ試ミテ、共ニ沈没シヤウト決心シタラシク、一敵艦ヲ望ンデ馳向ツタガ、巨彈ヲ注ギ掛ケラレテ艦體ハ益々傾キ未ダ目的ヲ達シナイ中途ニ艦首カラ沈ミ、艦體ハ直立シテ螺旋半空ニ回轉シナガラ海中ニ沈没シテシマツタ、

スルト此前ニ大洋河口ニアツタ平遠、廣丙ノ二隻ハ開戦ヲ見テ本艦隊ニ合シヤウト思ツテ、水雷艇ト共ニ進行シタガ、偶日本ノ西京丸ガ孤立ノ位置ニアルノヲ見テ、之ヲ砲撃シヤウト思ヒ、二艦先ヅ一千碼以内ノ距離ニ進ンデ西京丸ト一戦シテ分レ、水雷艇二隻ハ更ニ西京丸ニ向ツタガ、其一隻ノ左隊一號ハ忽チ方向ヲ轉ジテ淺灘ニ乗上ゲタ揚威ノ通跡ヲ追ツテ往キ、之ガ救助ニ盡力シ、他ノ一隻ノ福龍號ハ西京丸ニ接近シ、約四百

米突ノ距離ニ於テ先ヅ水雷ヲ放ツタ、所ガ右方ニ偏シテ敵モ亦之ヲ避ケル運動ヲシタ、ソレカラ尙ホ接近シテ第二ノ發射ヲシタガ、是モ亦舷側近ク十五呎許ノ處ヲ通過シテ目的ヲ達スルコトガ出來ナカッタ、之ガ爲メ愈々迫ツテ右ニ回轉シテ、敵ヲ三十或ハ五十米突ノ處ニ見テ通過シナガラ舷側水雷發射管カラ第三ヲ放ツテ、今度コソハ命中疑ナシト思ツテ艇員ハ小躍リシテ勇ンダ、然ルニ回轉ノ際ニ艇體ガ一方ニ傾イタモノダカラ、水雷ガ過度ニ海中ヲ潜ツタ爲メ、空シク敵ノ艦底ヲ通ツテ効ヲ奏サズ、西京丸ハ無難ニ過去ツタカラ、福龍モ遂ニ亦揚威ノ方面ニ航進シ、其途中ニ於テ沈沒艦超勇ノ生存者ノ端舟ニ乗ツテ遁走スルモノ六人ヲ救ツタ、既ニシテ清國ノ艦隊ハ、日本ノ游擊隊ト本隊トノ兩側カラ夾擊サレテ、來遠、經遠、廣甲ハ戰場ヲ遁レ、平遠、廣丙等モ散亂シタカラ跡ニ留ツテ戰フモノハ定遠、鎮遠バカリトナリ、日軍モ兩分シテ游擊隊ハ遁走スル清國艦ヲ追擊シ、結局經遠ハ大打撃ヲ被ムツテ、火災二三箇所ニ起リ、間モナク滿艦悉ク火焰ニ包マレテ艦體ハ傾斜シ、乗員ハ或ハ綱索ヲ舷側ニ垂レテ水際ニ身ヲ吊ス者モアリ、又ハ「リツギン」ヲ攀チテ檣上ニ登ルモアリテ狼狽ヲ極メ、機關ハ依然回轉シテ居タガ、按針手が其位置ニ居ラナイ爲ニ、針路ガ一定セズ、數面舵ニ旋轉シツ、次第ニ左舷ニ傾キ、暗車ハ空ヲ蹴ツテ轉覆シ赤色ノ艦底ヲ水面ニ露ハシテ沈沒シタ、又定遠、鎮遠ハ

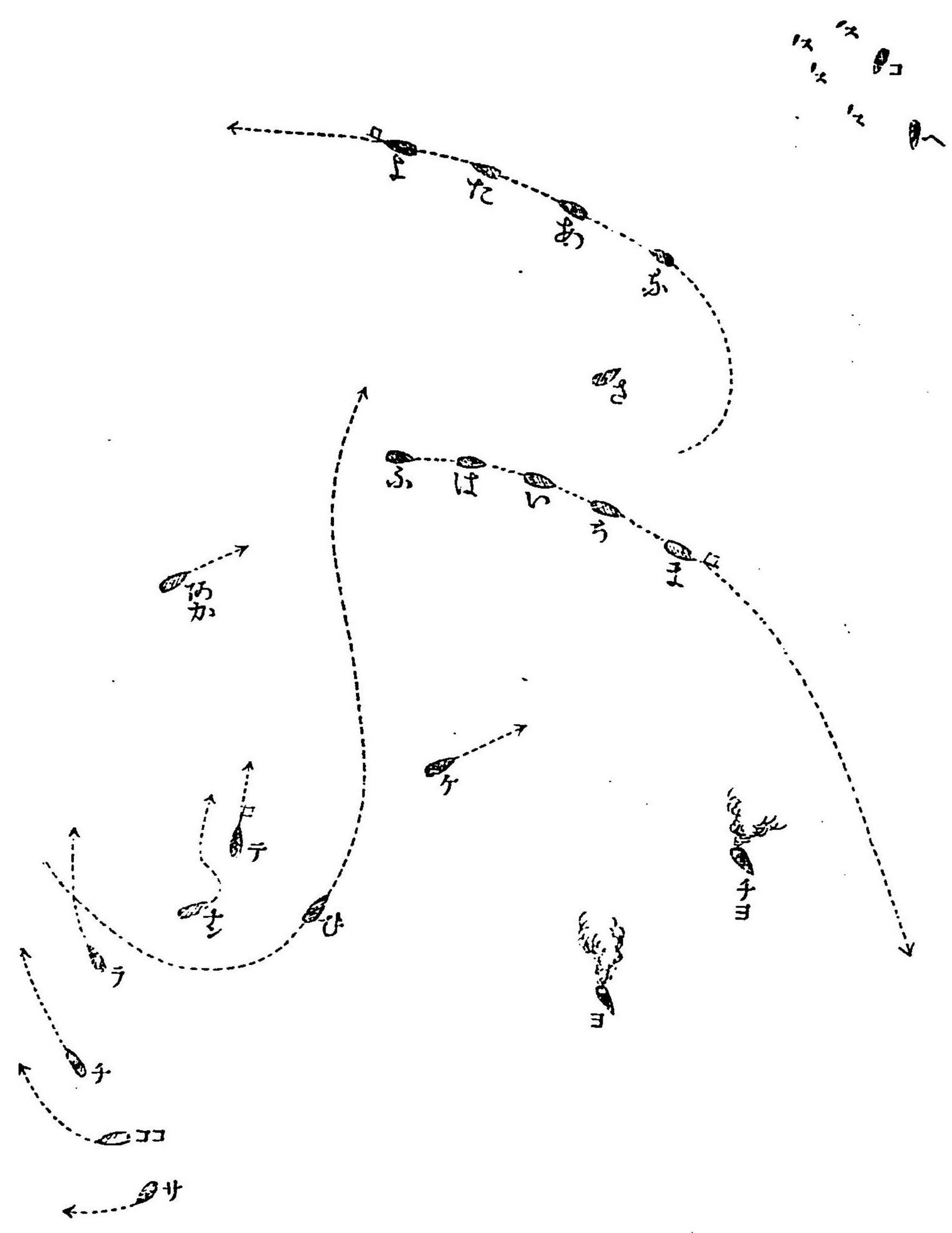
第一圖

！
！
！
！
！
！



沈没
火災
例

第三圖



第二圖

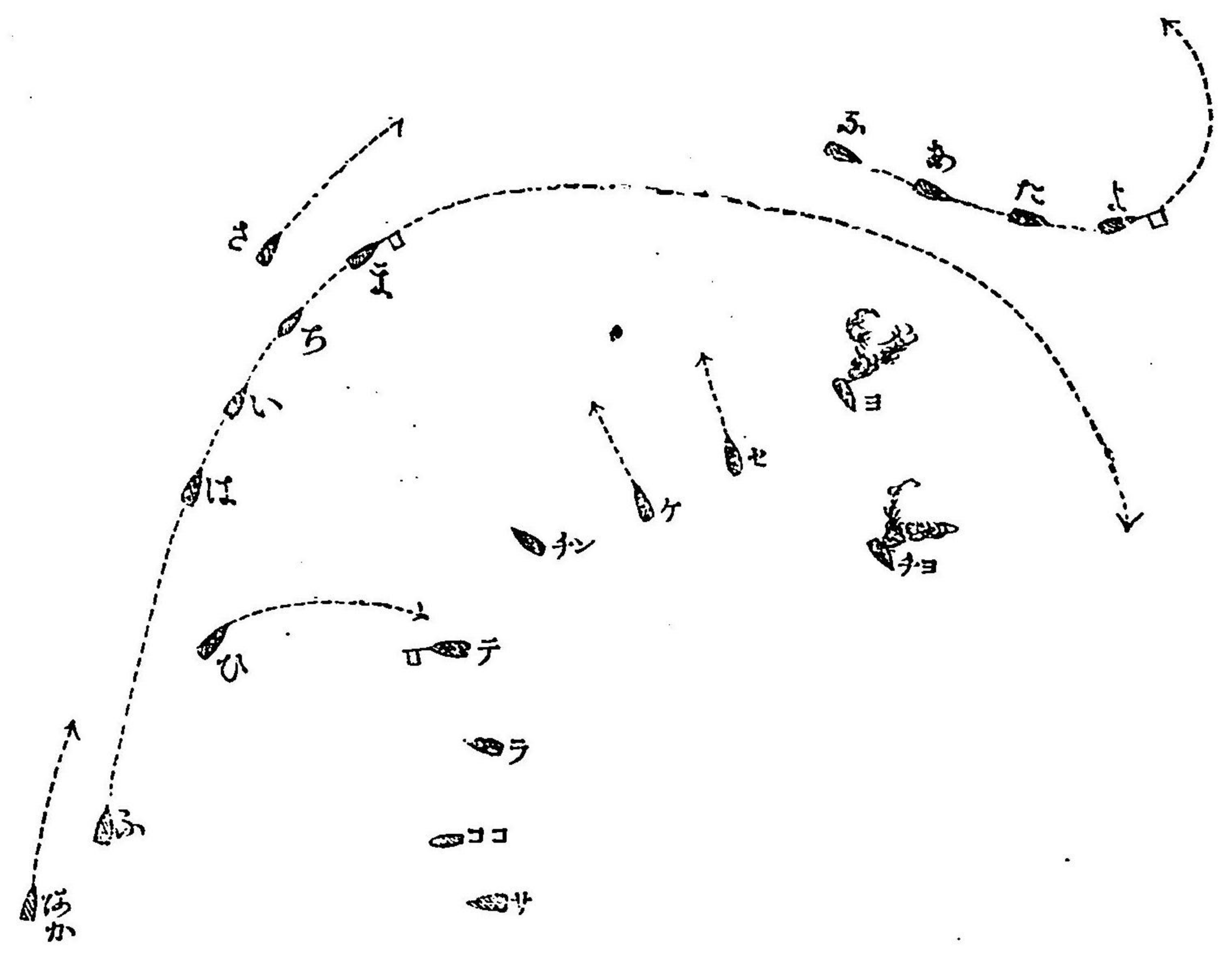


圖 七 第

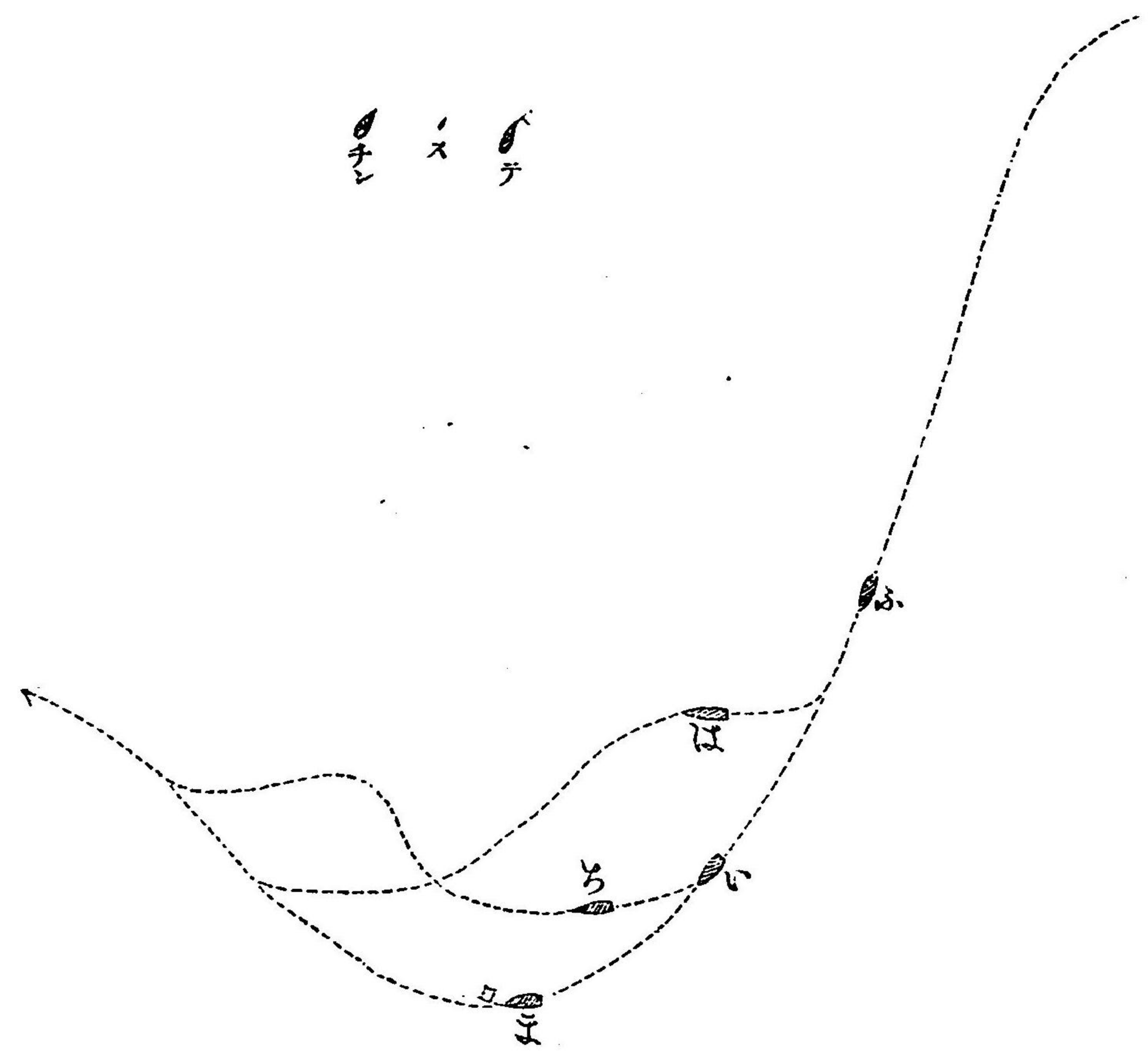
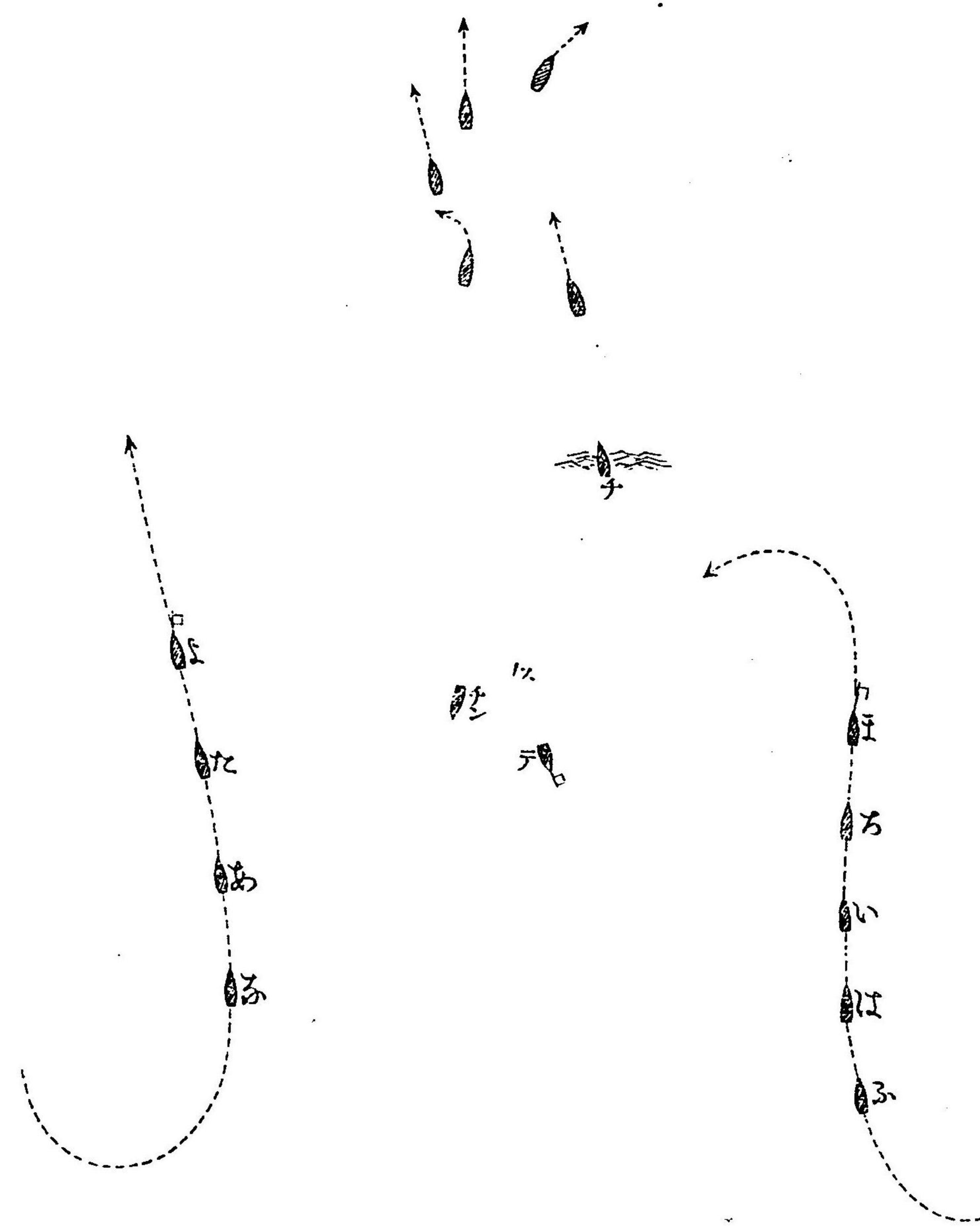
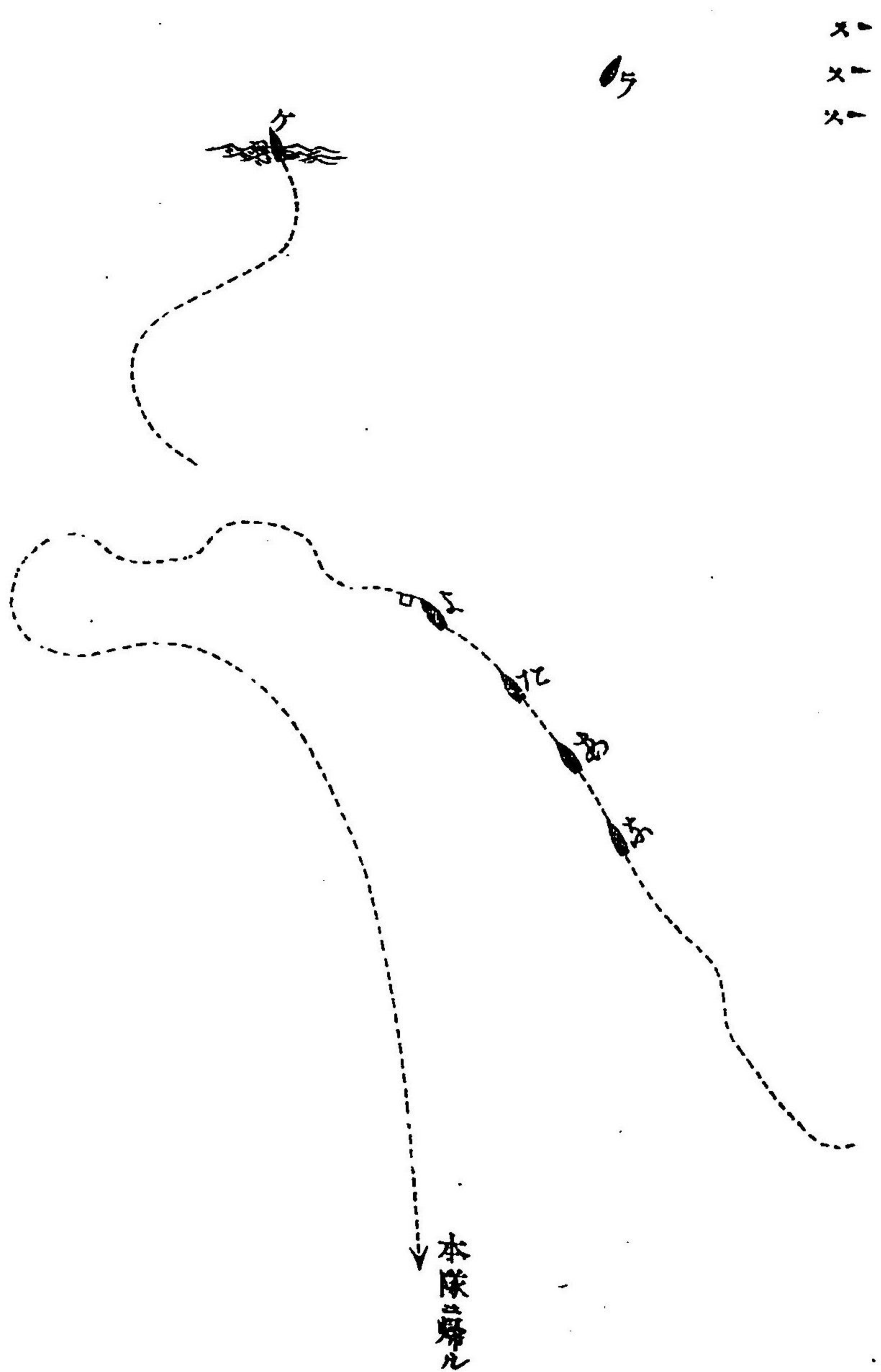


圖 六 第



第八圖



定遠及鎮遠ノ
苦戦

日本ノ本隊五隻ト劇戦ヲ開イタガ、此二艦ノ位置ガ相接近シタモノダカラ、相共ニ敵艦隊ノ運動ニ從ツテ動作シ、最モ縮少シタ回轉ヲシタガ、戦ノ終局ニ及ビテ兩艦ノ苦戦ハ甚シク定遠ノ受ケタ弾數ハ凡ソ二百發以上デ、鎮遠モ之ト同様ノ彈數ヲ受ケテ、木製隔壁、器具、非甲部舷側、艦橋、端船等凡甲鐵ノナイ部分ハ悉ク破壊サレ、又是ヨリ先キ丁汝昌ハ火藥ニ面部ヲ燒カレ、司令塔臺板ヨリ墜落シテ左ノ脚ニ負傷シ、定遠ノ大櫓ニモ敵彈命中シテ櫓樓ノ上ニアツタ速射砲員七名ハ折斷サレタ高櫓ト共ニ海中ニ落ち、三十珊半砲一門ハ水壓器樞軸ヲ打破シ、殊ニ火災ガ屢起ツテ愈々困難ヲ極メ、ソレガ爲ニ大ニ砲ノ操法ヲ妨ゲラレ、且ツ消防ノ爲ニ下層ノ甲板ハ四呎ノ水量ヲ以テ浸スヤウニナツタ、又敵トノ距離ハ種々ニ變化シテ二千米突カラ一千米突ニ近ヅイタコトモアツタガ、三時半頃偶々鎮遠ハ千七百米突ノ距離ヲ測ツテ、松島ニ向ツテ三十珊半ノ大砲カラ九十听ノ炸藥ヲ填充シタ五口径大ノ鋼鐵榴彈二發ヲ放ツタガ、正ニ敵艦ノ中腹ニ命中シテ白煙ガ高ク騰リ艦體ヲ隠シテシマツタカラ、鎮遠ノ砲手ハ拍手シテ見物シテ居タ、而シテ戦ハ尙五時四十五分頃マデ繼續サレタガ、定遠、鎮遠二艦共彈丸不足ヲ告ゲルヤウニナツタ、抑モ兩艦ノ三十珊半通常榴彈ハ各砲五十二發宛ヲ備ヘル規定デアツタガ、實際此時備ヘテ居タノハ十五發ニ過ギナイデ、其他ハ皆堅鐵若クハ鋼鐵榴彈デアツテ大抵

甲裝ノナイ日本軍艦ニ向テハ効力が薄弱デアルト認メラレタガ、已ムヲ得ズシテ之ヲ發射シ尙ホソレデモ缺乏ヲ告ゲテ、戦闘終局ノ時ニハ鎮遠ハ三十珊半鋼鐵榴彈僅ニ二十五發ヲ餘シタノミデ、定遠モ亦之ト同様ノ有様デアツタ、然ルニ時既ニ日没ニ近ヅイテ、日本ノ兩隊ハ合シテ戦闘ヲ中止シタカラ定遠、鎮遠モ針路ヲ旅順口方面ニ轉ジテ、靖遠、來遠、平遠、廣丙、及砲艦、水雷艇等ト合シテ之ニ向ヒ、十八日朝入港シタ所ガ濟遠ハ既ニ歸着シテ居タ、又廣甲ハ逃走ノ際十八日ノ夜半大連灣外ノ暗礁ニ乗揚ゲテ後敵艦ニ襲ハル、コトヲ虞ツテ破壊シテシマツタ、

即チ清國艦隊ハ經遠、致遠、揚威、超勇、廣甲ノ五艦合計一萬一千一百四十六噸ヲ失ヒ、且ツ定遠、鎮遠ハ舵機砲機錨機ナドニ大破損ヲ受ケ、來遠ハ上下甲板ヲ燒盡シ梁鐵ハ曲リ平遠、靖遠、廣丙モ諸所ニ傷ヲ受ケ、修覆シナイデ直チニ巡航スルコトノ出來ルモノハ一隻モ無イヤウニナツタノミナラズ、尙一層ノ困難ヲ與ヘタノハ戦闘機關ノ要素タル所ノ兵員ノ大減殺デアツタ、抑モ海軍ノ兵員ハ多年ノ修練ヲ積ンデ始メテ役ニ立ツモノデ決シテ一朝一夕ニ得ラル、モノデナイ、然ルニ清國艦隊ハ此一戰デ致遠ノ乗組人員ハ悉ク沈没シ、經遠ハ二十餘人、超勇ハ三十餘人、揚威ハ五人ダケ命ヲ助カツタノミデ各艦長ハ一人モ生キ遺ツタ者ハナカツタ、此四艦ダケデモ六百餘人ノ戰死者デ、其他ノ總テヲ合シタナラバ

恐ラク千人以上ニ上リ負傷者モ亦數百人アツタ、之ガ爲ニ海上權ノ活動ニ影響ヲ及ボシタコトハ實ニ非常ナモノデアル、所ガ之ニ反シテ我軍ノ狀況ヲ見ルト、ソレ迄ハ海軍省雇入ノ漁船スラモ皆兵器ヲ搭載シテ航行スルニモ拘ハラズ若シ敵艦ニ出會シハセヌカト思ヒ、戰々兢々トシテ居ツタノガ、此黃海ノ海戰後ハ全ク兵器ヲ載セズ單獨ニ渤海ノ海上ヲ横行スルヤウニナツタ、斯ノ如ク海上ニ於テ爲サウト思フコトハ自由ニ行ヘルコトニナレバ、ソレガ爲ニ幾多ノ好結果ヲ生ズルノハ自然ノ勢ヒデアル、今之ヲ順次ニ詳述シマス、先ヅ其第一ハ我第二軍ノ敵地上陸デアル、豊島ノ海戰及威海衛砲擊ニ因テ我艦隊ハ仁川以南ノ海上ヲ制スルコトガ略出來タトハ云フモノ、未ダ敵地ニ向ツテ上陸ヲ企ツル程ニハ至ラナカツタ、然ルニ黃海ノ一戰デ我軍ガ充分ニ勝ヲ制シタモノダカラ、全然渤海灣ノ海上權ヲ把握スルニ至リ、隨テ我作戰計畫ハ決戰ノ地歩ヲ進メル爲メ、先ヅ金州半島ヲ占領スルニ決シテ第二軍ヲ出發サセルコト、ナツタカラ、艦隊ハ其上陸地ヲ定ムル爲ニ、一二隻ノ軍艦ヲ金州半島近傍ノ沿岸ニ遣シテ視察ヲサセ、而シテ其準備ガ整ヒ大同江口ヲ陸軍運送船ノ集合地點ト定メタ、之ヲ長直路ヲ以テ集合地トシタ時ニ比スレバ、北ニ進ムコト實ニ三百餘海里デアツテ加之運送船ハ皆單獨デ航海スルコトニナツタ、ソコデ陸軍運送船ノ悉皆集合スルノヲ待ツテ三隊ニ別チ、最初ノ一隊コソ艦隊ノ護送ヲ受ケタガ、他ノ二隊

ハ全ク護送ナク、百二十餘海里ヲ航行シテ花園口ニ至ツタ、清國政府ハ我運送船ガ集合シタコト、及清國沿岸ニ向ツテ上陸ヲ企テツ、アルヲ悟ツテ、力ヲ盡シ之ヲ防碍シヤウトシタノハ殆ンド疑ヒナイコトデ、李鴻章ハ十月四日旅順道龔照璣及丁提督ニ向ツテ「聞クニ倭ノ運送船二十隻、陸兵ヲ滿載シ將ニ命ヲ待ツテ發セントス、是其路ヲ分テ内犯スルノ確徵ナリ、不日盛京直隸ノ地必ズ一場ノ大戰アラン、定遠、鎮遠、靖遠、濟遠、平遠、廣丙ノ六艘モ速ニ修理ヲ了リ、早ク海洋ニ出デ遊弋シ、彼ヲシテ、我艦尙能ク運轉シ得ルヲ知ラシムベシ、苟モ如此ナレバ敵ノ運兵船或ハ敢テ傲然横行セズ、決シテ我ヨリ彼ト戰ヲ交ユルヲ要セズ、彼モ亦其後ヲ截タンコトヲ虞リ必ズ強テ爭ハザルベシ云々」ト云フ命令ヲ與ヘ、十月九日ニナツテ更ニ又兩氏ニ向ヒ「倭軍大連灣ニ上陸シ、海陸ヨリ旅順ヲ夾撃スルノ計略アリト某々兩國艦ヨリノ電報相符合ス、此際一層防備ヲ嚴ニシ、決シテ懈怠有ルベカラズ(中略)水師六船ハ何レノ日ニ巡洋ノ豫定ナルヤ宜ク先ヅ旅順大連ノ間ヲ往來シ、敵ノ運船大隊ヲ牽制スベシ云々」トノ令ヲ下シタガ、之レモ當時ニ於テノ清軍ノ作戰計畫トシテハ至當ノ策デアリマス、縱令黃海ニ破レテモ其殘艦ノ幾部分ガ存在シテ居ツテ海面ニ出沒スル限りハ、我軍ノ上陸ハ決シテ安全ト云フコトハ出來ヌ、一例ヲ舉グレバ、陸兵上陸ノ掩護中即チ十月二十五日、敵艦隊ガ威海衛ヲ出港シタトノ報知ガアツタトキニ、我

全隊ガ動搖シタコトモアル、然ルニ敵艦隊ハ黃海々戰後意氣愈沮喪シ、沿岸ニ出沒シテ我ヲ牽制スルノ勇氣が無カツタモノダカラ我軍ノ上陸ハ無難ニ成シ遂ゲ得ラレタノデア

ル、
第二ハ金州半島ノ略取デアアル、清國ノ艦隊ハ黃海ニ破レテ海上權ヲ失ツタカラ、勢ヒ沿岸ノ防備ヲ嚴ニセザルベカラザル場合トナリ、加之我艦隊ハ渤海ノ海上ヲ横行スル爲ニ、旅順、大連、牛莊、威海衛、芝罘等ノ各港ハ人心恟々トシテ恐レヲ抱キ、其守將等ハ風聲鶴唳ニ驚クト云フ有様デ、交モ危急ヲ訴ヘルカラ、政府ノ狼狽甚シク、急ニ新兵ヲ募リ兵員ヲ移動シテ我軍ノ上陸ヲ防ガウトシタ、然シ幾百海里ニ渉ル海岸線ニ充分防禦ヲ施スコトハ到底人力ノ爲シ得ラル、所デナイ、之レニ反シテ我軍ハ海上ヨリ攻勢ヲ取ツテ居ルノデア

花園口ノ上陸
ト金州半島ノ
占領

アルカラ、縱横左右隨意ニ運動シ、全力ヲ以テ敵ノ分力ニ臨ムコトガ出來ル、且ツ若シ彼等ノ防禦ガ薄弱デアアル地點ヲ發見スレバ、直チニ其處ヨリ上陸スルコトモ企テ得ル、是レ即チ花園口ヲ上陸點ニ選定シタ所以デアアル、此時ニ當ツテ彼レハ豫メ我軍ガ金州半島ニ上陸ヲ企テタノヲ察シナガラ、此一地方スラモ充分防禦スルコトガ出來ズ、遂ニ我軍ヲシテ易々上陸ノ目的ヲ達セシメタノハ、海上權ヲ失ツタ自然ノ勢ヒデアアル、既ニ一旦上陸スレバ我軍ハ海陸雙方カラ相應シテ進撃シ得ルケレドモ、彼ハ僅カニ迂遠ノ陸路ノミニ於テ之

ヲ防ガナケレバナラヌカラ、其運動ハ敏活ヲ缺キ、殊ニ困難ヲ感シタノハ輻重デアアル、即チ復州城守將カラ金州海防營ニ宛テタ書面中ニモ「李中堂ヨリ、復州ノ旗倉米二千二百石ヲ鳳凰城ニ運致スベキノ命アリシモ、復州地方ハ車輛ニ乏シク全數徵發スルモ目的ノ十分一二過ギズ、已ムヲ得ズ其旨上申シ、有ル程ノ車輛ヲ以テ數回ニ運送セシメタリ、然ルニ近頃盛字營金州復州ニ分駐スル爲メ、大車三十輛ノ用意ヲ命ゼラレ、尙ホ復々大同鎮ノ歩騎兵用トシテ大車二百五十輛ノ準備ヲ命ゼラレタリ、斯ノ如ク陸續下命アリト雖ドモ、到底其數ヲ充タス能ハズ云々」ト論シテ居ル、ソレカラ、又金州ノ守將連順ハ盛京將軍裕祿ニ向ツテ「日軍金州ニ侵入セントス、相距ル僅ニ十里程軍未ダ着セズ、形勢危急ナリ」ト云フコトヲ訴ヘテ居リ、其他大連灣ノ守將等ヨリモ、援兵ヲ請求シタガ、到底之ニ應ズルコトガ出來ナカツタモノデ、李鴻章ハ是等ニ向ツテ「有ル所ノ各營ヲ以テ防備ヲ嚴ニスベシ、旅順モ亦同様ニ危急ナリ、貴官等如何ニ來援ヲ乞フトモ、其兵安ゾ動クヲ得シ、楚軍モ已ニ山海關ノ守備ニ充テタリ、亦赴援シ難シ云々」トノ令ヲ下シタノヲ見テモ察セラレル、其當時彼ノ陸兵ハ決シテ少數トハ云ヘナイ、大略盛京省内デハ奉天府及近傍ニ三千六百二十餘人、遼陽州ニ五千人、營口及近傍ニ二千七百七十餘人、錦州府及近傍ニ四百七十餘人、昌圖府近傍ニ五百三十餘人、興京ニ三百十餘人、通化縣ニ三百五十餘人、海龍城及近傍ニ

七百十餘人、旅順口ニ八千四百九十餘人、大連灣及近傍ニ六千九百四十人、直隸省内デハ北京及近傍ニ二萬八千餘人、山海關及近傍ニ三千十餘人、遵化州及近傍ニ二千二百六十餘人、古北口及近傍ニ二千二百十餘人、宣化府及近傍ニ千三百餘人、蘆臺及近傍ニ二千四百二十餘人、北塘及近傍ニ四千三百七十餘人、大沽及近傍ニ一萬五千三十餘人、天津府及近傍ニ四千五百三十餘人、馬廠及近傍ニ千七百五十餘人、岐口及近傍ニ千十餘人、保定府及近傍ニ二千六百餘人、正定府及近傍ニ九百四十餘人、大名府及近傍ニ三千餘人、山東省内デハ威海衛及近傍ニ四千九百五十餘人、芝罘及近傍ニ二千五百二十餘人、登州府及近傍ニ八百餘人、武定府近傍ニ五百十餘人、濟南府及近傍ニ三千九十餘人、兗州府及近傍ニ千七百六十餘人、曹州府及近傍ニ二千四百二十餘人、沂州府近傍ニ百二十餘人、膠州灣及近傍ニ三千二百九十餘人デ以上三省ノミデモ總計十一萬四千六百餘人ト云フ大兵ガ配置サレテ居ツタヤウデアアル、然シナガラ海上權ヲ失ツタ爲メニ、是等ノ大軍ハ恰モ木偶ノ如クデ、遂ニ我軍ノ上陸ヲ防グコトガ出來ナカツタ、何故ナレバ彼等ハ各己レガ警備シテ居ル海面カラ牽制ヲ受ケ、砲擊サレル恐レガアツテ、之ニ對シテ防禦シナケレバナラヌカラ、互ニ相應援シテ、一團ノ勢力タラシムル事ガ出來ズ、個々ノ分力トナリ、一大活動ヲスルコトハ出來ベカラザル事デアアル、然ルニ之ニ反シテ我方ハ全力ヲ以テ一所ニ當ルコト、ナツタカ

ラ、其勢破竹ノ如ク、我陸軍ハ十一月四日上陸點ヲ發シテ、同六日ニ金州城ニ着シ、一戰ノ後之ヲ占領シ、七日ニ大連灣ヲ取り、十七日同地ヲ出發シテ二十日カラ旅順口ニ向ツテ攻撃ヲ始メ、二十二日ニ至テ確實ニ占領スルコト、ナツタ、旅順、大連ハ清國政府ノ最モ重キヲ置イタ所デ、曾テ幾億兩ノ巨資ヲ投ジテ砲臺ヲ築キ、無比ノ天險ニ極力ノ人巧ヲ加ヘタ堅壘デ、且ツ大連灣ニハ六千餘人、旅順口ニハ八千餘人（攻撃ノ時ニハ一萬餘人ニ増加セリ）ノ守兵アリタルニ、僅カ一戰デ占領サレタノハ、我軍ハ敵砲臺ノ最モ勢力アル海上カラ戦ハズシテ、海上權ヲ利用シ、先ヅ防備ナキ花園口ニ上陸シテ、砲臺ノ弱點タル背後カラ攻撃ヲ加ヘ、敵砲臺ヲシテ其強力ヲ用フルコト能ハザラシメタカラデ、全ク海上權ノ結果ト云ハ子バナラヌ、

第三ハ第一軍トノ連絡デアアル、始メ第一軍ハ朝鮮中部カラ漸次北進シテ平壤ニ向ツタガ、其當時我海上權ハ未ダ確實デナカッタカラ、海路ノ便ニヨツテ糧食及軍需品ノ供給ヲ受クルコトが出来ズ、唯險惡ナル陸路ノ運搬ニノミ依頼シテ居ツタ爲ニ、軍ノ活動ガ阻滯シテ毎ニ進軍ノ機ヲ失フノ慮リガアツタ、然ルニ黃海々戰後ニ至ツテ、海路自在ニナリ、往來モ自由ニナツテ大同江ノ水路ヲ利用シ、仁川カラ直チニ平壤ニ向ツテ海運ノ便ヲ開イタカラ、是マデノ陸路ニ比ベテ大ニ運送ノ困難ヲ減ジタノハ勿論デアアルガ、江ノ上流ハ水淺クテ充

分デナイノミナラズ、陸軍ハ更ニ北進スルコトニナツタモノデ、海軍ハ速ニ鴨綠江附近ヲ測量シテ、大ニ海運ノ便ヲ開キ陸軍ヲシテ復タ糧食ニ憂ヲ懷カシメザル計畫ヲ爲シ、數隻ノ艦艇ヲ遣ハシテ測量ヲ爲サシメツ、アツタ、此時ニ當ツテ陸軍ノ運輸ハ非常ノ困難ヲ感ジ、軍司令官ハ聯合艦隊司令長官ニ向ヒ、「陸軍糧食ノ運搬ハ陸路ヨリスル時ハ極メテ困難ニシテ軍ノ行動ヲ妨グルコト少カラズ、故ニ海路運搬ノ方法爰ニ立タザレバ行軍ノ計畫甚ダ窮ス、水路探尋ノコト最モ希望ス云々」ト云フ意味ノ照會ヲ寄セタ程デアアル、ソコデ艦隊ハ益々水路ノ探檢ニ從事シタガ、如何セン大鹿島附近ノ海岸一帶ハ何レノ處モ遠淺デ到底船ヲ寄セルノ地ナク、只鴨綠江口ヨリ少シク南東ノ方ニ於テ僅カニ海岸ニ近ツタコトノ出來ル水路ヲ發見シ、百難ヲ排シテ測量シ、遂ニ或一地點ヲ以テ陸軍糧食運搬ノ水路トシタ、陸上デハ平壤以北一帶ノ地方ハ清兵ノ爲ニ軍需品ヲ徵發シ盡サレテ其資料ノ根源ガ殆ド涸レテ、殊ニ平壤ノ敗兵ガ逃走スル際ニ亂暴狼藉ヲ極メテ人家ヲ燒キ品物ヲ奪ヒ、甚シキハ住民ヲ殺戮シタモノダカラ、居民ハ皆恐レテ遠方ニ遁レ、我軍ガ北進スル時ニハ殆ド無人ノ郷ト云フ有様デアツテ、得ルニ物ナク、備フニ人ナク運搬ノ不便ハ豫想外デ、是非トモ海路ノ便ヲ得ルコトヲ希望シ、萬一其目的ヲ達スルコトが出来ナイ時ハ、已ムナク軍隊ヲ使用シ、全力ヲ盡シテ運送力ヲ増シ以テ前進スルコトニ決定シタラシク思ハレル、所

ガ初メハ海運ヲ得ル見込ナシトノ報ニ接シタモノデ、軍ノ進行ヲ中止シテ專ラ力ヲ運搬ニノミ用井テ居ツタノガ、前ニ述ベタ如ク或地點ニ水路ヲ發見シタ爲ニ、軍隊ノ戰鬥力ハ回復シ、一面ニハ凍飢ノ慮ヲ減ズルヤウニナツタノデアル、尋デ艦隊ハ更ニ陸軍ニ便宜ヲ與ヘル爲メ、更ニ北進シテ他ノ地點ニ水路ヲ開イタガ、恰モ此時陸軍ハ尙ホ北進シテ同處ヲ占領シテ見ルト、此地方モ亦清兵ガ退却スル時ニ亂暴ヲ働キ、人家ハ大半燒盡サレ、住民ハ皆逃ゲタ後ダカラ糧食ヲ得ルノニ困ツテ、軍艦ニ急使ヲ派出シヤウトシタケレドモ其便ヲ得ラレズ、非常ニ苦心シテ居ル際ニ、海軍ヨリ水路糧食運搬ノ便ガアルトノ報知ヲ得テ始メテ安堵ノ思ヒヲナシタト云フ事デアル、艦隊ハ之レニ満足セズ、其後又第二小地點ヨリ南徽西ニ當ル第三ノ地點ニ水路ヲ開イテ愈、第一軍ノ戰、闘力ヲ完全ナラシメ、同時ニ其將校ヲ軍艦ニ乗セテ、花園口或ハ大連、旅順ニ送り、以テ第二軍トノ連絡ヲ取ラセ、第一、第二兩軍ノ活動ヲ充分ナラシメタノハ、皆海上權ノ賜デアル、

第四ハ内國防備ニ及ボセル影響デアル、開戦ノ始メヨリ日清兩國共ニ敵ノ内國沿岸ニ來襲スルコトヲ慮ツテ、清國ガ各要所ニ嚴重ナ防禦ヲ施スト同時ニ、我國モ亦各要所ノ防禦ヲ嚴ニシ、敷設水雷ヲ沈メ、沿岸ニ望樓ヲ設ケ、臨時砲臺ヲ築キ、港口ニ防材ヲ敷キ、艦船ヲ以テ港灣ヲ守リ、水雷艇ヲ以テ近海ヲ偵察サセ、陸兵ヲ守備隊ニ置クト云フヤウニ、種々ノ

黃海々戰後ニ於ケル我内地ノ防備

計畫ヲ施シテ居ツタ、畢竟之ハ敵艦隊ノ來襲ヲ恐レタカラデ、若シ敵ニ艦隊ガナイカ又ハ有ルニシテモ來攻スル程ノ勢力ガナカツタナラバ、多數ノ人力ト多クノ費用ヲ投ジテ、内國防備ヲ施ス必要ハナイノデアル、所ガ黃海々戰ノ結果ニ因リ我レニ於テ海上權ヲ握ルト、我が海岸ニ敵ノ來襲ヲ受クベキ懸念ガ大ニ減シタノデ、此海戰ノ結果ガ明瞭トナレル十月以後、次第ニ防禦ヲ撤回スルヤウニナツタ、(其殘ツタ一箇所モ事業ガ後レタ爲メニ兎ニ角練習ノ爲メ十一月迄從事シテ防備ヲ完全シ十二月カラ撤去ニ取掛ツタノデアル)殊ニ各軍港守備ノ人員モ防禦ノ必要ガ減ズルト同時ニ、專ラ攻撃ノミニ力ヲ盡シ得ルヤウニナツタ、

黃海々戰ノ清國政府ニ及ボセル影響

第五ハ清國政府ニ及ボセル影響デアル、黃海々戰前ヨリ清國人民ハ一般ニ其業ニ安ゼザル形勢デアツタカラ、清國政府ハ非常ニ内亂ノ蜂起スルコトヲ苦慮シタ、即チ當時其處ニ居タ某大尉ノ報告ニ「當時清國官憲ハ、出來得ルダケノ手段ニ依リ、清軍ノ敗報ヲ内國ニ傳播セシメザランコトヲ務ムルコト切ニ、或ハ人民ノ戰爭ヲ談ズルヲ禁ジ、或ハ特ニ僞電ヲ發シテ清國大勝ノ虛聞ヲ傳へ、或ハ詔諭ニ或ハ告示ニ依リテ清軍ノ優勢ヲ傳ヘザルハナシ(中略)今後清兵ノ一大敗潰ヲ生ズルカ、或ハ時日遷延シテ本年末ニ至レバ、第一ニ哥老會匪ノ蜂起ハ到底免レザルベシ云々」ト言ツテアル、斯ノ如ク清國政府ハ是非トモ一度ハ勝ツ

テ人民ヲ安ンゼシメヤウト企テタガ、ソレニ反シテ黃海ノ一戰ニ海軍ノ原動力タル艦隊ノ首力ヲ破ラレ、全ク海上權ヲ失ツテ日本軍ハ今ハ何處ノ海岸へ上陸スルカ測ラレヌヤウニナツタノデ、人心愈々動搖シ、北京デハ各國ノ公使ガ皆自國軍艦ニ護衛兵ヲ請求シ、政府ハ戒嚴令ヲ布キ、清兵ハ府内ヲ巡邏シ、又天津デハ富豪ノ者ガ集ツテ協議ヲ凝シ、各部落四十八箇所ニ各保甲兵即チ護郷兵一千人ヲ置クコトニ決シ、尋デ各公使館ハ書類ヲ荷造リシ、何時デモ急ニ天津ニ引上グル準備ヲ爲シ、又清兵中ニハ其將校ニ對シテ謀反スル者アル等、其困難ハ一日増シニ甚クナツテ、政府中有力者ノ一致ヲ缺キ、李鴻章ノ所置ヲ非難スル者ガ漸ク殖エテ、或ハ海軍提督ノ無能ヲ論ジ、或ハ悲憤慷慨ノ書ヲ上リ、終ニ翰林院侍讀學士五十四人ハ、十月四日ニ李鴻章ヲ彈劾スル上疏ヲシタ、其文ハ大略下ノ如クデアル(前略)豐島ノ戰、牙山ノ戰、平壤ノ戰、鹿島ノ戰ヲ觀ルニ、我軍端坐拱手シテ日軍ノ圍攻ヲ待テリ、其實決シテ之ヲ以テ和ヲ望ム能ハズシテ、事機一タビ失シ、徒ニ國威ヲ損ジテ敵勢ヲ張リタリ、日本ハ事々先發、故ニ能ク我軍ノ死命ヲ制ス、我ハ事々後發、故ニ終始日本ニ制セラレ、遷延座ナガラ事ヲ誤リ全局瓦解ス云々」尋デ陸兵ノ敗績ハ、兵器糧餉ノ缺乏ニアリトシテ、「兵行クコト千里轉運ヲ先要トス、内地モ尙ホ兵站ノ設アリ、況ヤ師ヲ疆外ニ出スニ於テヲヤ、而ルニ牙山平壤ノ軍、前後與ニ兵器糧餉ヲ缺キ、役夫備ラ

ズ車馬資ル可キナク、兵自ラ糧ヲ負ヒ、銃ニ餘彈ナク、以テ饑軍食ヲ掠メ怨ヲ韓民ニ結ビ、兵士死綏徒手相搏ツ、二十年來朝廷注意スル所海内仰望スル所ノ大軍ヲシテ、徒ラニ無糧無機ヲ以テ手ヲ束子テ死ニ就カシムト慷慨シ、尙論歩ヲ進メテ「此回我軍敗衄ノ原因ヲ總ブルニ、海軍ノ功ヲ奏セザルニ在リ、敵兵ハ九萬ト稱シ大舉入寇シ、朝鮮ヨリ進ンデ盛京又進デ大沽天津、尙進ンデ己マズバ、北京ノ重地必ズ窮伺スル所トナラン、(中略)其時ニ至リ某大員(李鴻章)ノ肉ヲ食フト雖モ事ニ於テ何ノ裨補カ之アラン、(中略)是レ同聲痛憤シテ陛下ノ前ニ泣陳セザルヲ得ザル所以ナリ云々」ト結論シテアル、之ヲ讀ンデ見テモ如何ニ清國政府部内ガ動搖シタカ、察セラレル、殊ニ北部一帶ノ通商航路全ク遮斷サレタル爲メ、北京其他北部ノ諸都府ハ經濟界ニ大疲弊ヲ生ジ、就中貯藏ノ僅少ナル食物供給ノ途ガ無クナリ、遂ニ一般ノ人民マデ非常ノ苦境ニ陥ツテ、彼ヲシテ和ヲ乞フノ念ヲ促サシメタ、

第六ハ中立國ニ及ボセル影響デアル、黃海々戰前ニハ中立諸國殊ニ歐洲列強國ハ、概シテ一種ノ冷眼ヲ以テ兩帝國ノ交戰ヲ兒戲ニ類スルモノト看做スカ、又ハ多少ノ非難ヲ我國ニ抱イテ居ルヤウナ感ガアツタカラ、從テ諸外國軍艦モ、時ニハ傍若無人ノ振舞ヲ爲シ、恣ニ戰地ノ海上ヲ往來シ、我艦隊ニ尾行シテ夜間電燈ヲ輝カシタリ、或ハ根據地ニ出入シ

テ、我軍機ヲ敵ニ知ラシムルヤノ慮ヲ抱カシメタコトモアツテ、種々我戦鬪ノ進連ヲ妨ゲル結果ヲ生ジタガ、黄海ニ於テ我軍ガ奇功ヲ奏シタモノデアルカラ、ソレヨリ後ハ今マデ輕蔑シテ居ツタ念ガ一轉シテ、多少嫉妬心ヲ以テ我ヲ迎ヘルヤノ傾キヲ生ジタガ、兎ニ角我軍ニ對シテ敬意ヲ表シ、如何ニ帝國國民ガ歐洲的文明ヲ採用シ、之ヲ活動スルノ能力ガ有ルカト云フコトヲ確證スルト同時ニ、清國ハ到底日本帝國ニ敵スルコトガ出來ヌト悟ツタモノデ、我ニ對シテ其輕侮心ヲ一掃シテ、公然海軍ノ動作ヲ妨ゲルヤウノコトハ無クナツタ、乃チ其當時諸強國デ意見ヲ發表シタ所ノ名士ガ數十人アリマシタガ、概子我ニ向ツテ尊敬ノ意ヲ表スベキ輿論ヲ喚起シ、又ハ自己ノ國民ニ警戒ヲ與ヘヤウトシテ居ル、今其中ノ二三ヲ摘録シテ、黄海々戰ガ彼等外國人ニ及ボシタ影響ノ一端ヲ示シマス、

先ヅ英國ヨリ述ベマスルト、同國東洋艦隊司令長官海軍中將フリーマントルノ評ハ左ノ如クデアリマス、

黄海々戰ト英
國ノ論評

(前略)此役(黄海々戰)ニ於テ戰勝ハ全ク日本軍ノ掌中ニ歸セシモノト云ハザルベカラズ、於是九月十七日以後、日本艦隊ト對戰抗爭シ得ベキ、清國唯一ノ北洋艦隊ハ蕩然一空トナレリ、縱令形體ニ於テハ尙現存艦隊ト稱シ得ベキモ、然レドモ如此重傷ヲ蒙ムリ、且艦隊痛ク減ゼラレシ上ハ、實力ニ於テ些ノ價值ヲ有スベカラズ(中略)予ハ今回ノ

戰ヨリ幾何ノ得ル所アリヤトノ質問ニ對シ、之ニ明答ヲ與ヘント欲シ本論ヲ草セシモ、其歩ヲ進ムルニ隨ヒ益古言ノ欺カザルヲ感ゼリ、即チ勇氣熟練及ビ忠愛ノ心ニ富メル國民ハ、此等ノ美德ヲ備ヘザル國民ニ對シ常ニ大勝ヲ博スベキコトヲ云々、

次ニ英國海軍中將コロムノ評ハ左ノ如クデアリマス、

(前略)而シテ恰モナイルノ大戦勝ガ、地中海ノ制海權ヲシテ英國ノ手ニ回復セシメタルガ如ク、黄海ノ海戰ハ即チ黄海ノ制海權及ビ直隸海岸ヲシテ、之ガ爲ニ日本ノ手ニ確然占領セシメタリ、亦ナイル海戰ノ結果トシテ、エークル港ハ英國艦隊ノ爲ニ占領セラレ、モールタ島ハ交換セラレ、埃及ハ英國ノ爲ニ侵略セラレタリ、黄海々戰ノ結果トシテ、旅順口及ビ威海衛ハ、清國艦隊ト共ニ終ニ日本ノ陷領スル所トナレリ云々、

次ニ英國陸軍中佐イー、ジー、バロートノ評ハ左ノ如クデアアル、

(前略)日本ハ優ニ無慮十萬ノ大兵ヲ戰地ニ動員スルヲ得ベキモノト看做シテ不可ナカルベク、其他本國ノ警備ニハ豫備兵ヲ徵集充用スベキコト論ナシ、斯ル大兵ハ吾人ノ決シテ輕視スベカラザル所ニシテ、遠カラズ東亞ノ天地ヲ攪擾スベキ政治的大問題ノ裁決ニ就テハ、必ズヤ大ニ與リテ力アルモノナラン、然レドモ斯カル兵力ヲ發差馳驅セシムルハ、一ニ制海權ノ如何ニ存ス、是レ今回ノ戰役ニ於テ適切ニ證明シタル眞理ニシテ、當

初日本戰略ノ極メテ慎重ナリシ所以ハ、未ダ全然制海權ヲ握ラザリシニ外ナラズ、此際若シ一たび海戰ノ不利ヲ來タサバ、或ハ危急存亡ノ窮境ニ陥リタルヤモ知ルベカラザルナリ、然ルニ鴨綠江外一戰ノ後、日本ノ海上權ハ益確實ト爲リ、從ツテ爾後ノ戰略ハ益大膽ヲ覺エタリ、夫ノ旅順ノ陷落ノ如キ即チ之ガ結果ニシテ、爲メニ日本ハ赫々ノ名譽ヲ得タルモ、一步ヲ進メテ推究スレバ、旅順陷落ノ後ニサヘ、夫ノ北洋艦隊ノ殘餘ガ威海衛ニ最後ノ運命ヲ留メシ迄ハ、一舉以テ北京或ハ奉天ヲ衝クノ計畫ナカリシナラン、北洋艦隊殲滅セラル、ヤ、支那ノ位置ハ全ク絶望ニ淪ミ、其帝京ヲ救ヒ社稷ヲ維持スルハ、和議ヲ外ニシテ亦詮術ナキニ至リタルナレ云々、

次ニ英國々會議員サー、エー、パートレットノ評ハ左ノ如クデアル、

(前略)日本人ハ黃海ノ戰ニ於テ甲鐵艦一隻ヲモ有セザルニ、清國ノ優勢ナル艦隊、殊ニ二隻ノ精銳ナル甲鐵艦ヲ備フル艦隊ヲ撃チ破リ、東洋ニ於テ爭フベカラザル海上權ヲ得タリ、實ニ今日東洋派遣ノ歐洲艦隊ハ、英國ヲ除クノ外ハ、日本艦隊ト戰ヒテ勝ヲ制スルノ見込ナシ、(中略)日本人ノ勝利ハ本邦(英國)幾ド各新聞ノ豫期スル所ニ反對セリ、或新聞ハ日本人或ハ初メニハ少シク勝利ヲ得ルトスルモ、清國ノ資力及兵力ハ日本ニ優ルガ故ニ、終ニハ勝利ハ支那ノ方ニ歸スベシト論ズルモノアリタリ、(中略)我ト日本ト

ノ兩國ハ、共ニ島國ニシテ共ニ海上ノ卓能ヲ有シ、又起業上及貿易上ニ於テハ共ニ熱心ナリ、又共ニ海上權ノ利益ヲ感シ、且ツ其功名心ヲ懷ケリ、其相異ル所ハ、英人ハ此權ヲ行ヒ其味ヲ知ルコト爰ニ年アルモ、日本人ハ着手日尙淺キノ一點ノミ、又共ニ幾ド相類スル憲法ヲ設ケ、帝室アリ、貴族院アリ、衆議院アリ、又共ニ有力ナル新聞紙及公平ナル審院アリ、其他英國ト日本ト相類似スル所ノ廉々ハ、尙多ク存スルモ枚舉ニ違アラズ、今爰ニ余ガ意見トシテハ、日本ハ國性ヨリ云フモ、位地ヨリ云フモ、憲法ヨリ云フモ、東亞ニ於ケル我同盟トスベキモノナリト言ヘバ足レリトス、然ルニ我政府及我新聞ハ、日本ガ此戰爭ヲ起セシコトニ就キ大ニ見ル所ヲ誤リ、讒諂的ノ僻評ヲ下セシハ實ニ慨嘆スベキ事ナリ、(中略)日本人ガ開戰已來、其掌ニ取り九月十七日ニ至テ確カニ把握シ得タル海上權ハ、日本人ニ利スル所幾許大ナルヲ知ルベカラズ、日清勝敗ノ分ル、所實ニ此海上權ノ有無ニ歸スベキナリ、日本人ニシテ若シ海上ニ此權ナカツセバ、朝鮮半島ニ駐在セル其軍隊ニ援兵ヲ遣ルコト能ハズ、懸軍孤立ノ勢ヲナシ、清軍トハ衆寡相敵セザルガ爲メ敗岨センコト必セリ、又日本人ニシテ若シ海上權ナカツセバ、大山大將ノ軍隊ハ如何ニ精銳ナルモ、焉ゾ能ク旅順口占領ノ大勳業ヲ遂グルヲ得ンヤ、又山縣大將ノ軍隊ガ京城平壤間ノ難路ヲ行キ、又ソレヨリ鴨綠江ニ達スルノ險隘ヲ經テ進軍シツ、

アリシトキ、供給善ク辨シ援兵立ドコロニ來リシハ果シテ何者ノ功ゾヤ、海軍其助ケヲ爲セバナリ、(中略)畢竟日本人ガ當ニ平和ノ技術ニ長ズルノミナラズ、鐵血ノ野(戰術ヲ云フ)ニ於テモ妙ヲ得ル所以ノモノ豈他アラシヤ、一ニハ其國人赤心國ヲ思ヒ、鞏固ナル國家的一致心ヲ懷クコト、一ニハ此愛國心及國家的思想ヲ誘導應用スル勇膽義心ノ士族アルコト、ニ歸スベキナリ、是レ余ガ前提ニ於テ此國家的一致心ト世襲ノ武士トヲ以テ日本ノ國粹ト爲シ、大ニ日本帝國ノ心髓トナシ、其美德ヲ稱揚スル所以ナリ、論者以テ如何トナス、

先ヅ英國ノ輿論ハ斯ノ如ク傾イテ來タ、抑モ開戦ノ當初英國ハ多少我ニ非難ヲ加ヘタ國ノ一デアツタノニ、黃海々戰後ハ熱心ナル同情者ノ一國ト變ジタノハ、實ニ爭フベカラザル事實デアル、

黃海々戰ト佛國ノ評論

次ニ佛國ニ就テ申シマスト、佛國海軍大尉エミール、ウエイルノ評論ハ左ノ如クデアル、(前略)轉ジテ日本人ヲ視レバ、其決心ヤ驚ク可シ、彼ハ實ニ正確ノ觀察ヲ以テ此戰ニ攻勢ヲ探レリ、敵軍ノ左右各翼ニ、前後斷々トシテ其ノ全力ヲ集中シタル司令長官ノ舉ハ、寔ニ非難スル所ナキ運動ナリト謂ツ可シ、其乘員ハ鍛鍊ノ素養アリ、善ク命令ニ從ヒテ動作シ、報國ノ熱情ハ渾身ニ淋漓タリ、彼等ハ始終戰利ヲ欲シ之ヲ獲ル所以ニ於テ

須臾モ怠ラズ、衆心合シテ一心トナリ、萬人集リテ一人トナレリ、彼ノ戰捷ヲ獲テ凱歌ヲ舉グルニ至リシ所以ノモノハ、全ク其貴重スベキ勢力ト、其支持シタル勤勞トノ賜ナリト謂フ可シ、

彼等ハ西法ニ浴シテ其思想ヲ涵養シ、聰慧ト膽勇トヲ以テ之ヲ實地ニ運用セリ、嗚呼此國ノ三十年前ノ實狀ヲ回想シ看ヨ、當時其軍ハ我封建時代ニ於ケルト一般ノ觀アリキ、而シテ今ヤ彼ノ如シ豈驚嘆スベキニ非ズヤ云々、

次ニ有名ナル「ルプチー、ジウルナル」ト云フ新聞ノ記者ガ評論シタ所ハ左ノ如クデアル、(前略)日本ガ練達ニ加フルニ、規律整然タル艦隊ヲ有セザリシトセバ、軍ヲ朝鮮國ニ派遣シ、糧餉ノ補給ニ必要缺クベカラザル援軍ヲ輸送スルコト能ハザリシナラン、若シ夫レ鴨綠洋ノ海戰ニシテ、日軍ノ失敗ニ歸セバ、其陸軍ノ運命モ亦未ダ知ルベカラザリシナラン、

由是觀之海上ノ主權ヲ握ル國民ハ、全局面ノ勝算ヲ著シカラシムルモノニシテ、海軍ノ効績ハ今日ノ戰鬪ニ於テ實ニ至大ナリト云フベシ、而シテ將來ニ在テモ尙ホ然ラン、

此外ニモ有力ナル者ノ評論ガ澤山アリマスガ、大同小異デアルカラ、以上ノモノヲ以テ佛國輿論ノ在ル處ヲ察スルニ充分デアル

次ニ獨逸ニ就テ申シマス、獨逸海軍通覽記者ノ評シタ所ハ左ノ如クデアリマス、
 (前略)今回日本ガ充分ノ効果ヲ奏シタルハ海上權ヲ適用シタルニ在リ、此故ニ日本ノ陸軍ガ、海軍ト直接聯絡ヲ通ズル間ハ、海上權ヨリ生ズル幾多ノ利益ハ簇出シ來リ、復之ヲ失フコトナシ、則チ之ヲ詳言セバ、其効力ニ依テ貨物ノ運輸ヲ安寧ニシ、又兵員ノ運送ヲ急速且ツ容易ナラシムルノ利益ヲ見ルヤ知ル可キナリ、實ニ第一征ヨリ旅順ノ役ニ至ル迄、交戦上ノ急速ト安寧トハ、惟ダ一ニ斯海上權ノ勢力ニ據レリ、(中略)海事問題ニ就テ日本國民ノ理解力ハ、我獨逸ニ於ケルヨリハ寧ロ一段上位ニ在ルガ如シ、
 次ニ同國海軍中將ウエル子ルノ評ハ左ノ如クデアアル、
 (前略)斯ノ如ク日本ハ此役(黃海)ニ於テ戰勝ヲ得、己ニ朝鮮海及渤海上ノ霸權ヲ掌握シ、尙ホ豫備艦隊トシテ多クハ新式ニ係ハル軍艦二十隻ヲ有スルモ、清國艦隊ハ悉ク多少ノ損傷ヲ蒙リ、戰鬥力ヲ復スルニ數月ヲ費サ、ルベカラザルヲ以テ、南洋及其他ノ艦隊ノ來援ハ日軍ニ於テ毫モ顧慮ヲ要セズ、何トナレバ彼等ハ日本ノ此優勢ニ對スル實力ヲ有セザレバナリ、吾人ガ授受セル最近報ニ曰ク、連戰連捷ノ日軍ノ正當ナル作戰ト人民ノ非常ナル敵愾心及清國ニ於ケル大恐慌トニ由リテ之ヲ察スルニ、此戰亂ハ兎ニ角二三箇月ノ間ニ其局ヲ結ブニ至ルベシト、

以上ヲ以テ獨逸輿論ノ在ル所ヲ察スルニ足りマス、

次ニ露國ニ就テ申シマス、海軍大佐ウヰトゲフトノ評言ハ左ノ如クデアアル、
 (前略)彼等(日本人)ハ鴨綠江ノ一戰ニ據リテ海軍戰略ノ主要問題ヲ解決セリ、即チ一朝清國ノ艦隊ヲ破リ、其敗餘ノ殘艦ヲシテ大修繕ヲ行フガ爲メ旅順口ニ隱匿セシメ、以テ自ラ海上ノ主權ヲ握リ、海軍ノ根據地ト陸兵運送ノ航路ヲ安全ニセリ、海上ノ主權己ニ其掌中ニ歸ス、第二軍ノ運送容易ナリシモ亦怪ムニ足ラズ、斯ノ如クニシテ戰勝ノ日本軍ハ奉天及旅順ニ向ヒ進行ヲ繼續セリ、因ニ云フ旅順ノ地タル日本軍一タビ之ヲ占領セシカ、其海軍ノタメニハ敵地ニ於テ良好ナル錨地ヲ得、其位置ヲシテ益々鞏固ナラシムルモノナリ、

次ニ露國新聞ノ多數ガ評シテ居ル所ハ左ノ如クデアアル、
 國境ノ一ニ於テ清國ノ如キ緩漫後退ノ國ト相隣リスルトキハ常ニ無事ナルベシト雖モ、日本清國ニ代リテ我ト接界スルニ至ラバ頗ル寒心スベキナリ、
 次ニ米國ニ就テ申シマス、同國海軍大佐マハンノ評ハ左ノ如クデアアル、
 一艦又ハ艦隊ニ於ケル船體及武器ノ操縱ニ關シ、日英兩國ヲ比較セバ、英國々民ト雖モ大海戰ニ於テ日本ニ必ズ勝チ得ルトハ速斷スルコト能ハズ、

又海軍大臣ハーバートノ評ハ左ノ如クデア、
 (前略)今回鴨綠江外ノ海戦ハ、海軍造船家ニ裨益スルノ如何ニ多少ナルニモ拘ラズ、此
 ノ戦ハ實ニ我國ニ向テ一ノ戒愼スベキ良訓ヲ與フル者ナラズヤ、曰ク苟モ日清孰レノ一
 國ガ獨立國ノ體面ヲ輿地圖上ヨリ剝脱セラレザル以上ハ、合衆國民ハ其西岸ニ於テ海軍
 勢力ヲ益々振張スベキ兩邦國ヲ控ユベシ、而シテ該兩國ニ於ケル我國ノ商業的關係ハ、
 而今駭々乎トシテ層一層密接ニ赴クベキナリ、
 之ヲ以テ米國輿論ノ在ル所ヲ知ルニ足リマス、
 以上述べ來ツタ所ノ利益ヲ得タノハ、盡ク黃海々戦ニ因テ起ツタ結果デ、實ニ此一戦ハ大
 局ノ勝敗ヲ決セシメタモノデアリマス、尙更ニ海戦後カラ旅順陥落ニ至ルマデノ、彼我艦
 隊首力ノ所在地ヲ比較シテ見マスルト、海上權伸縮ノ程度ガ分リマスカラ之ヲ表ニシテ左
 ニ掲ゲマス、

黃海々戦後ヨ
 リ旅順陥落ニ
 至ル彼我海上
 權ノ伸縮

月 日	帝國艦隊主力本隊所在地	清國艦隊主力所在地
九月十八日	威海衛附近ヲ偵察シテ再ビ海洋島ノ戰場ニ アリ	海洋島戰場ヨリ旅順ニ歸着
九月十九日	小乳蕪角錨地ニ歸着セリ	右 同
九月二十三日	大洋河口ニ向ヒ出發シ同二十七日迄其附近 ニアリ	右 同

九月二十八日	大同江漁隱洞ニアリ	右 同
十月十八日	右 同	旅順ヲ出發シテ威海衛ニ向フ
十月十九日	右 同	威海衛ニ着ス
十月二十三日	陸軍運送船ヲ護シ花園口ニ向ツテ出發	右 同
十月二十四日	花園口ニ着	右 同
十月二十五日	右 同	威海衛港ヲ出デ山東角ノ方向ニ航シ十一月 十日頃迄行ク所ヲ知ラズ
十月二十七日	エリヲツト島ノ北東側ニアリ	
十一月六日	攻撃ノ爲メ大連灣ニ出發即日港外ニ至ル	
十一月八日	大窪口ニ投錨	
十一月九日	大連灣ニ投錨	
十一月十五日	威海衛ニ向ヒ示威運動ノ爲メ出發	威海衛ニアリ
十一月十八日	威海衛ヨリ大連灣ニ歸着	右 同
十一月二十一日	攻撃ノ爲メ旅順ニ向ヒ出發	右 同
十一月二十二日	旅順口外ニ着ス	右 同
十一月二十四日	大連灣ニ歸ル	右 同

彼我首力ノ移動ハ右ノ表ノ如クデア、而シテ我軍ハ常ニ偵察艦ヲ放ツテ敵狀ヲ視察シ、
 暗ニ封鎖ノ姿勢ヲ取ツタノデア、ルカラ更ニ其偵察ノ度數ヲ左ニ示シマス、

九月二十二日 浪速及秋津洲威海衛、芝罘及大連灣ニ向ツテ出發シ、二十四日大洋河口

十一月十日 吉野及高千穂旅順及威海衛ニ向ヒ出發翌日歸着、
十一月二十日 八重山威海衛ニ向ヒ出發、
十一月二十三日 浪速威海衛ニ向ヒ出發翌日歸着、

第四期 旅順占領ヨリ威海衛陥落ニ至ル

黄海々戰ニ於テ勝ヲ制シタ結果トシテ、金州半島ハ忽チニ我軍ノ占領スル所トナツタモノ
デ、我海軍ハ旅順口ヲ根據地トシ、大連灣ヲ要港ト定メマシタ、即チ大同江口ヨリ更ニ前
進スルコト二百三十海里デアル、ソコデ我海上權力ノ發動點ハ渤海灣口ニ移ツテ、勢力ガ
益々鞏固ニナツタモノダカラ、我計畫ハ機ニ乗ジテ爲シ得ル限り速カニ陸軍兵ヲ渤海北岸
ニ上陸セシムルコトニ決シテ、伊東聯合艦隊司令長官ハ其準備トシテ上陸點ヲ調査サセル
ガ爲ニ、軍艦高千穂及ビ巡洋艦代用西京丸ヲ渤海灣内ニ派遣シタ、此時ニ當ツテ我軍ガ渤
海北岸ニ上陸スルノヲ妨グルモノハ決シテ人力デナク、唯天候ノ如何ニアルノミデ、若シ
天候サヘ好順デアレバ、一舉シテ北京ヲ衝クコトモ容易デアルガ、上陸ニ最モ適當シタ洋
河カラ東岩角ノ西ナル海岸ハ、冬季ハ風波ガ荒ク、殊ニ嚴寒ノ爲メ到底目的ヲ達スルコト
ガ出来ナイモノト認メマシタモノデ、作戰方針ハ一變シマシテ、天候ノ好順ニナルマデノ
間ニ威海衛ヲ占領スルコトニ決定シタ、申スマデモナク威海衛ハ北洋艦隊ガ餘命ヲ保ツテ

居ル處デ、之ガ爲ニ我陸兵ヲ渤海灣頭ニ進メルニ當ツテ、多少後顧ノ患ニナルベキハ必然ノ勢デアル、故ニ先ヅ威海衛ヲ占領シテ此患ヲ除クコトニ決定サレタ、ソコデ我艦隊ハ嚴シク威海衛ノ敵艦ヲ監視シテ、彼等ヲシテ港外ニ出ルコトノ出來ヌヤウニシヤウト勉メタ、即チ旅順口ノ陥落後、十一月二十九日ニハ浪速、三十日ニハ玄海丸、十二月九日ニハ八重山、十八日ニハ千代田、二十一日ニハ浪速、一月一日ニハ吉野等ガ始終威海衛ノ敵情ヲ探リ、是ト同時ニ威海衛ヲ背面ヨリ攻撃スベキ陸軍ノ上陸地點ヲ撰定シ、遂ニ威海衛ヨリ程近キ榮城灣ヲ以テ之ニ充テルコトニナツタ、而シテ陸軍運送船ヲ三回ニ分チマシテ、第一回ノ十九隻ハ二十八年ノ一月十九日ニ、第二回ノ十隻ハ一月二十日ニ、第三回ノ十一隻ハ一月二十二日ニ、各大連灣ヲ出發スルコトニ定メ、其第一回ノ輸送ニハ護衛艦ヲ付ケマシタガ、第二回、第三回ハ運送船許リデ航行スルヤウニナツタ、(ソレハ何故カト云フニ、威海衛ノ港口ヲ我艦隊ガ扼シテ敵艦ヲシテ出港スルコト能ハザラシメタカラデアル)實ニ海上權ノ効力ハ我ヲシテ自由ニ上陸運動ヲ行フコトヲ得ルニ至ラシメタ、始メ司令長官ハ第一回運送船ヲ護送スルノ前一日、第一游撃隊ノ三艦ヲシテ登州附近ニ往ツテ敵ヲ騷擾サセルヤウニ命ジ、(即チ敵ヲシテ我兵ガ該地附近ヨリ上陸シハセヌカト云フ疑惑ヲ生ゼシムル爲メ)別ニ高千穂ヲ威海衛港口ニ遣ハシテ敵艦ヲ監視サセ、又小艦數隻ヲ上陸地點

ニ派シ、豫メ運送船ガ投錨スル時ノ目標トナラシメ、且ツ兵ヲ陸ニ揚ゲテ電線ヲ切斷シ、敵兵ノ有無ヲ偵察セシメタ、

是ヨリ先キ清國政府ハ、我軍ガ威海衛ヲ攻撃スル模様ノアルノヲ悟ツタモノト見エ、山東巡撫李秉衡ヲシテ山東各所ヲ巡視サセテ海防ヲ嚴ニシ、我軍ノ上陸ヲ防ガウト試ミタ、即チ甯海州ノ附近カラ上陸シヤウトスルトキハ、統領李楹ノ福字三營、同曹正榜ノ東字三營ヲ先鋒ト爲シ、全隊ヲ以テ之ヲ迎撃シ、盒字塞ノ襄字營全隊ノ七分マデハ出テ二營ヲ援クルコト、シ、若シ酒館地方カラ上陸シヤウトスルトキハ、統領孫萬林ノ嵩武軍左營等ト、李統領ノ三營ヲ先鋒トシテ、全隊ヲ以テ迎撃シ、曹統領ノ二營ヲ以テ應援ト爲シ、尙ホ一方ニハ芝罘駐防統領孫全彪ハ二營ヲ率テ機ヲ計ツテ應援スルコトニ定メ、又若シ直チニ威海衛ノ背面ヲ侵撃スルトキハ、統領孫萬林ハ其嵩武左營及ビ游撃譚鄰都ハ砲隊ヲ率テ、曹統領李統領ハ各二營ヲ撰拔シ、襄字營ヨリハ半員ヲ撰發シテ、孫統領ハ嵩武二營ヲ率テ、且ツ各營ヲ指揮シテ威海衛ノ背後ニ赴イテ敵ノ背面ヲ衝キ、威海衛ノ各軍ト前後カラ之ヲ挾撃シ、而シテ派遣サレナイ所ノ軍隊ハ、原營ヲ留守スルコト、定メ、若シ又榮城灣成山角等カラ上陸シヤウトスルトキハ、統領閻得勝ノ二營管戴守禮ノ一營ヲ以テ迎撃シ、管帶徐撫辰、同趙循發ノ各一營ヲ其豫備應援隊トスルコトニ計畫シタ、又威海衛ノ防禦ハ

西口大陸ニ五箇所ノ砲臺、東口大陸ニ六箇所ノ砲臺、日島ニ一箇所、劉公島ニ二箇所、黃島ニ一箇所、總砲數約六十三門、敷設水雷罐二百四十八個ヲ敷設シ、東西港口ニハ約ソ三海里間ニ防材ヲ敷キ、又陸兵ハ鞏字軍六營、綏字軍六營、護軍四營合計八千人、軍艦ハ十五隻、水雷艇ハ十三隻デ、共ニ威海衛ヲ死守スル積リデアリマシタ、此ノ如ク嚴重ナル防備ヲ施シタケレドモ、海上權ヲ失ツテハ少シノ効モナク、我軍ハ容易ニ榮城灣カラ上陸シテ、一撃ノ下ニ榮城ヲ占領スルコトガ出來タ、(此際前述ノ如ク六營ノ兵ヲ以テ防グ積リデアツタラウガ、陸上ノ交通頗ル不便ナル爲メ急ノ間ニ合ハナカツタモノト見エ、僅ニ榮城ニ數百人許リノ兵ガ居ツタガ、勿論斯様ナ寡兵ヲ以テ防禦ノ出來ル道理ハナク、容易ニ占領サレタノデアル)ケレドモ威海衛ニハマダ敵ノ殘艦ガ居ルカラ、我海軍ハ先ヅ運送船ヲ取圍ンデ防材ヲ設置シ、艦隊ノ一部ヲ以テ護衛警戒シ、又艦隊ノ主力及水雷艇ハ屢威海衛沖ニ往ツテ港口ヲ封鎖シ、敵艦ヲシテ一步モ港外ニ出ルコトノ出來ヌヤウニシタノデ、彼ハ終ニ封鎖ヲ脱シテ我ヲ襲撃シ又ハ港外ニ遁レルコトヲ爲シ得ナカツタ、當時彼ノ勢力範圍ハ僅ニ威海衛港内ノミデアツテ、一步デモ出レバ忽チ擊沈サレルガ、縱シ免ガレルコトガ出來タニシテモ、渤海灣内ニハ砲臺ノ掩護ヲ有スル安全ナ港灣ガナイ、ソコデ彼ハ飽ク迄モ威海衛港内ヲ勢力ノ下ニ置キ、以テ劉公島ヲ守ラウト決心シ

清國海軍ノ劉公島死守ト其降伏

タ、抑モ劉公島ハ威海衛ノ中央ニ横ツテ居ルカラ、其裏面ノ海上即チ本陸トノ間ノ勢力ヲ失ハナイ限リハ譬ヘ正面ノ海洋カラ砲擊サレテモ、此ノ方面ハ砲臺ノ勢力ガ最モ強イカラ比較的ニ其害ヲ受クルコトガ少ナイ、ソコデ若シ威海衛本地ガ占領サレタ際ニハ、殘艦ヲ以テ日本陸軍ニ對抗シ、港外カラ攻メル我艦隊ニ對シテハ劉公島上ノ砲臺ヲ以テ防戦スルコトニ決シタ、其後幾モナク本地ノ砲臺ハ一撃ノ下ニ我軍ノ占領スル所トナツタニモ拘ラズ、眇乎タル劉公島ガ克ク旬餘日ヲ支フルコトノ出來タノハ、港内ヲ自己ノ勢力範圍ニ置イタカラデアル、然ルニ頑強ナル彼ヲシテ降伏シナケレバナラヌヤウニサセタ原因ハ、港内勢力ノ主腦タル艦隊ノ沈没及水雷艇ノ捕獲ノ爲デ、日本軍攻撃前ニ排水量合計三萬六千噸モアツタ彼ノ艦隊勢力ハ、一月五日ニ水雷艇攻撃ノ爲メ定遠ヲ失ツテ二萬二千二百六十五噸ニ減ジ、同六日ニハ同ジク來遠、成遠及寶箴箴ヲ失ツテ一萬八千六百五十五噸トナリ、八日ニハ凡テノ水雷艇ヲ捕獲或ハ破壊サレテ一萬七千三百五十七噸ニ減ジ、九日ニハ占領砲臺ノ砲彈ノ爲メ靖遠ヲ失フテ一萬五千〇五十七噸ニ減ジタ、當時清國ノ軍中ニアツタ歐人ノ記録中ニ「我水雷艇相率非テ逃亡セシ以來海陸將士ノ兵氣頓ニ沮喪シ人心恟々タリ云々」トアル、之ヲ以テ見テモ彼ノ軍艦定遠其他ガ沈没シタ爲メ水雷艇乘員ハ恐氣ヲ生ジテ逃走シ、其爲メニ自然ノ一致人心ヲ缺イテ、兵士ハ離反シ、丁提督ノ苦心慘憺タル防戦モ亦効

旅順陥落ヨリ
敵軍降伏ニヨリ
ノル迄、我艦隊
動作

ヲ奏スルコトが出来ナイヤツニナツタノデ、港内ノ海上權ガ彼等ノ運命ヲ左右シテ居タコトモ判然スル、又是ヨリ以前若シ敵艦隊ニ出デ、戰フ機會ガアツタナラ、我陸軍ノ榮城灣ニ上陸ハ啻ニ危險デアアルノミナラズ、縦シ上陸スルコトが出来タトシテモ、後方ノ連絡ヲ充分ニ通ズルコトが出来ズ、從テ充分ニ活動シ得ナカツタカモ知レヌ、然ルニ我艦隊ガ嚴密ニ封鎖シタ爲ニ、彼レハ出戰スルノ勇氣ヲ失ヒ、從ツテ我陸兵ヲ安全ニ上陸サセテ且ツ敵艦ノ逃走ヲ防ギ、終ニ北洋艦隊ヲ全滅サセテ偉功ヲ奏シタノデアリマス、是レ一ニ我艦隊ノ運動敏活ナル爲メデアルト言ハナケレバナラヌ、因テ旅順陥落ヨリ威海衛攻撃ニ至ルマデノ艦隊ノ動作、竝ニ上陸ノ初メカラ敵軍ガ降服ニ至ルマデノ我艦隊ノ活動ヲ左表ニ示シマス、

十一月三日 本隊、第一、第二游撃隊大連灣ヨリ旅順口ニ移ル、第三、第四游撃隊ハ大連灣ニ留ル、大孤山ニ艦アリ、

十一月二十四日 第二游撃隊大連灣ニ移ル、第三、第四游撃隊中ノ四隻貔子窩ニ至ル、同日浪速威海衛ヲ偵察ス、

十一月二十七日 本隊、第一、第二游撃隊大連灣ニ移ル、

十一月三十日 立海丸威海衛ヲ偵察ス、

十二月四日 貔子窩派遣ノ軍艦大連灣ニ歸航ス、

十二月十七日 高千穂、西京丸灤河口沖ヲ經テ洋河口ニ至リ夫ヨリ岩角ニ向ツテ陸地ヲ隔ツコト二哩以内ノ所ヲ航進シ、艦影ノ失スル迄山海關ニ僞航路ヲ執リ十一日大連灣ニ歸着ス、

同日千代田芝罘島ノ北々西十海里ノ處ニ至リ夫ヨリ崆洞島ノ北側殆ド二海里ノ處ヲ旋リテ東側ニ出デ芝罘港内ヲ視察シ、轉ジテ威海衛ヲ視察シテ十九日大連灣ニ歸着ス、

十二月十九日 浪速芝罘ヲ偵察シ、轉ジテ威海衛ヲ經テ山東角燈臺沖ニ至リ比叡ト會ス、比叡ハ是ヨリ先キ大連灣ヨリ至リ同處ニテ會合スルヤ、兩艦ハ榮城灣、桑溝灣ヲ視察シテ二十二日大連灣ニ歸着ス、

十二月二十四日 高千穂榮城灣、愛倫灣、桑溝灣ヲ偵察ス、
十二月十九日 艦隊ノ主力陸軍運送船ヲ護シテ榮城灣ニ向フ、

同日吉野、秋津洲、浪速登州府ヲ砲撃シテ榮城灣ニ至ル

同日高千穂威海衛ヲ偵察シ、途中吉野等ニ會シテ共ニ榮城灣ニ至ル、
尙ホ威海衛攻撃ノ際ニ於ケル我海軍ノ偵察運動ヲ列記スレバ左ノ如クデアル、

艦 隊

一月二十日 艦隊運送船ヲ護シテ榮城灣ニ至ル、
 一月二十一日 本隊及第一游撃隊威海衛沖ニ至ル、吉野、高千穂夜中威海衛港口ヲ警戒ス、艦隊薄暮東方ニ航行ス、
 一月二十二日 艦隊榮城灣ニ歸着ス、高千穂亦來ル、吉野、秋津洲鷄鳴島附近ヲ偵察ス、本隊ハ北航ス、
 一月二十三日 千代田威海衛沖ヲ警戒シ、本隊榮城灣ニ歸泊ス、日暮第二游撃隊威海衛沖ニ赴ク、千代田威海衛ヨリ歸着ス、
 一月二十四日 浪速偵察ノ爲メ出發ス、第二游撃隊歸來ル、天龍、海門登州ニ航行ス(同日ニ榮城灣ニ歸着ス)
 一月二十五日 高千穂晝間威海衛港外ニ見張ス、夜間ハ本隊警戒ス、
 一月二十六日 高雄晝間同前、夜間ハ第二游撃隊警戒ス、
 一月二十七日 浪速晝間同前、夜間ハ第一游撃隊警戒ス、

水 雷 艇

一月二十一日 第一艇隊ハ鷄鳴島ニ在リ、第三艇隊ハ榮城灣ノ外方ニアリテ山東岬角近傍ヲ警戒ス、
 一月二十二日 第一艇隊ハ前日ノ如ク、第二艇隊ハ榮城灣ニ在リ、第三艇隊ハ鷄鳴島附近ヲ警戒ス、夜ニ至リ第一、第二艇隊共集合點タル鷄鳴島ニアリ警戒ス、
 一月二十三日 第一艇隊ハ前日ノ如ク、第二艇隊ハ威海衛沖ヲ巡邏シ、夜中山東岬角附近ニアリテ衛艇ニ從事ス、第三艇隊ハ陰山口ニ航行シテ歸リ更ニ鷄鳴島ヲ出テ日島附近ニ至リ夜間歸着ス、
 一月二十四日 第一艇隊ハ威海衛沖ニアリテ警戒ス、第二艇隊ハ鷄鳴島馬蘭口及榮城灣ノ間ニ在リテ警戒ス、第三艇隊ハ榮城灣ニアリテ警戒ス、
 一月二十五日 第一艇隊ハ威海衛以外ニ航行シ威海衛ニ歸着ス、第二艇隊ハ前日ノ如ク、第三艇

ス、

一月二十八日 千代田晝間同前、夜間ハ本隊警戒ス、
 一月二十九日 比叡晝間同前、夜間ハ第二游撃隊警戒ス、
 一月三十日 本隊及第一、第二、第三、第四游撃隊ハ砲臺ヲ砲撃シ、夜ニ至リ第一游撃隊ハ威海衛西口沖ニ本隊第二游撃隊ハ鷄鳴島沖ニアリ警戒ス、八重山、大島、天城ハ警戒ノ爲メ止マリテ榮城灣ニ在リ、
 一月三十一日 本隊及第一、第二游撃隊旋轉運動ヲ行ヒ、第四游撃隊及第三游撃隊ノ大和、葛城、武藏モ亦威海衛東口ノ東方ニ運動ス、夜ニ至リ第一游撃隊ハ威海衛西口ノ沖合ニ、第四游撃隊及大和、武藏、葛城ハ陰山口ニ、本隊及第二游撃隊ハ鷄鳴島沖ニアリテ警戒ス、
 二月一日 風波ノ爲メ本隊以下榮城灣ニ歸航ス、
 二月二日 第一游撃隊榮城灣ニ歸着ス、本隊鷄鳴島ニ向航シ夜同處ニ泊ス、

隊ハ威海衛ヲ巡邏シ榮城灣ニ歸着ス、

一月二十五日 第一艇隊ハ鷄鳴島附近ヲ警戒シ第二艇隊ハ榮城灣ニ集マリ山東岬角附近ヲ警戒ス、第三艇隊ハ二小隊ニ分レテ鷄鳴島集合點ヲ發シ、第一小隊ハ威海衛港ヲ偵察、第二小隊ハ金山寨附近ニ出發セシガ風濤ノ爲メ集合點ニ歸航ス、
 一月二十六日 第一第二小隊合シテ再ビ金山寨附近ニ赴キ又集合點ニ歸航シ更ニ榮城灣ニ至リ山東岬角燈臺下ヲ警戒ス、第二艇隊ハ榮城灣ニ歸リ鷄鳴島附近ノ衛艇ニ從事ス、第一艇隊前日ノ如シ、
 一月二十七日 夜半ヨリ風濤起リシ爲メ第一、第二艇隊鷄鳴島ヨリ榮城灣ニ歸リテ投錨ス、第三艇隊モ亦同灣ニ碇泊ス、
 一月二十八日 各艇隊悉ク榮城灣ニ碇泊夜ニ入り灣外ノ警戒ニ從事ス、
 一月二十九日 風益暴威ヲ逞フシ各艇隊中ノ數隻ハ勉メテ出港セシモ警戒スル能ハズ直チニ入

二月三日 本隊鷄鳴島ヲ拔錨シ威海衛附近ニ到リ
他艦ト會ス、第一、第二游擊隊モ榮城灣
ヨリ來會シ、第二游擊隊及筑紫、大和、
武藏、葛城敵ヲ砲撃ス、夜ニ入り第一游
擊隊ハ西口沖、本隊ハ鷄鳴島沖ニアリ
テ警戒ス、

二月四日 本隊及第一、第二游擊隊百尺崖ノ北方
ヲ運動ス、夜ニ入り第二游擊隊ハ西口
ヲ本隊及第一游擊隊ハ警戒線ニ就キ第
二、第三艇隊ハ西口ヲ警戒ス、

二月六日 千代田東口沖ニ見張ス、夜間本隊及第
一游擊隊相合シテ西口方面ヲ、第二游
擊隊ハ鷄鳴島附近ヲ警戒ス、

二月七日 本隊、第一游擊隊ハ劉公島ノ東北ヨリ
東端砲臺ヲ第二、第三、第四游擊隊ハ
東口ノ東北ヨリ日島砲臺ヲ砲撃シ尋デ
第一游擊隊ハ西口ヨリ突出シテ遁逃ス
ル敵ノ水雷艇十餘隻ヲ追撃ス、夜ニ至
リ第二游擊隊ハ水雷艇隊ト共ニ威海衛

一月三十日 港ス、
海陸聯合シテ威海衛東口ノ諸砲臺ヲ攻撃
ノ爲メ各艇隊榮城灣ヲ發シ第一、第二艇
隊ハ威海衛沖ニ赴キ主戰艦隊ト共ニ運動
ス、第三艇隊ハ陸岸ニ近ツキ更ニ陰山口
ニ進入シ、陸上戰況視察ノ爲メ陰山口附
近ヲ偵察シテ來リタル小艦ト共ニ東口ニ
進ミ敵ノ端舟ヲ捕獲シ旗艦ニ致ス、此夜
第一、第二艇隊ハ交々鷄鳴島及威海衛西
口沖ヲ警戒シ、第三艇隊ハ潛航シテ鹿角
嘴砲臺附近ニ進ミ港内ニ突入スルヲ止メ
同港外ヲ警戒ス、

一月三十一日 第一艇隊ハ鷄鳴島ニ在リシガ風濤起リ碇
泊ノ望ナキヲ以テ榮城灣ニ入ル、第二艇
隊ハ威海衛沖ヨリ鷄鳴島ニ到リ亦風濤ノ
爲メ陰山口ニ入り十八號艇ハ旗艦ノ側ニ
到リ昨夜第三艇隊港内ニ突入セントシタ
ルモ事成ラザルヲ報ジ又第一艇隊司令ニ
長官ガ水雷艇闖入ノ確報ヲ希望スル旨ヲ

西口ノ警戒ニ當ル、

二月八日 嚴島威海衛港外ニ留マリ見張ヲ爲ス、
(後チ武藏加ハル)夜ニ至リ第一游擊隊
警戒ノ任ニ當リ又各汽艇ヲ出シテ防材
ヲ破壊ス、

二月九日 我占領砲臺敵艦ヲ砲撃ス、第三游擊隊東
砲臺ノ砲撃ヲ爲シ第一、第二游擊隊聲
援ヲ爲ス此夜水雷艇及第二游擊隊港口
ノ警戒ニ當リ、第一游擊隊ノ汽艇第三
水雷艇隊ト共ニ再ビ防材破壊ニ赴ク、

二月十日 嚴島、橋立ノミ口外ニ留リ八重山ハ第
二軍ノ依頼ニ依リ敵ノ有無ヲ偵察ノ爲
メ寧海州附近ニ至リ翌十一日歸着ス、此
日ヨリ晝間占領砲臺及艦隊ノ一部ハ劉
公島東南尖砲臺ト敵艦隊トヲ砲撃シ、
夜間ハ二三艦東西兩口ニアリテ劉公島
及艦隊ノ碇泊場ヲ時々砲撃スルコトニ
決ス、夜ニ入り本隊ハ港外ヲ警戒シ第
一游擊隊ノ汽艇引續キ防材破壊ヲ企

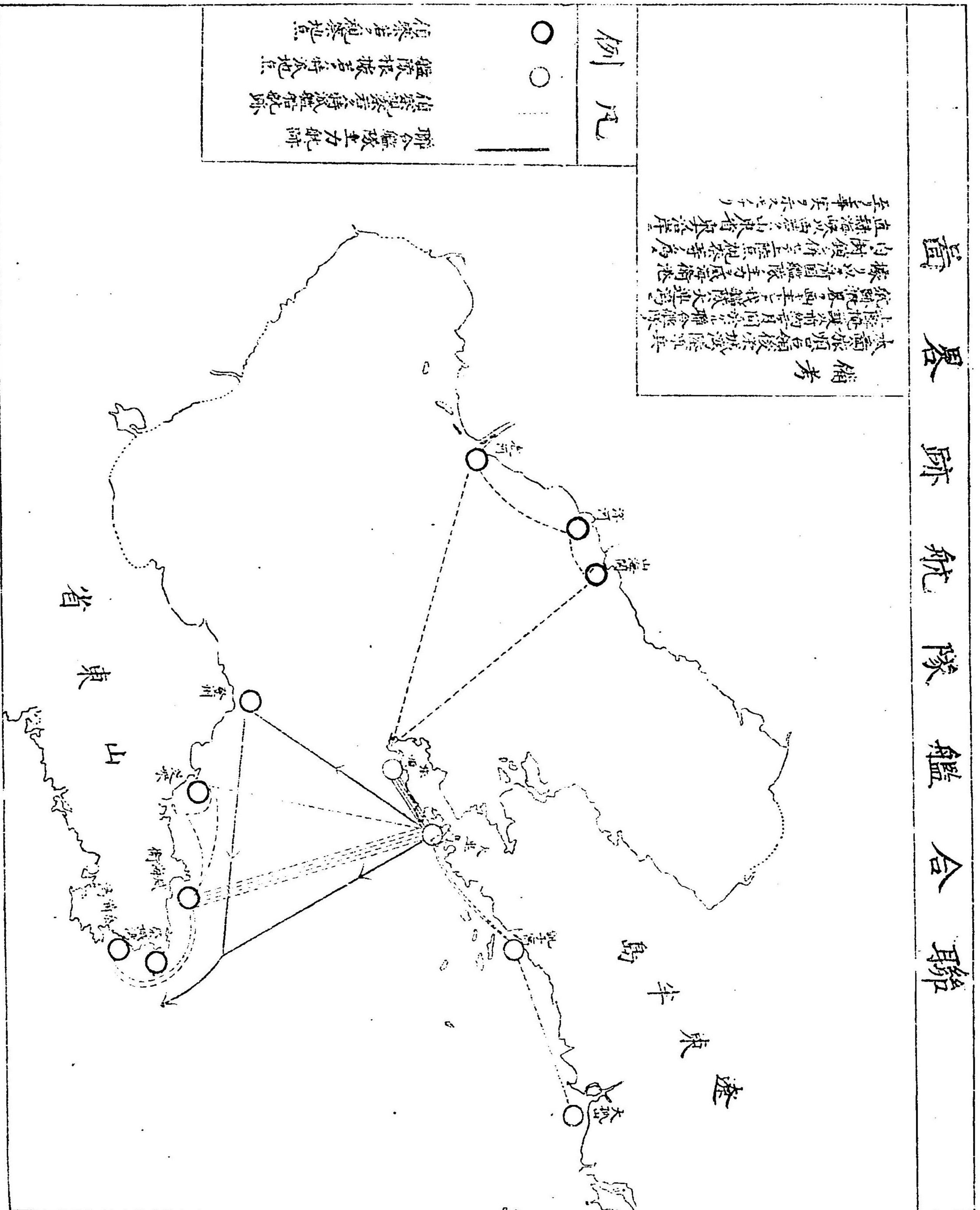
傳へ更ニ第二、第三艇隊司令ニモ此旨ヲ
傳ヘント欲シ陰山口ニ向ハントセシガ風
濤ノ爲メ果サズシテ鷄鳴島ニ假泊ス、

二月一日 再ビ風雪ノ爲メ第一艇隊ハ榮城灣ニ、第二
艇隊ハ鷄鳴島、其他ハ悉ク陰山口ニ錨泊ス、
海上靜穩ニ歸シ第一艇隊ハ鷄鳴島沖ニ赴
キ艦隊ニ會ス、第二十三號艇小艦ヲ率キ
テ威海衛港内ヲ偵察シテ陰山口ニ投錨ス、
夜ニ至リ第一艇隊威海衛西口ヲ警戒シ第
二艇隊十八號鷄鳴島ヲ出デ陰山口ニ歸リ
同隊ト合シ夜ニ入り同港ヲ巡邏警戒ス、
第三艇隊趙北嘴日島間ニ旋轉運動ヲ行ヒ
第二艇隊ト共ニ陰山口ニ歸泊ス、此夕第三
艇隊六號十號陰山口ヲ發シ砲臺ノ端ト龍
廟嘴礁トノ間ニ航路ヲ發見シ砲臺ノ一部
ヲ破壊シ陰山口ニ歸着ス、

二月二日 十八號艇單獨陰山口ヲ發シ劉公島砲臺破
壞ヲ企テシモ浪速ノ爲メ準備圓材ヲ運ビ
陰山口ニ引歸ヘス、

- 二月十一日 第三游撃隊劉公島砲臺ヲ砲撃ス第二、第三游撃隊及千代田晝間港外ノ警戒ニ従事ス、浪速、秋津洲ハ黃島砲臺ノ砲撃ヲ行ヒタル後威海衛港外ヲ警戒ス、
- 二月十二日 浪速、秋津洲前日ノ警戒ヲ續行シ尋デ敵乞降ニ付キ一時攻撃ヲ中止ス第一游撃隊及橋立、嚴島並ニ水雷艇警戒ノ任務ニ當ル、
- 二月十三日 夜ニ至リ水雷艇ノ外金剛、高雄ノミ警戒ニ當ル、
- 二月十四日 浪速、高千穂、水雷艇二隻ト共ニ西口附近ニ出デ支那船ノ清國軍人ヲ載セテ芝罘附近ニ退去スルヲ臨檢ス、本日ヨリ十六日マデハ晝夜警備ス、
- 二月十六日 筑紫、赤城、二三ノ水雷艇ト共ニ入港警備ス、
- 二月十七日 諸艦陰山口ヲ拔錨シ、威海衛港内配置ノ順序ニ投錨シテ降服諸艦ヲ收容ス、
- 二月五日 第二、第三艇隊陰山口ヲ拔錨シ威海衛ノ東口ニ進ミ砲臺附近ニ對シ其内部ニ入りテ敵艦ヲ襲撃ノ後各陰山口ニ歸着シ投錨ス、
- 二月六日 第二艇隊ハ敵艦ヲ襲撃シ陰山口ニ歸着ス、夜間各艇隊依然威海衛東西兩口ヲ警戒ス、而シテ役務ニ服スル艇ト第一艇隊五隻、第二、第三艇隊各三隻ナリ、
- 二月七日 第一、第二艇隊ハ西口ニ、第三艇隊ハ東口ヲ巡邏シ以テ警戒ヲ嚴ニス、
- 二月八日 第三艇隊ハ芝罘方面ノ陸岸ニ擱座セシ敵ノ水雷艇ヲ曳卸シ陰山口假泊地ニ致シタル後東口ニ到リ警戒ス、第一、第二艇隊ハ西口ヲ警戒ス、
- 二月九日 第三艇隊ハ砲臺破壊ニ従事シタル後陰山口ニ歸着ス、
- 二月十日 各艇隊依然港口ヲ警戒ス、
- 二月十一日 夕六號港口ヲ警戒ス、敵旗艦ノ襲撃ヲ企テシガ楊家灘ヨリ引歸セリ、
- 二月十三日 敵艦降服ノ狀明カトナリシモ未ダ港口ノ

聯 合 艦 隊 航 跡 圖



警戒ヲ解カズ、

二月十四日 水雷艇二隻聯合艦隊ニ附屬シテ臨檢ノ任
務ヲ援ケ、是マデ毎夕西口警戒ノ任ニ當
リタル水雷艇ヲ召還シ艦隊附屬ノ水雷艇
ト時々交代シテ警戒ノ任務ニ服セシメ第
三艇隊ヲ以テ臨檢ヲ行ハシム、

二月十六日 第三艇隊ハ警戒ニ従事シ第一、第二艇隊
ハ交々西口ノ外ニアリテ清國船ノ臨檢ニ
従事ス、

二月十七日 十號、五號、六號ノ各艇西口砲臺附近ノ防
材ヲ切斷シ、益々航路ヲ窄大ニシ我艦隊悉
ク入航シテ威海衛ノ占領全ク終ル、

第五期 威海衛陷落ヨリ澎湖島占領ニ至ル

黃海戰勝ノ結果トシテ金州半島及威海衛ハ陷落シ、北洋艦隊ハ全滅シタモノデ、清國ノ戰
鬪力ハ全ク滅シテ、日清兩國勝敗ノ數ハ既ニ終局ヲ告ゲタノデアアル、換言スレバ我海上權
ノ擴張ハ其絶頂ニ達シマシテ、敵ハ最早之ヲ争フベキ勢力ナキモノトナリ了ツタ、斯ノ如
キ有様デアツタカラ我ハ尙一意海上權ノ効力ヲ利用シテ、清國政府ガ到底敵對スルコトノ

我海軍勢力ノ
南方波及ノ時
代

海上權ヲ失ヒシ清國ノ海岸線

出來ナイト云フコトヲ自覺サセル爲メ、直チニ艦隊ヲ二ツニ分ケテ其一隊ヲ北部ニ留メ、他ノ一隊ヲ南部ニ進メテ澎湖島ヲ占領シ、此地ヲ根據地トシテ馬鞍群島以南ノ海上權ヲモ握ラウトシ、之レガ爲メ海軍ノ方デハ本隊第一游撃隊及第四水雷艇隊、陸軍ノ方デハ混成枝隊ヲ派遣シ、伊東艦隊司令長官ノ指揮ノ下ニ一大活動ヲ開キマシタ、而シテ海上權ノナイ敵ノ防禦ハ、寸効モ奏スルコトガ出來ナイデ、一舉ニシテ我軍ノ爲メ占領サレ南北ヲ通シテ殆ド二千六百海里ニ亘レル清國ノ海岸線ハ悉ク我攻撃ニ委セナケレバナラヌヤウニナリマシタ、

是ヨリ先キ清國政府ハ海上權ヲ失ツテ到底防禦スルコトガ出來ナイト云フコトヲ覺リマシテ、二十七年ノ十一月二十八日先ヅ天津稅務司ノ獨逸人デットリングヲ派遣シ、次ニ一月三十日ニハ尙書銜總理各國事務大臣戶部左侍郎張蔭桓及頭品頂戴署湖南巡撫邵友濂ヲ遣ハシテ和ヲ乞ハセタガ、我政府ノ爲メニ兩度トモ拒絕セラレマシタ、ケレドモ彼ハ如何ナル條件ノ下ニモ和ヲ乞ハナケレバナラヌカラ終ニ直隸總督李鴻章ヲ全權大臣トシ三月十八日ニ馬關ニ來リテ媾和ヲ議シ、其結果遼東半島及臺灣島ヲ我ニ割讓シ、賠償金二億兩ヲ支拂フコトヲ約シテ茲ニ兩國ノ平和ガ克復サレルヤウニナツタノハ、全ク海上權獲得ノ結果デアルト言ハナケレバナラヌ、

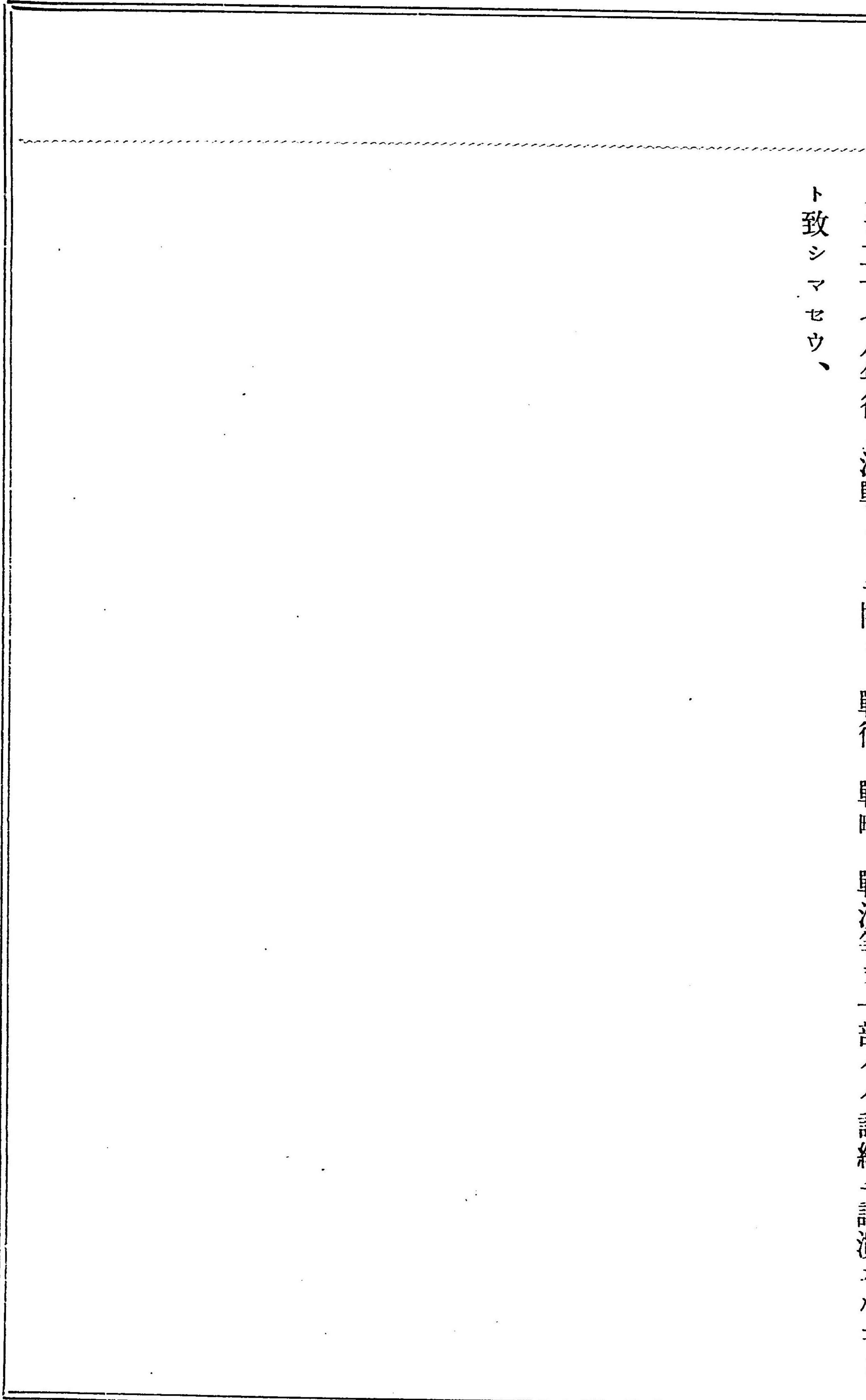
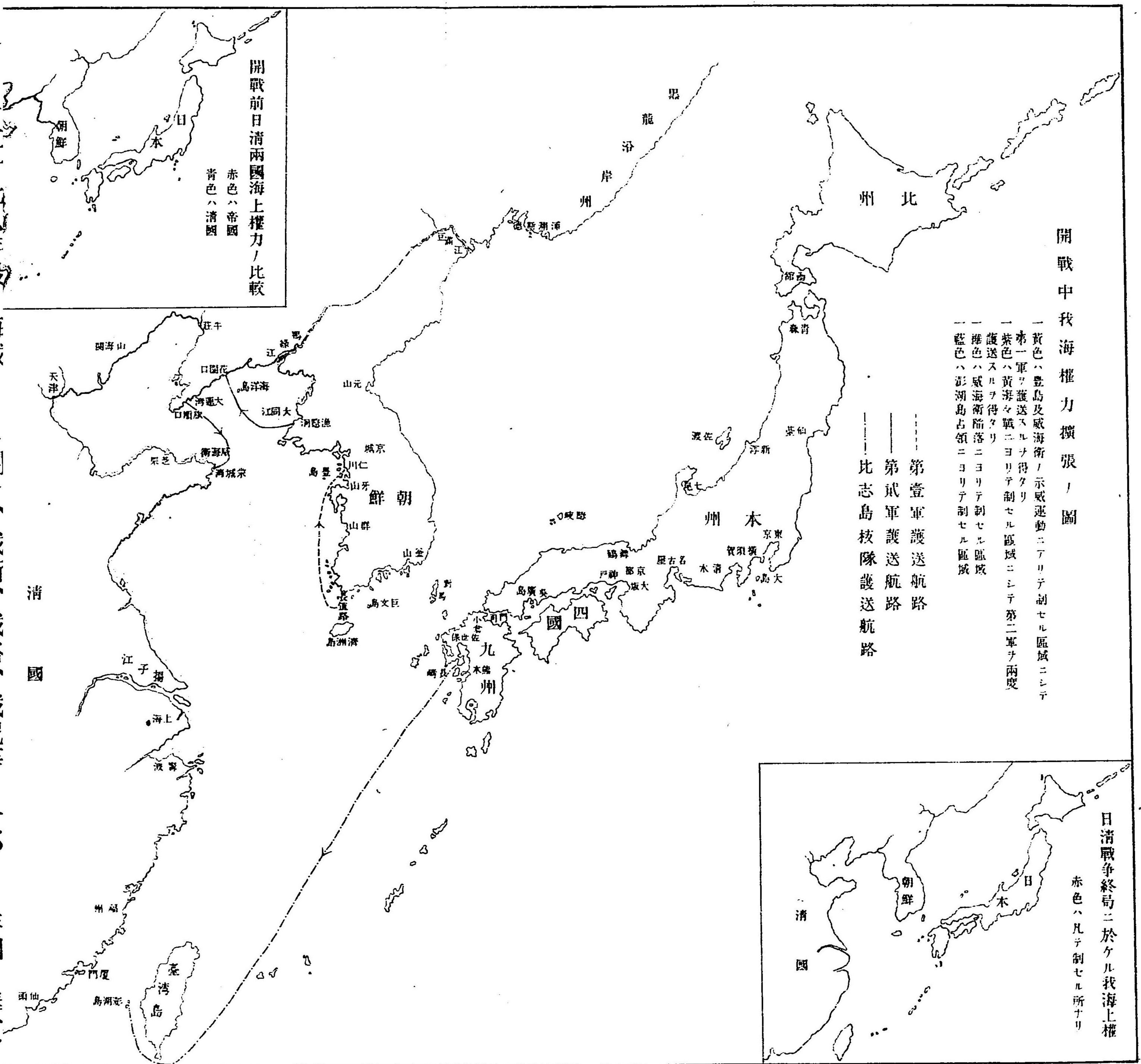
平和ノ克復ハ我レ海上權ヲ占有セシニア

古今一貫ノ眞理

斯ノ如ク海上權獲得ノ結果トシテ、清國ニ對シテ折角得タル我權利ハ、更ニ我ヨリ優勢ナル艦隊ヲ備ヘタ大敵手ガ現ハレタ爲メ、遺憾ナガラ空シク既得ノ半バヲ放棄シナケレバナラヌヤウニナリ、遂ニ遼東半島還附ノ詔敕ヲ拜讀スルコトニナツタノデアアル、併シ今ヤ我海軍ハ駭々トシテ長足ノ進歩ヲ爲シ、數年ナラズシテ、六大戰鬪艦六大巡洋艦モ悉ク竣工スルノデアアルカラ、必ズ後來有事ノ日ニ當ツテハ目醒シキ活動ヲナシテ、帝國ノ威權ヲ伸張スルコトデアラウガ、兎ニ角我國民ノ血ヲ流シテ取ツタ新領土ガ、海軍力ノ不足ノ爲メニ放抛スルノ已ヲ得ザルニ立チ至ツタ一事ハ國民ノ深ク腦裡ニ印スベキ事デ、是迄說キ來ツタ古來ノ歴史ニ徴スルモ、如何ナル時如何ナル場合ニ於テモ、敵手ニ對シテ優勢ナル海上ノ勢力ヲ有セザレバ毎ニ國權ヲ維持スルコトガ出來ヌト云フコトハ明瞭デアラウ、戰術軍略ナドハ時勢ノ進歩ト共ニ變化シテ行クガ、歴史ヲ一貫セル眞理ハ決シテ變ズルモノデハ無イ、

本講演モ時間ガ少ナイ爲メ充分申述ベルコトガ出來ナカツタノハ甚ダ遺憾ニ堪エマセヌガ、大體ノ筋道丈ハ了リマシタカラ、諸君ニ於テモ御暇ガアツタラ尙ホ御研究ヲ願イタイ、帝國ニハ古來海上ニ關スル歴史ガ少ナイトハ云フモノ、研究スレバ其趣味津々トシテ教訓ヲ得ルコト頗ル大ナルモノアルヲ信ジマス、先ヅ今日ヲ以テ一段落トシ更ニ編ヲ改

メテ二十七八年後ノ海軍ノミニ關シテ戰術、戰略、戰況等ヲ一部々々詳細ニ講演スルコトト致シマセウ、



本附表ハ第十三章ノ章末(即チ三五六頁)ニ挿入スヘキモノナリ再版ノ日ヲ待テ訂正スヘシ

部

海軍所轄艦船ニ於テ消耗ノ石炭高ハ合計一千百七十九萬四千百五十九斤デ、之ヲ各艦ニ分掲スレバ即チ左表ノ如クナル、

艦船名	消耗石炭高	艦船名	消耗石炭高	艦船名	消耗石炭高
春日	二、二四五、九一九斤	龍驤	一、三〇四、八二九斤	筑波	一、四四九、三七〇斤
東日	三三四、一六〇	淺間	一、一〇〇、九〇〇	日進	一、二一四、三九二
清輝	一、一八二、五五一	孟春	八三八、三一七		七六六、九〇四
丁卯	四六三、七五〇	雷電	八四、〇〇〇		一、一四三、二二七
合計	一二、二八、三一九				

表中各艦船石炭消耗ノ日數ハ二月九日ヨリ算ヲ起シ横濱ニ凱旋ノ日ニ終ル、但龍驤、丁卯二艦ノ鹿兒島ニ駐マル者ハ班師ノ令下ルノ日、淺間艦ハ六日佐賀ノ關ニ還ルノ日、高雄丸ハ朝鮮行ノ命ヲ受ケ鹿兒島出港ノ日ニ止ム、其ノ他附屬雇船ニ費ス所ノモノハ姑ク之ヲ略ス、

砲銃部 附火箭

(西南役附表)

石炭部

海軍所轄艦船ニ於テ消耗ノ石炭高ハ合計一千百七十九萬四千五百五十九斤デ、之ヲ各艦ニ分掲スレバ即チ左表ノ如クナル、

艦船名	消耗石炭高	艦船名	消耗石炭高	艦船名	消耗石炭高
春日	二、二四五、九一九 <small>斤</small>	龍驤	一、三〇四、八二九 <small>斤</small>	筑波	一、四四九、三七〇 <small>斤</small>
東日	三三四、一六〇	淺間	一、一〇〇、九〇〇	日進	一、二一四、三九二
清輝	一、一八二、五五一	孟春	八三八、三一七		七六六、九〇四
丁卯	四六三、七五〇	雷電	八四、〇〇〇		一、一四三、二二七
合計			一一、二八、三一九		

表中各艦船石炭消耗ノ日數ハ二月九日ヨリ算ヲ起シ横濱ニ凱旋ノ日ニ終ル、
 但龍驤、丁卯二艦ノ鹿兒島ニ駐マル者ハ班師ノ令下ルノ日、淺間艦ハ六日佐賀ノ關ニ還ルノ日、高雄丸ハ朝鮮行ノ命ヲ受ケ鹿兒島出港ノ日ニ止ム、其ノ他附屬雇船ニ費ス所ノモノハ姑ク之ヲ略ス、

砲銃部 附火箭

日本帝國海上權力史講義 関

總計	銃		拳銃		小銃		軍用火箭				砲			
	合計	管打彈藥	中折彈藥	合計	スナイデル空包	スナイデル彈藥	ヘンリーマーチニーマ	火箭				合計	カッターリン彈藥	
								三斤	六斤	九斤	二十四斤			
二六、三六				八、三〇〇		二、四〇〇	五、九〇〇				二、五〇		一、三、一〇〇	八、四〇〇
三一、五四〇	一、七三		一、七三	二、九、九七		二、九、二七	七、六〇	三、五、一		三、五、〇				
一、八六七	五、〇	五、〇		一、二、八六		一、二、八六		五、〇	二、〇	三、〇				
九、三三				四、九〇		四、九〇		五、八	五、八					
一、五四〇				一、三、八〇		一、三、八〇								
三、〇六七				二、七、六〇	三、八〇	二、三、八〇		六、九	三、三	三、八				八、四
九、二九五				七、九、九〇		七、四、四〇	五、五〇	二、一	一、〇	八	三			
八、四八〇				七、五、〇〇		七、五、〇〇		一、二、八	五、〇	七、八				
一〇、二〇一				九、六、一一	五、四〇	八、八、四三	二、二、八	一、五			一、五			
四、〇二七				三、六、三〇	三、〇	三、六、〇〇		一、八		一、八				
二、八七、二六六	三、三三	五、〇	一、七三	一、四、七、八、二、四	九、五〇	八、六、三、三八	六、〇、五、三八	九、六〇	一、六、九	七、七、三	三		一、三、一、一〇〇	八、四〇〇

機	砲白			砲微忽			砲短長		砲銅		砲ル一ユ				
	合計	二十九擲榴彈	十二擲榴彈	合計	二十四斤			合計	四斤榴彈	合計	六十斤榴彈	六十斤實彈	合計	二十斤榴彈	四十斤實彈
					榴霰彈	霰彈	榴彈								
四七、二〇〇	一、四、七、四	三〇〇	四、五〇												
				八、三	八	一、四	六〇						五、四、八		
								二、二、五	二、二、五						
								七、二	七、二						
								三、五	三、五						
													三、八	七、六	八、四
								六、三〇	六、三〇						
	二、一〇		二、六	八、五				四、二	四、二						
										三、六、二	三、五、一	二			
	三、〇		三、〇												
四七、二〇〇	一、四、七、四	三〇〇	五、九、六	八〇、九	八、三	八	一、四	六〇	九、九、四	九、九、四	三、六、二	二、五、一	一、一	七、八、六	八、四

明治三十七年九月十日印刷
明治三十七年九月十三日發行

日本帝國海上權力史講義

實價 金貳圓

著者

小笠原長生

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者

和田 勉 兌

東京市日本橋區兜町二番地

印刷者

齋藤章達

東京市日本橋區通四丁目角

發行所

春陽堂

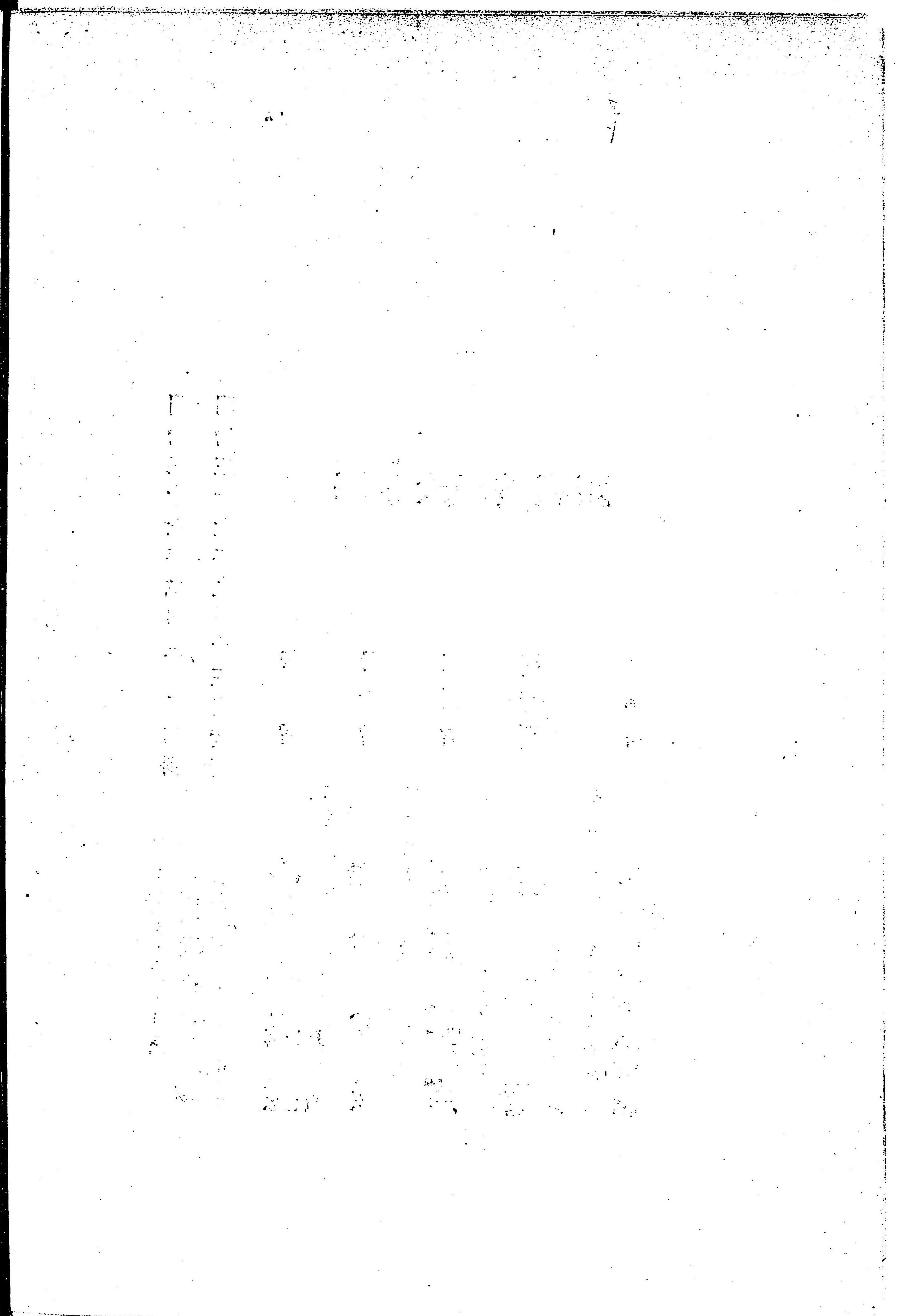
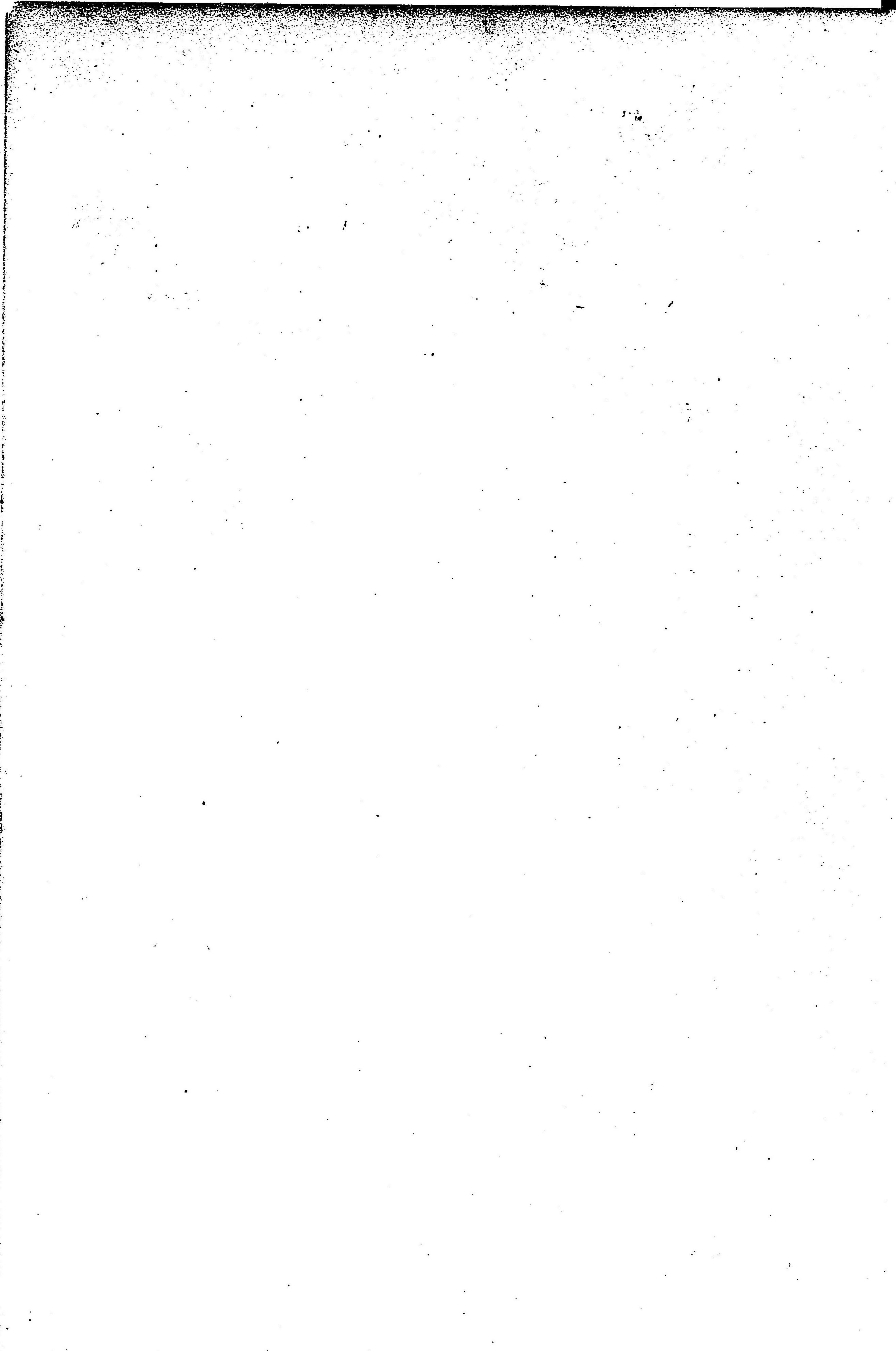
電話本局五十壹番

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所

東京印刷株式會社

海軍大學校藏版



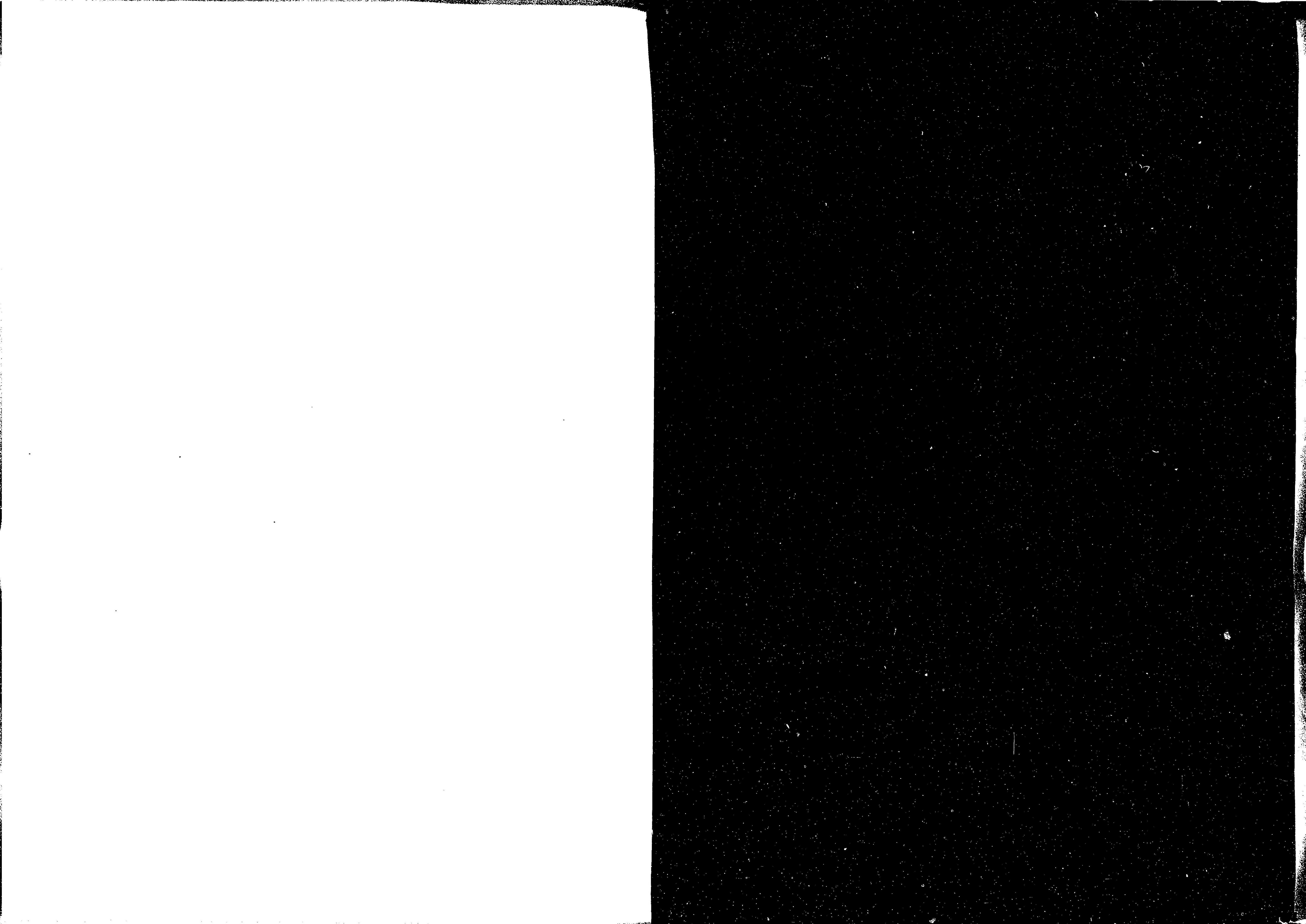
八
號
百
貳
×
ノ
ル

六
號

昭和六年六月廿九日
小牧安見繁

35. 4. 12

35. 4. 12



051181-000-4

397.21-0247

日本帝国海上権力史講義

小笠原 長生/著

M37

BFA-0365



